

# 仙 台 城 跡

青葉山公園整備事業に係る  
追廻地区  
埋没堀跡（第7次）・広瀬川護岸石垣天端（第8次）  
発掘調査報告書

2023年3月

仙台市教育委員会



# 仙 台 城 跡

青葉山公園整備事業に係る  
追廻地区  
埋没堀跡（第7次）・広瀬川護岸石垣天端（第8次）  
発掘調査報告書

2023年3月

仙台市教育委員会





1 埋没堀跡調査地区全景と堀・土壠の推定位置（上が北）



2 広瀬川護岸石垣天端調査区全景（南から）



3 埋没堀跡 2 区 SX-4 土留遺構（西から）



4 埋没堀跡 4 区の堀跡北東部の遺構群（南から）

## 序 文

仙台藩初代藩主伊達政宗が慶長5年（1600）に青葉山の地に城を定め、広瀬川を挟んだ台地に城下の建設を開始して以来、歴代の藩主が築いてきた「仙台」の町は、その町割りや産業を土台として近代都市に変貌し、現在は人口100万人を超える東北の中心都市として発展することが出来ました。明治になって城が明治政府の管理となると、大広間をはじめとする本丸の御殿は破却され、軍の施設となっていた二の丸御殿は火災によって焼失しました。また、かつての仙台城の姿を伝えていた大手門と脇櫓も昭和20年7月の空襲で焼失しました。今は大手門北側の土塀と、随所にみられる石垣や堀跡などに往時の面影が残るだけとなっておりますが、政宗公騎馬像が立ち、仙台屈指の眺望を誇る本丸跡を中心に観光スポットとして内外の皆様に親しまれております。

平成15年に仙台城跡が国の史跡に指定されたことを契機に、仙台市教育委員会では文化庁の補助を得て各所の発掘調査を行い、その成果をもとに説明板の設置、遺構表示など失われた仙台城の理解を深めるための史跡整備事業を実施しております。また、仙台城跡周辺には、本丸跡の西側に「東北大學付属植物園」、二の丸跡に「東北大學」、その北側には「宮城県美術館」、東丸（三の丸）跡には「仙台市博物館」、追廻地区の南側に「テニスコート」などの文教施設があり、さらに二の丸跡の東側にはコンベンションホールの「仙台国際センター」や「地下鉄東西線国際センター駅（仙台城跡入口）」などの諸施設と「広瀬川」の自然があります。そして、これらをつなぐように仙台城跡の東部地区は「青葉山公園」となっております、仙台市の「歴史・文化・芸術・スポーツ・交流・自然」を備えた地域として、仙台市民や来訪者の新たな憩いと活動の場としての空間となることが期待されております。このため青葉山公園の追廻地区では、来訪者に向けて「杜の都仙台の歴史・文化」を発信し、青葉山の自然と広瀬川に囲まれた空間で多くの人が憩い、集うことのできる施設として『仙臺緑彩館』の建設とその周辺の整備が進められております。

追廻地区は、近世には重臣や侍の屋敷、厩、馬場があった区画で、明治時代までは東丸との境に「長沼」と組みになる堀があったと伝えられており、仙台城にとっても重要な区画であったと考えられます。現在、この区画は史跡に指定されていませんが、遺跡を将来に残すため、公園整備に当たっては土を盛って遺構を保護し、盛土に収まるように工事が行われております。

今回の調査は、堀跡については公園整備の前にその位置を確認すること、石垣部については遺構に影響を与えるずに園路設置工事が可能かどうか判断するためのものです。

公園整備により、仙台城跡とその周辺が市民や来訪者の様々な活動の場となるとともに、追廻地区的遺構が長く保護され、将来の調査と研究に資することを期待します。

最後になりましたが、今回の発掘調査及び報告書刊行にご協力、ご指導いただいた皆様に心から感謝申し上げます。また本書が仙台城跡の研究や文化財の保護の一助となれば幸いです。

令和5年3月

仙台市教育委員会  
教育長 福田 洋之

# 例 言

1. 本書は、宮城県仙台市「青葉山公園」の整備事業に伴い、令和3年度に実施した仙台城跡追廻地区（史跡指定地）における巽門東方の「埋没堀跡」（仙台城跡追廻地区第7次調査）及び「広瀬川護岸石垣天端」（仙台城跡追廻地区第8次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本件調査に関わる仙台城跡の公園整備計画の取扱いは、宮城県教育委員会との協議及び指導に基づいて実施した。
3. 本件に関わる発掘調査は、仙台市教育委員会文化財課 長島栄一、須貝慎吾、沼倉幸司、吉田 大が担当し、整理作業は調査担当者との協議のうえ沼倉幸司及び同課会計年度任用職員 工藤哲司が担当した。本書の作成は、沼倉、須貝と協議のうえ工藤が行った。
4. 出土した陶磁器の鑑定については、元仙台市教育委員会文化財課職員 佐藤 洋氏に依頼して行った。
5. 堀跡出土木簡の判読については、仙台市博物館学芸普及室長 水野沙織氏に依頼して行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の機関及び方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。  
(敬称略・順不同)

宮城県教育委員会文化財課・仙台市博物館・藤澤 敦・北野博司・金森安孝・佐藤 洋

7. 第7次調査のドローン撮影には太田亮司氏に協力をいただいた。

また、青葉山公園の整備を担当する仙台市建設局公園整備課からは発掘調査等に係る各種支援を受けた。

8. 本調査並びに報告書作成に関わる写真・図面等の記録及び出土遺物等の諸資料は、仙台市教育委員会が保管・管理している。

# 凡 例

1. 本書中の地形図は、仙台市作成の現況測量図（1:500）の他に、国土地理院発行の1:50000『仙台』と1:10000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2. 本書の座標値は世界測地系に基づいており、図中の方位は座標北である。また、高さは標高値で記した。
3. 遺構の略号は下記の通りである。（使用のもの）  
SD：溝跡・堀跡 SK：土坑 SX：その他の遺構（杭列・土留・石組 他） P：ピット
4. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・竹原：2001）を使用した。
5. 本書中の遺構図版・遺物図版の縮尺については、各図版に記した通りである。
6. 遺物観察表の中で法量を（ ）で示したものは残存値である。
7. 瓦の計測部位の表記は下図上段のとおりである。
8. 木製品の実測図には下図下段の表現を使用した。



# 目 次

巻頭カラー図版

序 文

例 言 ・ 凡 例

目 次

I.はじめに.....	1	(4)出土遺物.....	34
1. 調査に至る経過.....	1	6. 4区の状況.....	39
2. 調査体制.....	1	(1)調査区の概要.....	39
II.仙台城跡の概要.....	3	(2)基本層序.....	39
1. 仙台城跡の地理的環境.....	3	(3)検出遺構.....	40
2. 仙台城跡の歴史的環境.....	3	(4)出土遺物.....	42
(1)仙台城築城以前の歴史.....	3	7. 埋没堀跡の調査成果のまとめ.....	64
(2)仙台城の歴史.....	3	(1)埋没堀跡の位置・形状・	
(3)仙台城廃城後の歴史.....	7	規模について.....	64
3. 仙台城跡の発掘調査.....	7	(2)岸部検出の杭列について.....	64
III.埋没堀跡の調査.....	11	(3)岸部斜面の石列等について.....	64
(仙台城跡追廻地区第7次調査)		(4)堀跡内側の盛土(土壘)について.....	64
1. 仙台城跡追廻地区と埋没堀跡.....	11	(5)堀跡外側の整地層について.....	66
(1)仙台城における追廻地区.....	11	(6)堀跡の埋没過程について.....	66
(2)埋没堀跡の役割と過去の調査.....	11	IV. 広瀬川護岸石垣天端の調査.....	67
2. 調査概要.....	11	(仙台城跡追廻地区第8次調査)	
(1)調査目的.....	11	1. 仙台城跡追廻地区と広瀬川護岸石垣.....	67
(2)調査方法.....	15	(1)仙台城における広瀬川護岸石垣.....	67
(3)各調査区共通の基本層序.....	15	(2)広瀬川護岸石垣の過去の調査.....	67
3. 1区の状況.....	15	2. 調査概要.....	67
(1)調査区の概要.....	15	(1)調査の目的.....	67
(2)基本層序.....	15	(2)調査方法.....	67
(3)検出遺構.....	16	(3)基本層序.....	71
(4)出土遺物.....	17	3. 検出遺構と出土遺物.....	71
4. 2区の状況.....	20	(1)調査区の概要.....	71
(1)調査区の概要.....	20	(2)検出遺構.....	72
(2)基本層序.....	20	(3)出土遺物.....	74
(3)検出遺構.....	20	4. 広瀬川護岸石垣天端の調査成果	
(4)出土遺物.....	26	のまとめ.....	74
5. 3区の状況.....	33	(1)検出遺構について.....	74
(1)調査区の概要.....	33	(2)護岸石垣の年代について.....	74
(2)基本層序.....	33	【参考文献】	
(3)検出遺構.....	33		

## 図 目 次

第1図	仙台城跡の位置と周辺の遺跡·····	4
第2図	仙台城跡周辺地形図と調査地点·····	5
第3図	仙台城跡追廻地区における過去の調査区···	8
第4図	追廻地区 堀跡（第7次）調査区 と護岸石垣天端（第8次）調査区の位置···	10
第5図	埋没堀跡の絵図・地図·····	12
第6図	埋没堀跡 1区平・断面図·····	13・14
第7図	1区 SD-1 堀跡と SX- 2 杭列·····	16
第8図	1区出土遺物実測図·····	17
第9図	埋没堀跡 2区平・断面図·····	21・22
第10図	2区 SD-1 堀跡の SX- 3 杭列と SX- 4 土留遺構·····	23
第11図	2区出土遺物実測図（1）·····	24
第12図	2区出土遺物実測図（2）·····	25
第13図	2区出土遺物実測図（3）·····	26
第14図	埋没堀跡 3区平・断面図·····	31・32
第15図	3区 SD-1 堀跡の SX- 5 杭列と礫群···	34
第16図	3区出土遺物実測図·····	35
第17図	埋没堀跡 4区平・断面図·····	38
第18図	4区 SD-1 堀跡北東角付近の遺構群···	41
第19図	4区出土遺物実測図（1）·····	43
第20図	4区出土遺物実測図（2）·····	44
第21図	4区出土遺物実測図（3）·····	45
第22図	4区出土遺物実測図（4）·····	46
第23図	4区出土遺物実測図（5）·····	47
第24図	4区出土遺物実測図（6）·····	48
第25図	4区出土遺物実測図（7）·····	49
第26図	4区出土遺物実測図（8）·····	50
第27図	4区出土遺物実測図（9）·····	51
第28図	4区出土遺物実測図（10）·····	52
第29図	4区出土遺物実測図（11）·····	53
第30図	埋没堀跡と土壙の推定位置·····	65
第31図	絵図に描かれた広瀬川護岸石垣と 調査箇所の近況·····	68
第32図	仙台城跡第14次調査 広瀬川護岸 石垣（大橋南側）立面図·····	69
第33図	広瀬川護岸石垣天端調査区平面図·····	70
第34図	広瀬川護岸石垣天端北壁断面図·····	71
第35図	広瀬川護岸石垣天端検出ピット断面図··	72
第36図	広瀬川護岸石垣天端出土遺物実測図···	73

## 表 目 次

第1表	仙台城の沿革·····	6
第2表	埋没堀跡 1区土層注記·····	13・14
第3表	埋没堀跡 2区土層注記·····	21・22
第4表	埋没堀跡 3区土層注記·····	31・32
第5表	埋没堀跡 4区土層注記·····	39
第6表	広瀬川護岸石垣天端北壁土層注記···	71
第7表	広瀬川護岸石垣天端検出ピット土層注記···	72

## 写 真 図 版 目 次

写真図版 1	調査区遠景·····	9
写真図版 2	1区出土遺物·····	17
写真図版 3	1区全景と検出遺構·····	18
写真図版 4	1区の土層断面·····	19
写真図版 5	2区全景と検出遺構·····	27
写真図版 6	2区の杭・土留遺構と土層断面·····	28
写真図版 7	2区出土遺物（1）·····	29
写真図版 8	2区出土遺物（2）·····	30
写真図版 9	3区出土遺物·····	35
写真図版 10	3区全景と検出遺構·····	36
写真図版 11	3区の土層断面·····	37
写真図版 12	4区全景と検出遺構·····	54
写真図版 13	SD - 1 堀跡北東角の状況·····	55
写真図版 14	4区の土層断面·····	56
写真図版 15	4区出土遺物（1）·····	57
写真図版 16	4区出土遺物（2）·····	58
写真図版 17	4区出土遺物（3）·····	59
写真図版 18	4区出土遺物（4）·····	60
写真図版 19	4区出土遺物（5）·····	61
写真図版 20	4区出土遺物（6）·····	62
写真図版 21	4区出土遺物（7）·····	63
写真図版 22	広瀬川護岸石垣と調査状況·····	75
写真図版 23	広瀬川護岸石垣天端調査遺構（1）···	76
写真図版 24	広瀬川護岸石垣天端調査遺構（2）···	77
写真図版 25	広瀬川護岸石垣天端出土遺物·····	77

## I. はじめに

仙台城跡追廻地区における「埋没堀跡発掘調査」及び「広瀬川護岸石垣天端発掘調査」は、仙台市「青葉山公園」の整備事業に伴い令和3年度に野外調査が、令和4年度に整理作業が下記の通り実施された。

### 1. 調査に至る経緯

「青葉山公園」は仙台城跡の本丸東部から二の丸東部、東丸（三の丸）等の史跡指定地から史跡指定地外の追廻地区にわたる広大な公園で、仙台城跡を挟んで天然記念物青葉山から広瀬川に広がる自然と歴史・文化に恵まれた仙台市のシンボルとなる公園である。平成9年度に「青葉山公園整備計画」が策定され、その後平成15年に仙台城跡が国史跡に指定されたことなどを受け、平成17年に策定された「青葉山公園整備基本計画報告書」では整備の内容が史跡・遺跡の保存を重視した内容に改められた。現在は平成25年に策定された「青葉山公園整備基本計画」に基づいて整備が進められている。追廻地区では平成29年に策定された「青葉山公園（仮称）公園センター基本計画」に基づいて、公園のビジターセンター『仙臺緑館』とその周辺整備が令和5年度のオープンを目指して進行中である。

公園センターを含む追廻地区的整備事業に当たっては、まず平成19年度から20年度に追廻地区全体の試掘調査が行われた（仙台市文化財調査報告書第350集2009年3月）。その結果、本地区は明治維新後は軍の練兵場や射撃場となり、戦後は満州からの引揚者や仙台空襲によって家を失った人のための住宅地となつたが、地区全域に何らかの遺構が残存することが明らかになつた。この状況に基づいて、追廻地区的公園整備に当たっては遺構の保存を図るために、事業予定地には盛土を行い、建物や植樹等はその盛土内に収まるように施工する方針となつた。

『仙臺緑館』建設予定地は、青葉山公園の計画当初から追廻地区入口にあたる「片倉小十郎屋敷跡」付近とされていた。平成24年度から平成26年度に建築予定地の遺構確認調査を行つた結果、屋敷に関わる可能性のある礎石建物跡・掘立柱建物跡・堀跡・溝跡・石組み・石敷き・井戸跡・廐穴等の多くの遺構が検出され、屋敷の西辺を推定するに至つたが、遺構の残存状況が悪く、片倉屋敷の絵図等との比較によって絵図に描かれた建物位置を明らかにするには至らなかつた（仙台市文化財調査報告書第444集2016年3月）。調査結果については「青葉山公園に関わる仙台城跡整備委員会」と並びに「仙台城跡調査指導委員会」に報告し、「将来的に史跡指定を目指し、遺構を保存しながら整備を行っていくべき」との指導を受け、方針の通り盛土の中に構造物等が収まるように工事が行われている。

このような経過に沿つて追廻地区的公園整備が進められる中で、『仙臺緑館』建設に伴う暫定の駐車場を異門東方の埋没堀跡に、また追廻地区から広瀬川の川岸に降りる通路（階段）を広瀬川護岸石垣の崩落個所にそれぞれ設置する計画が具体化した。そのため宮城県教育委員会の指導に沿い、暫定の駐車場については堀跡の位置確認のため、通路については工事遂行の可否の判断をするために遺構の残存状況の確認する発掘調査を実施することとなつた。

### 2. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

（令和3年度：現地調査）

調査担当 文化財課 課長 都丸 晃彦 調整担当主査 長島 栄一

仙台城史跡調査室長 鈴木 隆

主任 大江 美智代 主任 沼倉 幸司

主事 須貝 慎吾 主事 佐藤 恒介 主事 吉田 大

（令和4年度：整理作業・報告書刊行）

整理担当 文化財課 課長 都丸 晃彦 調整担当主査 長島 栄一

仙台城史跡調査室長 鈴木 隆

主査 沼倉 幸司 主任 大江 美智代

主事 佐藤 恒介 会計年度任用職員 工藤 哲司

## 2. 調査体制

### 委員会

発掘調査を適正に実施するために、その状況を下記の委員で構成される「仙台城跡調査・整備委員会」に報告し、指導・助言を得た。

委員長 藤澤 敦（東北大学 教授）※

副委員長 北野 博司（東北芸術工科大学 教授）※

委員 奥村 晃子（一般社団法人東北観光推進機構推進本部 本部長代理）

委員 龍橋 俊光（東北大学 准教授）※

委員 佐浦 みどり（有限会社東北工芸製作所 常務取締役）

委員 佐々木 貴弘（国土交通省東北地方整備局 東北国営公園事務所所長）

委員 渋谷 セツコ（建築と木子供たちネットワーク仙台 副代表）

委員 永井 康雄（山形大学 名誉教授）※

委員 深沢 百合子（東北大学 名誉教授）※

〈仙台城跡調査・整備委員会開催日〉

第6回 令和3年8月19日

〈仙台城跡調査・整備委員会 調査部会開催日〉

令和3年10月26日、同28日（出席者は氏名の後に※印で表示）

調査期間 埋没堀跡：令和3年5月10日～7月9日

広瀬川護岸石垣天端：令和3年7月14日～8月3日

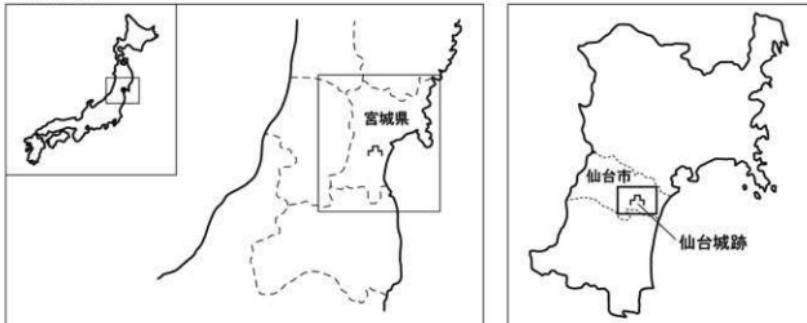
整理期間 令和4年5月16日～令和5年3月20日

調査面積 埋没堀跡：1区約116m<sup>2</sup>・2区約112m<sup>2</sup>・3区約144m<sup>2</sup>・4区約68m<sup>2</sup> 計約440m<sup>2</sup>

広瀬川護岸石垣天端：約85m<sup>2</sup>

調査・整理参加者 相澤隆子、追木愛美、石倉 邦、太田裕子、鹿野麗子、桂島通子、菅家婦美子、椎野達也、高橋克也、沼崎雅弘、田中春美、増田瑞枝、松田 進、山口修希、結城龍子、渡辺寿夫

（仙台城跡の場所）



## II. 仙台城跡の概要

### 1. 仙台城跡の地理的環境

仙台城跡は、仙台市の中心市街地を望む青葉山丘陵東端及びその麓の河岸段丘部分を中心に形成された近世城郭である。城は大きく「本丸」・「二の丸」・「東丸（三の丸）」に分かれるが、それぞれが異なる段丘面に造られている。

本丸は青葉山丘陵の高位段丘である青葉山段丘面（標高 115 ~ 138m）に位置し、その規模は正保 2 年（1645）の「奥州仙台城絵図」に「東西百三十五間、南北百四十間」とあり、一間を六尺として換算すると東西 245m、南北 267m になる。本丸の南側は落差約 40m の竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる 60m 以上の断崖に守られた天然の要害になっている。下位の段丘面から傾斜が比較的緩やかな本丸北側には高さ約 17m の石垣が築かれている。西側は本丸から尾根続きの丘陵で、尾根筋に 3 条の大規模な堀切が確認されている。この丘陵は藩政期には立ち入りが禁じられ、「御裏林」と呼ばれる森林が広がっていた。森林は近代においてもそのまま残されていたことから、戦後は東北大大学の植物園となり、昭和 47 年（1972）には貴重な自然が評価されて国天然記念物「青葉山」として指定されている。

本丸の麓部の河岸段丘上には二の丸と東丸が置かれている。二の丸は本丸の北西に位置し、一段下った仙台土町段丘（標高 54 ~ 71m）に立地する。南と北は広瀬川に向かって流れる二つの沢に挟まれ、西側は本丸同様に御裏林に続く。東側は段丘崖が土手となり、大手門跡付近には崖面に沿うように高さ約 9m の石垣が築かれている。

東丸は本丸の北東に位置し、二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘上（標高 40m 程度）に立地する。西側から北側にかけての本丸及び二の丸との間は段丘崖となり、比較的急峻な斜面となっている。北側から東側は水堀と土塁に囲まれている。本丸の崖下となる南側にはかつては土塁と堀が存在し、東面の堀と土塁の間は本丸へと上る登城路となり、巽門から清水門、沢門へと続いている。東丸の東側はより低位の下町段丘面となり、重臣の屋敷や厩・馬場が広がっていた追廻地区となる。さらにその東は仙台城の外堀とも言える広瀬川が流れ、岸部分には 250 m 以上にわたり当時の石垣が残存している。

### 2. 仙台城跡の歴史的環境

#### (1) 仙台城築城以前の歴史

現在の仙台市の中心市街地は、伊達政宗による仙台城築城とその城下町建設以降に形成される。仙台城築城以前の遺跡として、後期旧石器時代から古代の遺跡である青葉山 A ~ E 遺跡がある。いずれも丘陵上に形成された遺跡で、青葉山 A 遺跡からはナイフ形石器・石刀・スクレーパーなどが出土している。青葉山 E 遺跡では縄文時代早期の竪穴住居や遺物がまとめて出土している。仙台城跡二の丸に隣接する川内 A 遺跡や川内 B 遺跡からも縄文時代の遺物が出土している。追廻地区では弥生土器や古代の土師器・瓦が出土しているが、遺跡の実態は不明である。

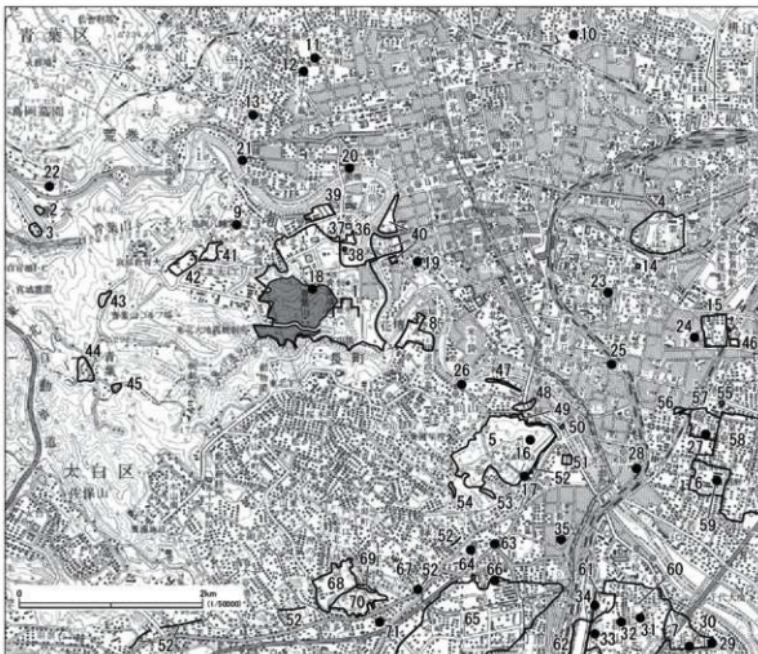
仙台城跡の周辺にある中世の遺構には、信仰に関わる遺跡として御裏林の中に川内古碑群があり、弘安 10 年（1287）と正安 4 年（1302）の板碑が立つ。仙台城跡が立地する青葉山にはかつて寺院があったとする伝承があり、仙台城の南東にある愛宕山の大満寺虚空蔵堂は、仙台城の築城に伴って現在の地に移転したと伝えられる。仙台城跡周辺は中世期においては宗教的な場であったことがうかがわれる。

仙台城築城以前には、国分氏がこの地域を治め、その居城である「千代城」があったとされている。千代城に関する記録では、天正年間（1573 ~ 1592）以降は廢城になったと考えられている。平成 10 年（1998）の本丸北壁石垣修復工事に伴う調査では、政宗の築いた仙台城とは異なる時代の虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出され、仙台城跡にはその前身となる中世山城が確実に存在していたことも明らかになっている。

#### (2) 仙台城の歴史

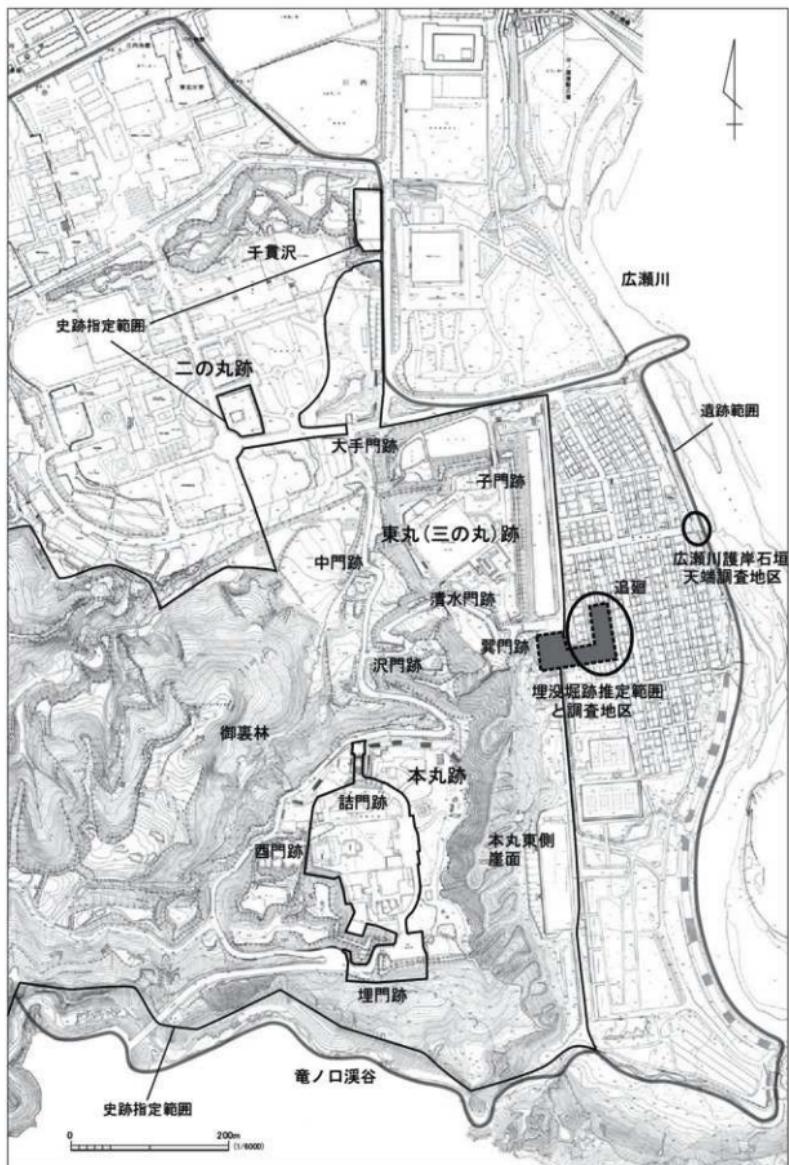
仙台城は仙台藩初代藩主伊達政宗が築き、幕末まで藩政の中心となった城である。慶長 5 年（1600）12 月 24 日に城の繩張りが開始され、慶長 7 年（1602）5 月には一応の完成をみたとされる。築城当初の仙台城は未解明の部分が多いが、国分氏の千代城の繩張りも利用しながら構築したものと考えられている。この地はそれまで「千代」と呼ばれていたが、築城の際に政宗が「仙台」と改めたとされている。

2. 仙台城跡の歴史的環境



城館跡		23	成覚寺板碑	47	愛宕山横穴墓群A地点
1	仙台城跡(アミは天然記念物)	24	陸奥国分寺五輪塔	48	愛宕山横穴墓群B地点
2	葛岡城跡	25	三宝荒神社板碑群	49	大年寺山横穴墓群
3	郷六御殿跡	26	長徳寺板碑	50	宗禪寺横穴墓群
4	国分難館跡	27	猫塚古墳・少林神社板碑群	51	兜塚古墳
5	茂ヶ崎城跡	28	古城神社板碑	52	杉土手(鹿除土手)
6	若林城跡	29	古峯神社板碑	53	茂ヶ崎横穴墓群
7	北目城跡	30	宅地古碑群	54	ニツ沢横穴墓群
神社・寺院・墓所等		31	郡山三丁目古碑群	55	法領塚古墳
8	経ヶ峯伊達家墓所	32	八幡社古碑群	56	保春院前遺跡
9	魚岡八幡神社	33	長町駅裏古碑群	57	養種園遺跡
10	東熙宮	34	西台畠板碑群	58	南小泉遺跡
11	政宗灰塚	35	蛸薺師古碑群	59	朝鮮ウメ
12	林子平墓	その他の主な遺跡		60	郡山遺跡
13	大崎八幡神社	36	川内A遺跡	61	西台畠遺跡
14	三沢初子の墓など	37	川内B遺跡	62	長町駅東遺跡
15	陸奥国分寺跡	38	川内C遺跡	63	一塚古墳
16	大年寺山伊達家墓所	39	川内武家屋敷遺跡	64	二塚古墳
17	大年寺惣門	40	桜ヶ丘公園遺跡	65	富沢遺跡
板碑・石碑		41	青葉山B遺跡	66	金岡八幡古墳
18	川内古碑群	42	青葉山E遺跡	67	砂押古墳
19	片平仙台大神宮の板碑	43	青葉山C遺跡	68	芦ノ口遺跡
20	誠不動尊文永十年板碑	44	青葉山A遺跡	69	土手内横穴墓群
21	延元2年板碑	45	青葉山D遺跡	70	三神峯遺跡
22	郷六大日如来の碑	46	薬師堂東遺跡	71	裏町古墳

第1図 仙台城跡の位置と周辺の遺跡



第2図 仙台城跡周辺地形図と調査地点

第1表 仙台城の沿革

時期	年号	西暦	主な出来事
二の丸造営以前（仙台城築城期）	天文6年	1537	千代城として国分氏の居城が存在、仙台城の前身
	慶長5年	1600	政宗、千代を仙台と改め、城普請の継張を実施
	慶長6年	1601	政宗、仙台城普請を開始し、自らも仙台に移る（築城開始：第I期石垣）
	慶長8年	1603	政宗、仙台城に入城
	慶長15年	1610	仙台城大広間・懸造・書院・能舞台が完成
	元和2年	1616	地震により本丸石垣・櫓（橹などか）が被害 政宗による修復が開始（第II期石垣）
	元和6年	1620	松平忠輝の改易により、五郎八姫が江戸屋敷に帰され、宗秦屋敷の北側に西屋敷の造営開始
	寛永13年	1636	政宗、江戸桜田邸で死去。忠宗二代藩主となる
二の丸造営後（仙台城完成期）	慶長5年～寛永15年	1600～1638	東丸（三の丸）は政宗の下屋敷であったと考えられる
	寛永15年	1638	二代藩主忠宗により、二の丸の普請が開始（1639年6月完成）
	正保2年	1645	東丸（三の丸）は『奥州仙台城繪図』に「藏屋敷」と記載
	正保3年	1646	地震により本丸石垣が崩れ、櫓が倒壊する
	寛文4年	1664	東丸（三の丸）は『仙台御城下繪図』に「御米蔵」と記載
	寛文8年	1668	地震により、仙台城本丸石垣が崩れる 四代藩主綱村による修復開始（第III期石垣）
	寛文9年	1669	東丸（三の丸）は『仙台城下絵図』に「御米蔵」と記載
	寛文11年	1671	寛文事件（伊達騒動）起ころ
	天和2年	1682	東丸（三の丸）は『奥州仙台城並城下絵図』に「東丸」と記載
	元禄4年	1691	東丸（三の丸）は1686～1694年頃の『御修覆帳』に「三之御丸御米蔵」と記載、「三の丸」の名称の初現
	元禄年間	17世紀末	二の丸が大改修され、中奥が拡張される
	宝永7年	1710	東丸（三の丸）は1711～1749年頃の『御修覆帳』に「三丸御米蔵」と記載
	享保15年	1730	東丸（三の丸）は『陸奥国仙台城普請窓』に「東丸」と記載
	文化元年	1804	雷火のため二の丸全焼
	文化2年	1805	九代藩主周宗、二の丸再建に着手（1809年4月完成）
近代以降（廢城以降）	明治元年	1868	仙台藩降伏
	明治2年	1870	版籍奉還に伴い、二の丸に勤政庁を設置
	明治4年	1871	東北鎮台（後の仙台鎮台）を仙台城二の丸に移し、明治7年頃までに仙台城本丸が破却される
	明治15年	1882	仙台鎮台の失火により二の丸建物は焼失し、その後跡地に陸軍第二師団司令部が建てられる
	昭和6年	1931	大手門・脇櫓を国宝指定
	昭和20年	1945	仙台空襲によって、大手門・脇櫓、巽門焼失
	昭和40年	1965	大手門脇櫓建設着工（1967年12月完成）
	平成9年	1997	本丸北壁石垣修復工事に伴う本丸跡の発掘調査を開始
	平成13年	2001	本丸大広間などの発掘調査を開始
	平成15年	2003	仙台城跡国史跡指定
	平成16年	2004	本丸北壁石垣修復工事完成
	平成23年	2011	東日本大震災で石垣・土塀、崖地など各所が崩落・変形の被害
	平成28年	2016	東日本大震災の災害復旧工事が完了
	令和3年	2021	2月の福島県沖地震で中門石垣等に被害
	令和4年	2022	3月の福島県沖地震で本丸北西石垣、西門石垣、土塀等に被害

山上の本丸には、天守は築かれなかったが城下や登城口の方向に4棟の3階櫓が築かれ、慶長15年（1610）に完成了大広間を中心とした書院や能舞台等の御殿建物、城下を見下す崖際には懸造などが存在し、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等による桃山文化の集大成とも言える建物群が威容を誇っていたと考えられる。

築城当初は本丸と東丸（三の丸）を中心とする城郭で、本丸や東丸からは政宗築城期の遺構や遺物が発見されている。築城期の本丸は、これまでの調査によって現在見られる繩張りと異なっていることが明らかになっており、現在のような本丸の繩張りとなるのは、寛文8年（1668）の地震により被災した石垣の修復後と考えられている。また、西脇櫓・東脇櫓・良櫓・巽櫓などの三階の櫓は、正保3年（1646）の地震によって倒壊したとする記事がみられ、以後再建されることはなかった。築城当初、後に二の丸となる山麓部には政宗の四男である伊達宗泰や長女である五郎八姫の屋敷があったと伝えられ、東北大大学の調査でそれを裏付けるような遺構や遺物が検出されている。

寛永13年（1636）に政宗が死去し忠宗が二代藩主となると、宗泰の屋敷があったとされている場所に二の丸の造営を開始した。それ以降は二の丸が藩政の中心となり、東丸・重臣武家屋敷などが一体となって城を形成していた。また、二の丸は貞享4年（1687）から元禄13年（1700）にかけて四代藩主綱村によって中奥の拡張などの大きな改造が行われ、この時期に仙台城の基本的な構成が完成することとなる。

二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘上に位置する東丸には、築城当初は政宗の私邸の屋敷があったと考えられている。東丸の周囲には水堀と土塁がめぐり、現在も残存している。二の丸が造営された寛永年間には米蔵が置かれたと考えられる。また、東丸南側の巽門と清水門の間の平場には、政宗が大和から職人を招いて酒造りをさせた造酒屋敷が置かれたといわれ、発掘調査でこの屋敷に係る建物やカマド跡・井戸跡等が発見されている。

### （3）仙台城廃城後の歴史

仙台藩が戊辰戦争に敗れると仙台城は、明治2年（1869）の版籍奉還を受けて二の丸に明治政府の勤政庁が置かれ、明治4年（1871）には東北鎮台（後に仙台鎮台）となる。大広間等の本丸の建物群も東北鎮台の管理下に置かれ、明治の初めに破却されたようである。二の丸の殿舎は政府の庁舎として使われていたが、明治15年（1882）の火災により全て焼失した。

明治21年（1888）に仙台鎮台は陸軍第二師団となり、二の丸には師団司令部が置かれる。一方で更地となつていた本丸には、明治35年（1902）に昭忠碑、明治37年（1904）に仙台招魂社が建立された。招魂社は昭和14年（1939）に宮城縣護國神社となり現在に続く。

仙台城の面影を残していた中門は大正9年（1920）に取り壊され、仙台城の威容を示す国宝の大手門及び脇櫓は、巽門と共に昭和20年（1945）の仙台空襲によって焼失した。現在は大手門北側の土塀が江戸時代からの姿を残す唯一の建物である。戦後、二の丸跡は米軍の駐屯地となり、施設建設のため中島池の埋め立て工事などの造成が行われた。昭和32年（1957）に米軍から土地が返還されると、二の丸のほとんどは東北大大学が使用し、一部が公園となつた。東丸（三の丸）跡には昭和36年（1961）に仙台市博物館が建設された。昭和42年（1967）には大手門脇櫓が再建されている。本丸跡は神社の境内地や青葉山公園として利用されている。

## 3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡の調査は、昭和58年（1983）に実施された東北大大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の新築工事に伴い昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査から始まる。

本丸跡の発掘調査は、小規模な試掘調査を除けば、平成9年（1997）の石垣修復工事に伴う調査を始めとする。本丸北壁石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が行われ、石垣の解体に伴う発掘調査が行われた。この石垣修復工事に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）の背面から二期の旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、本丸石垣に変遷があることが明らかになった。

平成13年（2001）からは、国の補助を受けて大広間跡・登城路等の発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施している。平成17年（2005）以降は、東丸（三の丸）の土塁や埋没跡の位置確認の調査が行われ、土塁の構造や塁跡の西部の位置などが明らかになった。また、巽門と清水門の間の平場にある造酒屋敷跡を対象とし

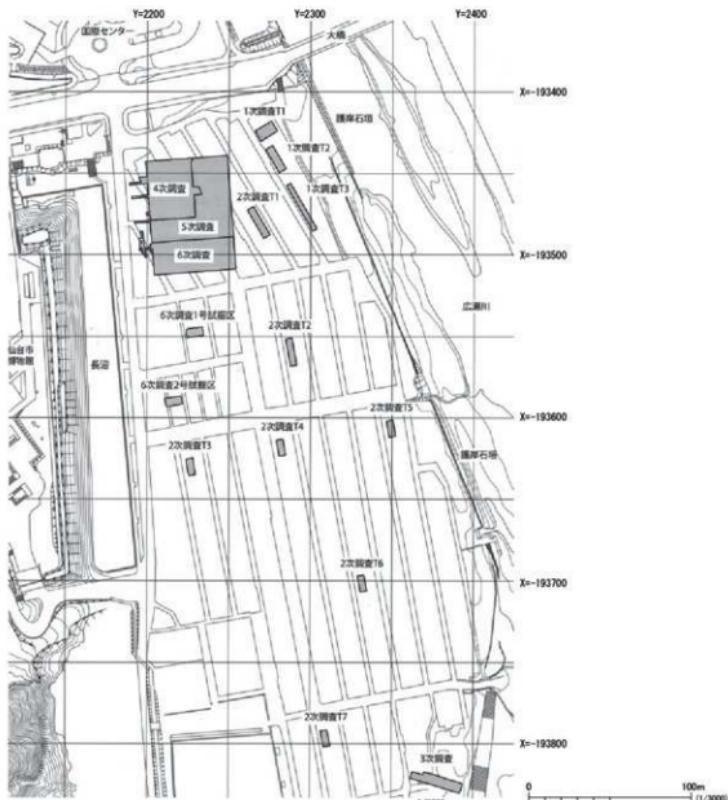
### 3. 仙台城跡の発掘調査

た調査が、平成 20 年（2008）から平成 30 年（2018）にかけて 6 度実施されている。この調査では仙台藩の御用酒屋であつた樋森家の屋敷跡や井戸跡、酒造りに使われたと考えられるカマド跡も検出された。国庫補助による測量等を含む学術調査は、令和 4 年（2022）3 月までに 41 次にわたり実施されている。

また二の丸北方では平成 16～21 年（2004～2009）には高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査が行われた。

平成 15 年（2003）5 月に三陸沖を震源とする地震により中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、平成 15～17 年（2003～2005）に災害復旧工事を行い、平成 23 年（2011）3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では本丸跡と周辺崖地・大手門北側土壠・本丸北西石垣・西門石垣・中門石垣・清水門石垣などが被災し、平成 23～28 年に災害復旧工事を行い、この際に工事に伴う発掘調査を実施した。

追廻地区的調査は、仙台市青葉山公園整備に伴う遺構確認調査が平成 19～20 年（2007～2008：1～3 次調査）に行われ、地区全域に遺構が存在することが明らかとなった。さらに公園のビジターセンター建設に関わる発掘調査が平成 24～26 年（2012～2014：4～6 次）に行われ、片倉小十郎屋敷に関係すると考えられる遺構群が確認された。公園整備に関わる調査で検出された遺構は部分的な掘削は除きそのまま不織布や砂で保護した上で埋め戻している。また、公園整備に当たっては追廻地区に広範囲に盛土を行い、遺構を保存したうえで工事が行われている。



第 3 図 仙台城跡追廻地区における過去の調査区

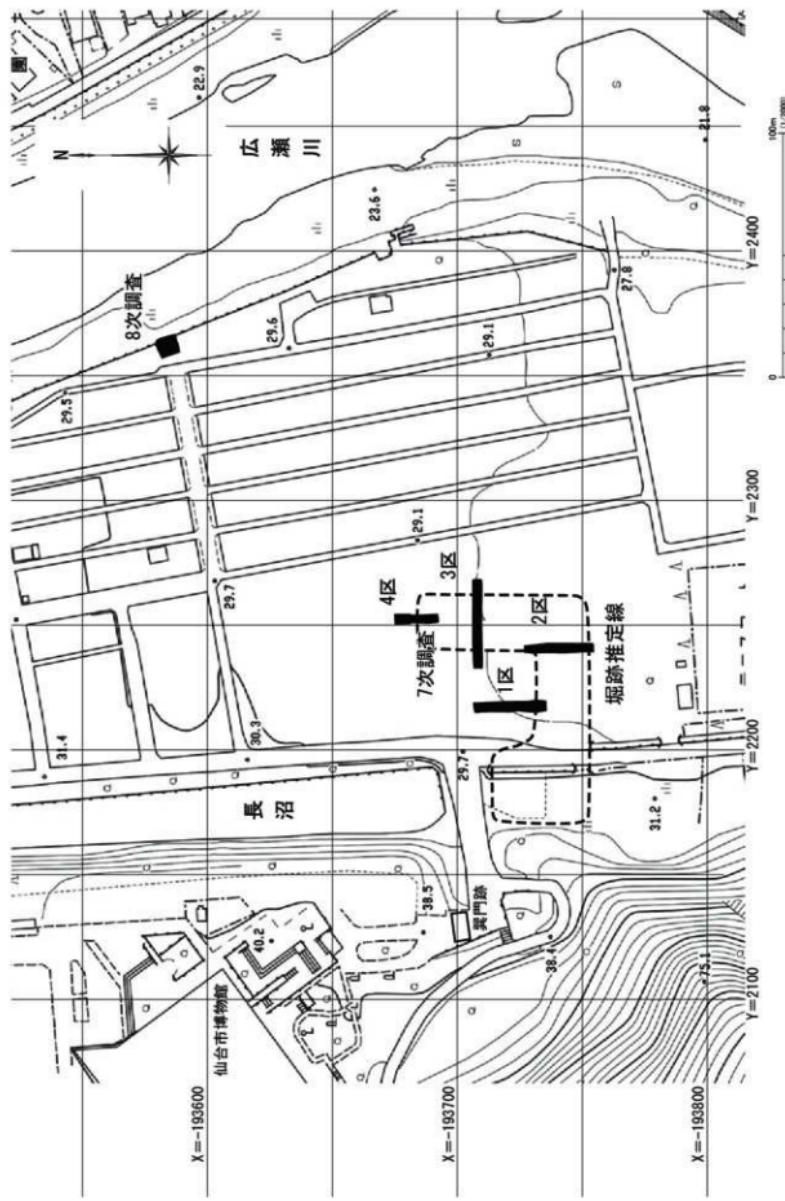


1 仙台城跡と調査区の位置（東から）



2 埋没堀跡の調査区配置（上が北）

写真図版 1 調査区遠景



第4図 追跡地区 堀跡（第7次）調査区平面図と広瀬川複岸石垣天端（第8次）調査区の位置

### III. 埋没堀跡の調査（仙台城跡追廻地区第7次調査）

#### 1. 仙台城跡追廻地区と埋没堀跡

##### (1) 仙台城における追廻地区

追廻地区は、仙台城本丸東側の崖下及び東丸（三の丸）東側の堀（長沼）と広瀬川護岸石垣に挟まれ、北は大橋から大手門に続く大手道、南は広瀬川の湾曲した流路に囲まれた南北約600m、東西最大幅約200mの平坦地である。仙台城の近世絵図では、「侍屋敷」、「馬屋」ないし「厩」、「馬場」などの記載があり、大手道から長沼に沿って巽門に通じる南北方向の道や、巽門から広瀬川護岸石垣までの東西に延びる道が描かれている。東西の道を広瀬川を挟んだ対岸まで延長すると、政宗の別荘があった「花壇」地区となる。大手道に面した侍屋敷の北側の区画には仙台藩の重臣「片倉小十郎」の仙台屋敷も置かれていた。現在、追廻地区は史跡に指定されていないが、仙台城本丸や東丸と一緒にとなった重要な区画であったと考えられている。

追廻地区的西辺中央南寄りの巽門東方には、現在は埋まってしまい痕跡は残っていないが、正保2年（1645）の「奥州仙台城絵図」以来多くの絵図に描かれる堀が存在したことが知られている。（第5図1）。この堀は明治15年（1882）頃の地図では確認できるが、大正元年（1912）の地図では姿を消し、追廻地区全城が整理され、練兵場や射撃場の土壘に変化している（第5図2・3）。この埋没した堀は長沼と一体となった仙台城の重要な防御施設と考えられる。

##### (2) 埋没堀跡の役割と過去の調査

現在、巽門東方の堀は完全に埋まっているが、絵図によるとその平面形は西側が短い凹字状を呈し、平面形状が座んだ内側には土塁が築かれていたようである。堀及び土塁の北側には、大手道からの通路が長沼に沿って南北に続き、西に折れて巽門につながる。この通路は東にも折れて広瀬川護岸石垣方向に東西にも延びる。さらに埋没堀の東辺は馬場に接続している。埋没堀は土橋を挟んで長沼と組み合わさり、北側に開く馬出状の虎口を形成している。さらにこの堀に挟まれた土橋から巽門までの区画は、周りを土塁に囲まれて梯形の空間を形成していたようである。巽門からの登城路は、複雑に屈曲する急な登り道で、清水門、沢門、本丸詰門を通り本丸に至る非常に防御性の高い造りとなっている。この埋没堀から本丸に至る登城路には要所に野面積みの石垣も配されており、仙台城の築城当初の大手道であったとする考えもある。このように、今回の調査対象の埋没堀跡は、仙台城の防御施設や、当初の登城路の場所・構成を理解する上で、非常に重要な遺構である。

埋没堀跡のうち長沼に沿った市道より西側の国史跡指定地については、平成17年度（仙台城跡第13次調査「仙台城跡6」2006）、平成18年度（仙台城跡第16次調査「仙台城跡7」2007）、平成19年度（仙台城跡第18次調査「仙台城跡8」2008）に国庫補助事業として遺構確認調査が行われた。調査の結果、埋没堀跡の西岸は本丸東側崖下の急傾斜地となっていることが明らかになった。また堀西岸の北岸と南岸の位置も確認されている。南岸部では新旧2時期の盛土層とこの盛土に伴う3列の杭列が確認されている。調査により堀の形状と規模が推定できるようになり、西部の南北幅は35～40mであることが明らかになった。堀の岸部では杭列の他に石組や集石なども確認されている。

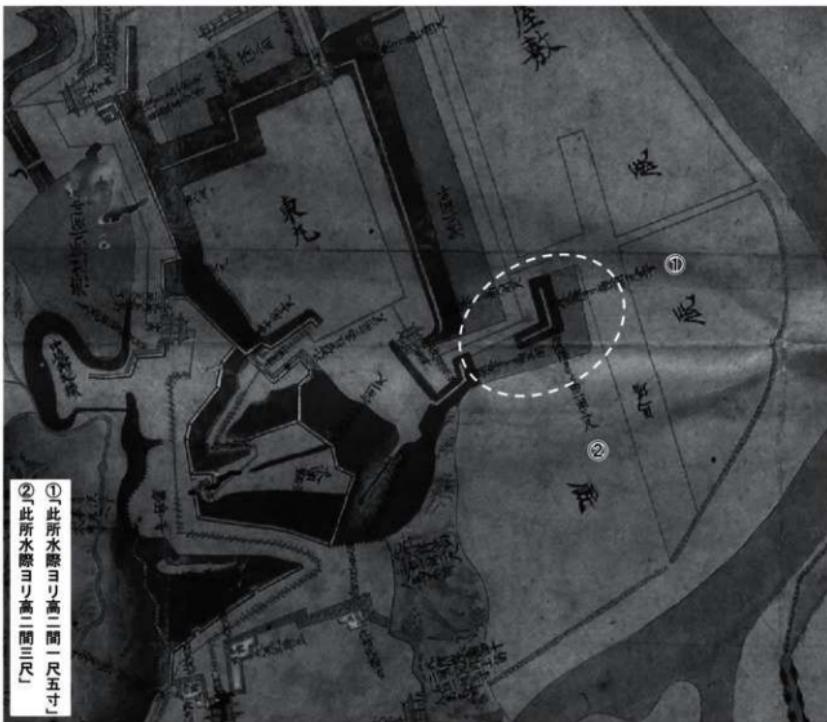
#### 2. 調査概要

##### (1) 調査目的

仙台城跡追廻地区では、「青葉山公園」のビジターセンターの機能を備えた『仙臺緑彩館』の建設とその周辺整備が、令和5年の完成を目指して進められている。今回の調査対象となった巽門東方の「埋没堀跡」の地区は、「青葉山公園整備基本計画」（2013）の全体計画では「堀跡の復元」が計画されていたが、堀跡より南側の地域は、テニスコート及びその利用者駐車場として使用されており、当面は駐車場の造成が困難であることから、『仙臺緑彩館』を中心として新たに整備された公園の利用者駐車場を暫定的に確保するため、「埋没堀跡」を含むこの地区が「仙台市博物館」や「巽門ルートの登城路」にも近いことから、臨時の駐車場の対象地区となつた。

今回の調査は、臨時の駐車場の造成工事に先行し、平成17年度から19年度の調査で明らかになった埋没堀跡の統一の確認と、近世絵図に堀の北側に描かれた土塁の存在を確認することを目的とした。

2. 調査概要



1 天和 2 年 (1682)「奥州仙台城井城下絵図」(宮城県図書館蔵)



2 明治 15 年 (1882)「仙台区近傍村落の図」  
(仙台市博物館蔵)



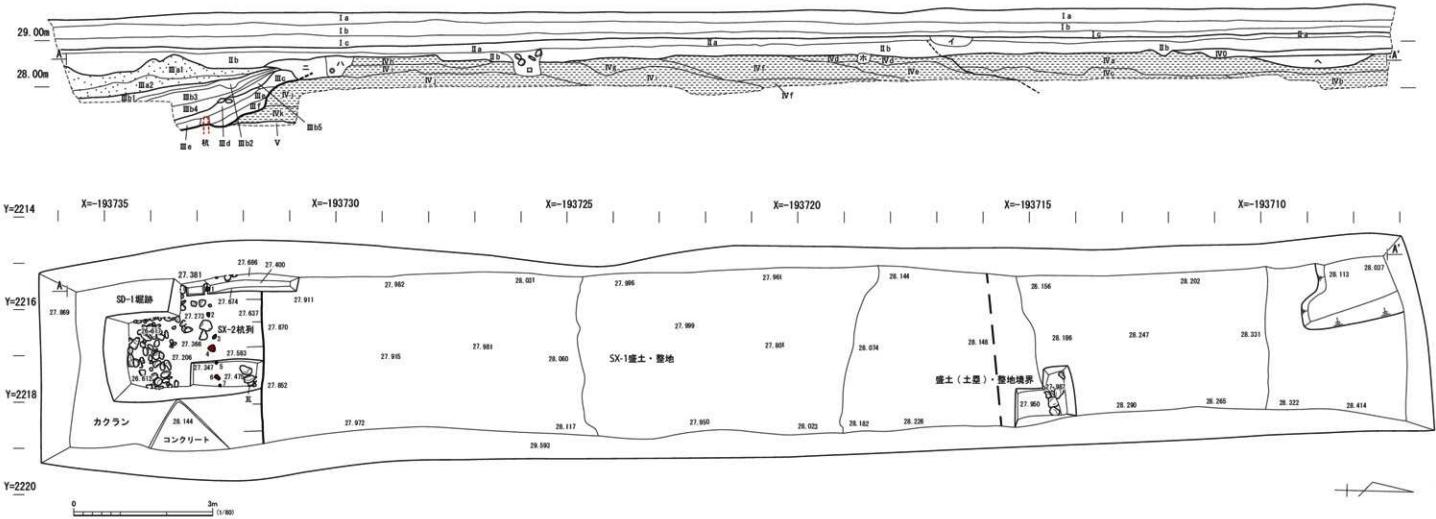
3 大正元年 (1912)「最新版市街町村及び番地入仙台全図」  
(仙台市博物館蔵)

第 5 図 埋没堀跡の絵図・地図

第2表 埋没堀跡1区土層注記

層名	土色	土性	備考	成因
I-a	2.SY4/3 オリーブ褐色	細	鉛石層	
I-b	2.SY5/4 黄褐色	シルト	小礫を多く含む	公園整備に伴う盛土・整地層
I-c	2.SY5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	礫を多く含む	
II-a	10YR3/3 にぶい黄褐色	シルト	径1~4cmの礫を多量に含む	追廻住宅築造後の整地層
II-b	2.SY3/3 銀オーラー褐色	シルト	炭化物鉱物をちらりと含む 木の依存性を地盤に含む 室壓強化	炭化物鉱物をちらりと含む 木の依存性を地盤に含む 室壓強化
III-a	10YR7/7 黄褐色	シルト	上部に小礫を含む	転埋立て土層
III-b	2.SY4/3 オリーブ褐色	シルト	炭化物鉱物をちらりと含む 細繊維を微量に含む	炭化物鉱物をちらりと含む 細繊維を微量に含む
III-b2	10YR3/3 緑褐色	粘土質シルト	炭化物鉱物をちらりと含む 褐岩片をまばらに含む	炭化物鉱物をちらりと含む 褐岩片をまばらに含む
III-b3	10YR4/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	未分解の植物遺体を微量に含む	未分解の植物遺体を微量に含む
III-b4	SY3/2 オリーブ黒色	シルト	未分解の植物遺体を微量に含む	未分解の植物遺体を微量に含む
III-b5	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	下部に小礫をまばらに含む	下部に小礫をまばらに含む

層名	土色	土性	備考	成因
III-c	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	鉛石鉱物をまばらに含む 径1~2cmの礫を微量に含む	岸部の堆積土
III-d	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	人間大からの大小の礫を多量に含む	
III-e	2.SY5/3 黄褐色	砂質シルト	砂利を含む 未分離の植物遺体を含む	水の影響を受け比較的強、黒褐色土のブロックを含む
III-f	5Y5/2 死オーローブ色	シルト質粘土	砂利を強烈に含む 黒褐色土を含む	温潤な状況での堆積土
IV-a	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	細小礫を多く含む	土壌崩落?
IV-b	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	鉛石鉱物をまばらに含む 大小の礫を多量に含む	追廻地区的整地層?
IV-c	10YR2/1 黒褐色	粘土	鉛石土のブロックを多量に含む 黒褐色土のブロックを含む	
IV-d	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	鉛石鉱物をまばらに含む 未分離の植物遺体を含む 径1~2cmの礫を微量に含む	未分離の植物遺体をまばらに含む 黒褐色土のブロックを含む
IV-e	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	未分離の植物遺体をまばらに含む 径1~4cmの礫を多量に含む	土壌崩落?
IV-f	2.5Y5/2 広褐色	シルト	鉛石鉱物をまばらに含む 黒褐色土を含む	土壌基底部の盛土帶
V	2.5Y5/2 緑暗黄色	シルト質粘土	砂利を含む 黒褐色土を含む	土壌基底部の盛土帶
イ	10YR2/1 黒褐色	シルト	未分離の植物遺体をまばらに含む	当該地の冲積層
ロ	10YR2/2 黒褐色	シルト	大型の礫を多く含む	追廻住宅期の施設?
ハ	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	砂利や礫をまばらに含む 黄褐色土のブロックを含む	水道管理施設
ニ	10YR2/2 黒褐色	シルト	山砂や礫を含む	追廻住宅期の廻削坑
ホ	2.5Y5/2 緑暗黄色	シルト		
ヘ	10YR2/2 広褐色	粘土	下部に黒褐色粘土層が堆積	田地への自然堆積土



第6図 埋没堀跡1区平・断面図



### (2) 調査方法

平成17～19年度の埋没堀跡の調査成果及び絵図資料等から堀跡の位置を推定し（第4・30図）、堀西部の突出部から東方向に東西に延びる部分の中央部の堀北岸と土壌にかかる部分に1区トレント、その東側の南北両岸の推定位間にかかる部分に2区トレント、堀の東端から北に突出する部分の中央付近と推定される部分に堀を横断するように3区トレントを、堀の東側突出部の北辺に当たると推定される部分に4区トレントを設定して調査を行った。

各調査区は、幅約4mとし、長さは1区が約30m、2区が29m、3区が37m、4区が18mである。現公園の整備のための盛土及び追廻住宅廃止後の整地層、追廻住宅期の表土（同時期の掘削範囲を含む）については重機によって除去し、その後堀跡等の遺構確認を行った。堀跡については、土層の観察のため一部を掘り下げた。杭、石組み等の遺構については平面の記録に留め、掘削・断割りは行わず、遺構の保存に努めた。また、土層観察のため調査区の一部を掘り下げる記録した。確認調査終了後は杭・石組み等については不織布で被覆し、その後に土のうで養生したうえで掘削土によって埋め戻しを行った。

### (3) 各調査区共通の基本層序

今回の埋没堀跡の調査では、各調査区に共通する成因の土層が存在することから、相互の理解を図るために、下記の通り土層を大別し、さらに各区の土層の状況に応じて細分を行った。

#### 〈埋没堀跡の土層大別〉

- I a～c層：現青葉山公園整備に伴う盛土層
- II a層：追廻住宅撤去後の碎石等の整地層
- II b層：明治期（練兵場）～追廻住宅期の表土層
- III層：堀跡の堆積土層（埋立土層・埋立後の堆積層を含む）
- IV層：岸部の盛土層・整地層（人為堆積層）
- V層：基盤となる自然堆積層

## 3. 1区の状況

### (1) 調査区の概要

1区では、調査区南端から約4m付近で調査区を東西に横切り堀の北岸が検出された。土層確認のため堀の岸部を掘り下げたところ、岸に並行してのびる杭列が確認された。

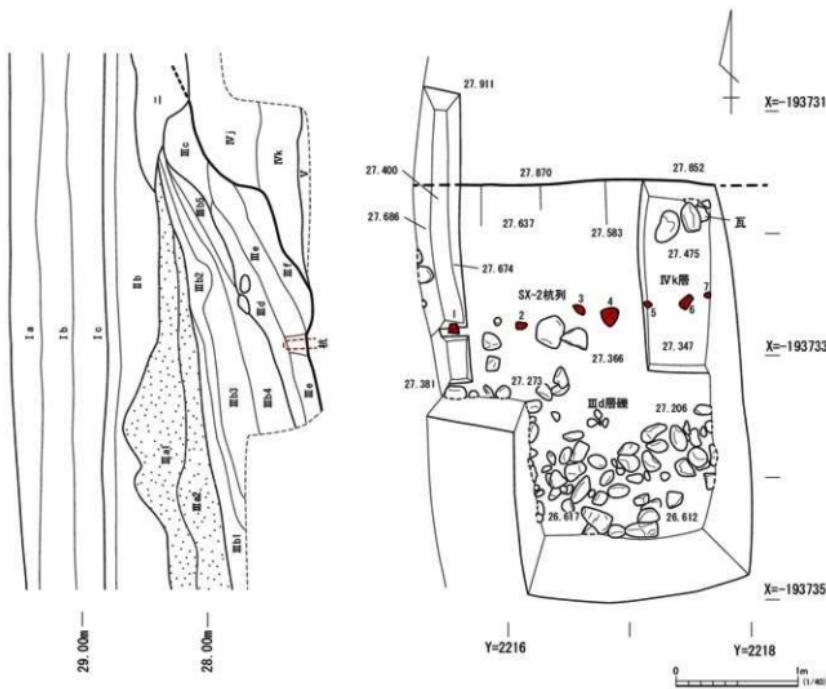
堀の肩部から北側では調査区全域で人為的な堆積土と見られる土層が確認された。この人為的な堆積土層は、後述するように調査区南部から中央部と北半部では土壤と堆積状況が異なり、それぞれ別の性格が考えられた。人為的な堆積土層の現状の上面では遺構は検出されていない。

### (2) 基本層序

1区の基本層序は、公園整備の整地層のI a～I c層が50～70cmの厚さで堆積し、その下に追廻住宅撤去後の整地層であるII a層が10～20cmある。その下に主に追廻住宅時期の様々な掘削により明治から昭和初期までの堆積層を混合したII b層が5～20cmの厚さで堆積する。今回の調査では、明治以降の堆積層の細分はできなかった。

調査区の南端部で堀跡の北辺岸部の輪郭が確認され、一部深掘りを行って堀跡内の遺構と堆積土の観察を行った。堀跡の上部には、黄橙色系のシルトないしシルト質粘土からなるブロック状の土層が40～60cmの厚さで堆積（III a層）する。この層は堀を埋めるために運び入れられた人為的堆積土層と見られる。その下のIII b～III f層は自然堆積と観察される土層で、その内のIII b層は流水の影響を受けながら岸上部からの流入土（土壌起源か？）を含む堆積土と考えられる。その下の黒褐色のシルト質粘土のIII d～III f層は未分解の植物遺体を含み、湿润で基本的に水が停滞した状況での堆積層と観察される。

堀岸部の北側には、ブロック状の堆積土や礫を多く含む人為的な堆積土と観察されるIV a～IV k層が調査区の北端部まで広がっている。層厚は堀跡北岸付近で約120cmを測る。IV層は、礫ないし凝灰岩のブロックを多量に含むIV a



第7図 1区 SD-1 堀跡と SX-2 杭列

層の広がる調査区北部と、比較的均質なシルトを主体とするIV d層以下の土層が厚く堆積する調査区中央部から南側に大きく分けられる。この土層の差異の要因については、次項のSX-1盛土・整地で記述する。調査区北端部付近の「へ層」は通路部分の窪地の自然堆積土、「IV 0層」は土堀からの崩落流入土ないし通路付近の再整地に係る土層と考えられる。

1区の堀の検出面から、地盤の沖積層（V層）である暗灰黄色のシルト質粘土層までは約120cm下がる。厚いIV層の整地層の存在から、1区付近では堀及び土堀等の構築のため大規模な盛土工事が行われたと推察される。

### (3) 検出遺構

#### SD-1 堀跡

1区南部でX=193731.5付近で堀の北岸部が東西方向にのびて検出された。検出部の南北幅は約4mで、さらに南方に続く。堀堆積土の上面から約130cmまで岸面に沿って掘り下げたが、底面には達していない。堆積土は上記した通りで、上部は人為的埋立て土層（III a層）、掘削部の中央部は水性の流入自然堆積層（III b層）、下部は湿性の自然堆積土層（III d～III f層）である。III b層は明治になって城が廃され、堀が管理されなくなつて堆積した土砂層と推定される。III a層は、第5図2・3の地図の変遷に認められるように、明治時代後半に追廻の練兵場の整備に伴つて堀を埋め立てた際に入れられた土砂層と考えられる。

堀の岸面上部の傾斜は約40°である。岸面では、岸の上端から斜距離で約2m、深さで1.2m下がったところで堀の方向に並ぶ杭列（SX-2杭列）が検出されている。またこの杭列の下側斜面のIII d層中からは、長軸が数cmから

25 cm程度までの大小の円礫が不規則ではあるが密集して出土している。石に上下の重なりはほとんどない。

#### SK-1 盛土・整地

塙跡の北岸から調査区北端までの人の為的な堆積土層(IV層)の広がりが確認され、この人為層は、疊ないし凝灰岩のブロックを多量に含むIVa層などを主体とする北側(IVa層からIVc層)とシルト質土の細かなブロックを主体とする南側(IVd層からIVk層)で大きく分けられる。この土層の違いは、絵図等から判断すると、IVa層の分布範囲は土壘の北側に長沼方向から翼門方向に続く通路部分の整地土層、IVd層以下の南側は塙の北側に築かれた土壘の盛土層の範囲を反映しているものと推察される。両層の境は X=193716付近に位置する。仮にこの層の境を土壘と通路の境とすると、土壘の基底部分の幅は約 15.5 m となる。この土層の東西境界線を西方向に延長すると、平成 17~19 年の調査で推定されている塙跡西側の突出部の北辺に一致し、絵図(第5図1)とも整合する。土層境界の北側の堆積層中に疊や凝灰岩の破片が多量に含まれていることは、通路の硬化に適応する土砂が選択的に搬入されていたことが推定される。

#### SK-2 杭列

SD-1 塙跡の中段で東西方向には一直線にのびて 7 本の杭が検出されている。III d 層で上端が検出され、III e 層以下での土層に刺さっている。杭上端の標高は約 27.30m 付近である。

杭の間隔は不規則で、最小 8 cm から最大 47 cm あり、平均は 25 cm である。杭列東側で杭周辺を検出面から約 10 cm ほど下がったが、杭列と組むような横木等は検出されなかった。杭材の大きさは、検出部の上端付近で長軸 6 cm から 15 cm で、太さが不揃いの分割材を使用しているようであるが、詳細は不明である。

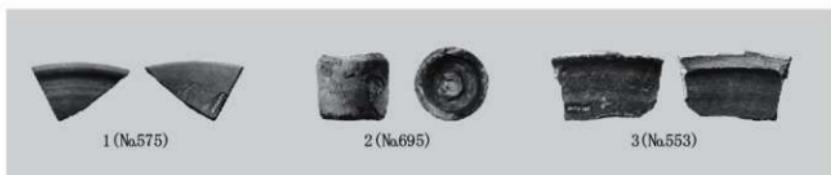
#### (4) 出土遺物

1 区の出土遺物は比較的少なく、塙跡からの出土遺物として図示した須恵器碗(No.575)、土師質灯明具(No.695)と土壘基底部盛土の出土遺物として図示した美濃産擂鉢(No.553)などの他、陶磁器や瓦などの小片が出土している。



No.	登録No.	種別	器種	产地	年代	地区	遺構	位局	器高・径口径・幅底径・厚	備考	写真図版
1	575	須恵器?	碗		平安時代	1区	III b4	(3)	14 (-)		2-1
2	695	土師質土器	灯明具		江戸時代	1区	III b4	4.1	4 3.8		2-2
3	553	陶器	擂鉢	美濃	17c前葉	1区	IV g-f	(3.3)	(-) (-)	鉢	2-3

第8図 1区出土遺物実測図



写真図版2 1区出土遺物

3. 1区の状況



1 1区全景（上が北）



2 堀跡北岸上部付近の状況（南東より）



3 岸部検出 SX-2 杖列（南より）



4 III d 層出土砾群（南より）

写真図版 3 1区全景と検出遺構



1 西壁南端の堀跡岸部堆積土層



2 西壁中央南寄りの土壌積土・整地層



3 西壁中央北寄りの土壌積土・整地層



4 西壁北端付近の整地層と崩落土層



5 東壁北寄りの土壌北辺付近の土層

## 4. 2 区の状況

### (1) 調査区の概要

2 区は埋没堆跡の南辺から東側の突出部の内側角付近に当たるトレーンチで、堆跡の南岸と突出部内側の南東角が確認された。調査区は南端と北端を除きほぼ堆跡のなかに位置する。南岸の上面は地盤の沖積層が検出されているが、この面では特に遺構は確認されていない。堆跡の南岸斜面では杭列を伴う土留遺構 (SX-4) が検出されている。

### (2) 基本層序

公園整備の整地層である I a ~ I c 層の厚さは 60 cm の前後である。追廻住宅撤去後の整地層は上部の砂石層 (II a 層) と下部の山砂層 (II a' 層) に分かれ、合わせて 20 cm 前後である。その下に追廻住宅時期の形成土からなる II b 層が 15 ~ 20 cm の厚さで堆積する。

堆跡の堆積土は大きく 4 層に分けられる。III a 層は、堆跡を人為的に埋めた後、下層の堆跡自然堆積土の圧縮・沈下によって生じた浅い窪地に、周辺から流入した土砂が自然堆積した層と考えられる。層厚は 20 cm 前後である。III b1 層・III b3 層は黄褐色系の土色を呈する凝灰岩片を含む人為的堆積土で、層厚は両層とも 40 cm 前後である。堀を埋め立てるために運ばれた土砂と考えられる。III b1 層と III b3 層には上下の層とは明らかに土色を異にし、III b3 層を起源とする凝灰岩片を含むが、自然堆積の状況を示す層厚 5 cm 前後の III b2 層が挟まれている。この層の成因については、III b3 層の埋め立てから III b1 層の埋め立てまでの間に一定の期間が空いたために形成されたものか、あるいは同一の埋め立て作業の間に相当量の降雨のために比較的短時間に形成されたものかは明らかでない。

III b 層の埋め立て土より下位の土層は、III c 層が SX-3 杭列に伴う土留 (堆跡の護岸施設) 構築後の自然堆積土、III d 層は大小の礫片を含む明黄褐色のシルトで土留の構築に伴う人為的な盛土層、III e 層が土留構築時に岸部からの流入土 (寄せ集められたものか)、III f 層以下は土留構築以前の堆跡の自然堆積土層である。III f 層や III i 層の下位部分は黒褐色を呈し、湿潤な環境で堆積したことが考えられ、特に III f 層は大型の礫と共に植物遺体を多く含む。

2 区は南北両側で岸部が確認されているが、南側は近代以降の堆積層である II b 層の直ぐ下層が地盤の V 層となり、北側も写真図版 5 の 2 のとおり、土塁から流入したと考えられる堆跡堆積土が斜めに堆積し、その下が地盤の V 層となる。調査範囲内では盛土層や整地層は確認できなかった。調査区南端付近の V 層は、上面の標高が 23.30m 付近で確認され、灰黄褐色からにぶい黄褐色を呈し、下層ほど粘土の割合が多い。

### (3) 検出遺構

#### SD-1 堀跡

調査区南端付近で東西方向にのびる堆跡南辺が、調査区の北東角で回字形の堀の東側突出部の内側角の屈曲部が確認された。南辺から屈曲部の南端までは約 21 m である。この長さが埋没した堆跡の南辺中央部のおよその幅と考えられる。南辺の岸上部の傾斜は 15° 前後で比較的緩やかである。堆積土は基本層序でも記したが、上部は薄い自然堆積土を挟んで約 60 cm の厚さで人為的に埋められている。その下は厚く自然堆積層が続く。今回の調査では堆跡の輪郭の確認を目的としていたので、検出面から約 1 m の深さまでしか掘り下げておらず、底面までの深さは不明である。

堀の内部では南岸上部から斜距離で約 3.3m、深さで約 1 m 下がったところで杭列 (SX-3) に伴う土留遺構 (SX-4) が検出された。

#### SK-3 杭列

SX-3 杭列は、堆跡南辺で岸と並行して東西方向にのび、III d 層に埋まつた状況で検出されている。III d 層は杭列に伴う埋め戻し土層と考えられることから、杭の打ち込み面は III h 層と考えられる。検出された杭は全部で 13 本あり、このうち杭 1 ~ 11 はほぼ直線的に並んでいるが、間隔は 2 ~ 70 cm とバラつきがある。杭 1 ~ 6 までは比較的間隔が開いているが、杭 7 ~ 11 は密に並ぶ。(第 10 図)

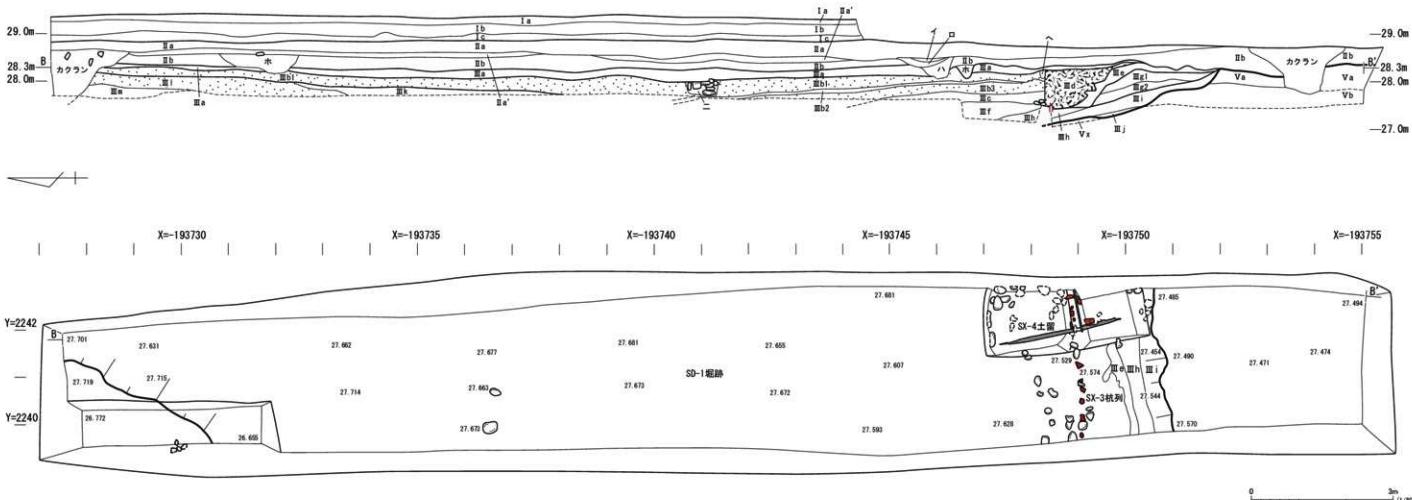
杭 12 と杭 13 は、杭列に沿わせて横に立てた状態の板材 (A 材) を挟んで杭 7 ~ 11 と並行する。杭 11 と杭 13 の間隔は横板材の厚さの約 3 cm 分だけである。杭 12 と杭 13 の間隔は約 35 cm である。

杭材は、杭 3・12・13 が芯持丸材、杭 9・11 が分割材と見られるが、詳細は不明である。

第3表 埋没堆跡2区土層記注

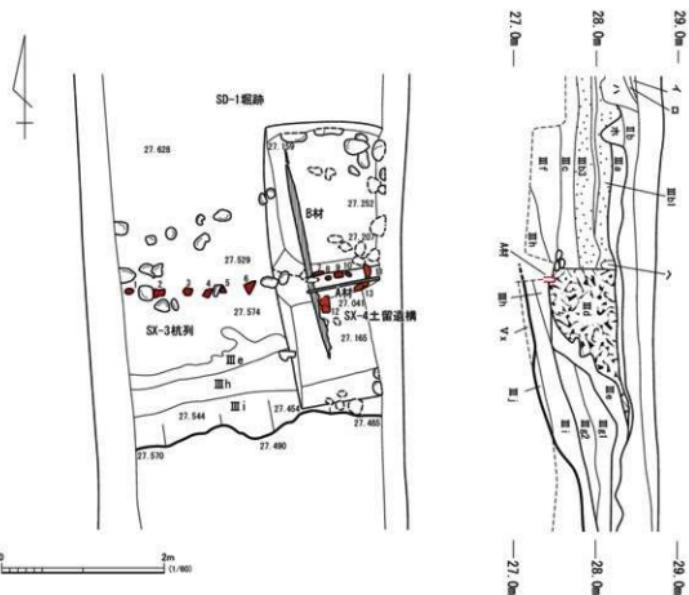
層名	土色	土性	備考	成因
I a	10YR8/3 淡黄褐色	砂石層		
I b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	盛土	公園整備に伴う盛土・整地層
I c	10YR8/6 黄褐色	シルト	凝灰岩片を多量に含む 盛土	
II a	10YR6/2 灰黄褐色	砂石層		追跡住宅撤去後の整地層
II a'	10YR4/4 黄色	砂質土	陥没物を少量含む 淡黄色の山砂質土	陥没住宅撤去または撤去後の整地層
II b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	陥没物を多量含む 灰黄褐色の表面	陥没後～追跡住宅撤去の表土層
III a	10YR7/2 にぶい黄褐色	砂質土	陥没物を多量に含む 1cm～3cmの礫を含む レンガ片	陥没後～追跡住宅撤去の表土層
III b	10YR7/6 明黄褐色	シルト	陥没物を多量に含む 0.5～1cmの礫を含む、凝灰岩片を多量に含む ガラス片を含む	礫の埋め立て土層
III c	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	地山のブロックを少量含む 細粒土	埋め立て前の流入土
III d	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘性シルト	陥没物をわずかに含む 凝灰岩片	細粒の埋め立て土層
III e	10YR3/2 黒褐色	シルト	陥没物を多量に含む 小さな礫を少量含む	土留設置後の堆積土
III f	10YR6/6 明黄褐色	シルト	大小の礫を多量に含む 3度の時 間差が考えられる	土留設置時の掘方流入土
III g	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	小礫をばらに含む	土留設置以前の自然堆積土
III h	10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土	大小の礫、未分離の植物遺体を多量に含む	土留設置以前の自然堆積土

層名	土色	土性	備考	成因
III g 1	10YR8/4 にぶい黄褐色	シルト	小礫をわずかに含む	
III g 2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	陥没物を、酸化鉄粒をまばらに含む	土留設置以前の海岸堆積土
III h	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	陥没物を、酸化鉄粒をまばらに含む	土留設置以前の海岸堆積土
III i	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	理をわずかに含む	
III j	10YR3/3 にぶい黄褐色	シルト	砂を構成にわずかに含む	
III k	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を構成にわずかに含む	
III l	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	褐色土のブロックを含む	土留設置以前の海岸堆積土
III m	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩の小粒を含む	
V e	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒をやや含む	
V f	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄粒を含む 灰色の砂質土	当該地の沖積層
V x	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	が層状に入る	
VI	10YR1/4 にぶい黄褐色	シルト	山砂か	
口	10YR2/2 黒褐色	シルト		
ハ	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土		
ニ	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	大型の礫を多量に含む	
ホ	10YR3/3 暗褐色	シルト	水道管理設溝	



第9図 埋没堆跡2区平・断面図





第10図 2区 SD-1堀跡のSX-3杭列とSX-4土留遺構

## SX-4 土留遺構

堀跡の人為的堆積土のIII d層、2列に並行する杭列、杭列で挟んで立てられた板材（第10図A材）、さらに板材の下からこれと直交して置かれた別の板材（第10図B材）が検出されたことで、これらが合わさって土留が築かれ、一時期堀の岸が形成されていたことが明らかになった。杭に並行に置かれた1段目のA材は、検出部分で長さ92cm、幅約10cm、厚さ約3cmの長方形の厚板材で、木口は腐食しているが、両面・側面とも平らに仕上げられた規格性の強い板材で、ほぼ水平に置かれていた。III d層の北側は、現状では堀の中央方向に若干動いているが、A材の上ではほぼ垂直に立ち上がっていることから、本来はIII d層の高さ分（約80cm）に板材を置いて土留施設の壁とし、裏から盛土が行われていたと推定される。なおIII d層の岸側面の断面はIII e層と交互に重なった状態で堆積しているので、III d層の盛土は数回に分けて作業が行われ、この間に岸側から土砂の堆積があったと考えられる。この岸側からの堆積土であるIII e層については、遠方から運ばれて盛られたIII d層とは別に、岸の上部周辺から寄せ集めて入れられたことが推定される。

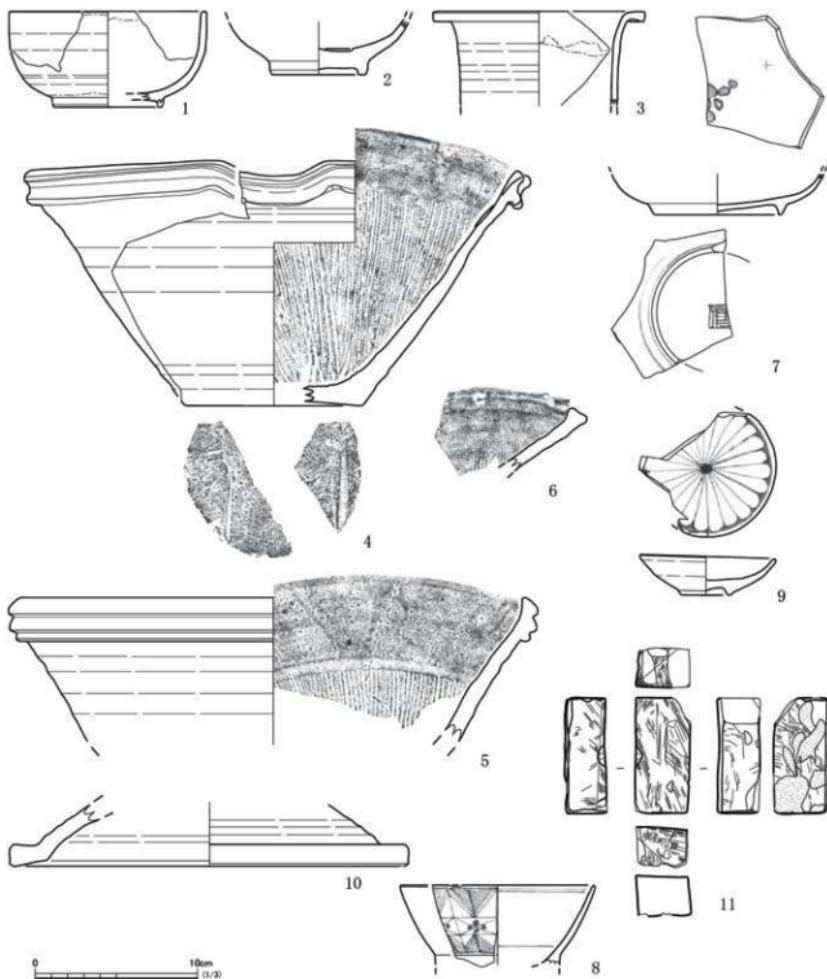
土留の壁板材の下には、その西端に合わせてこれと直交するように置かれたB材がある。長さ264cm、幅約12cm、厚さ約5cmで、側面を上下にしてほぼ水平に置かれている。上のA材を起点に測ると、岸側が約80cm、堀中央側が約180cmで、地盤の柔い堀中央側の沈下を意識した配置となっている。材の両端は腐食が進みやせ細っているが、両面・側面は平滑に仕上げられており、本来は規格性のある厚板材であったと考えられる。

検出された遺構と木材の状況から、この土留の構築手順を復元すると、

①土留の構築計画線に沿って杭を打つ。（杭1～11）

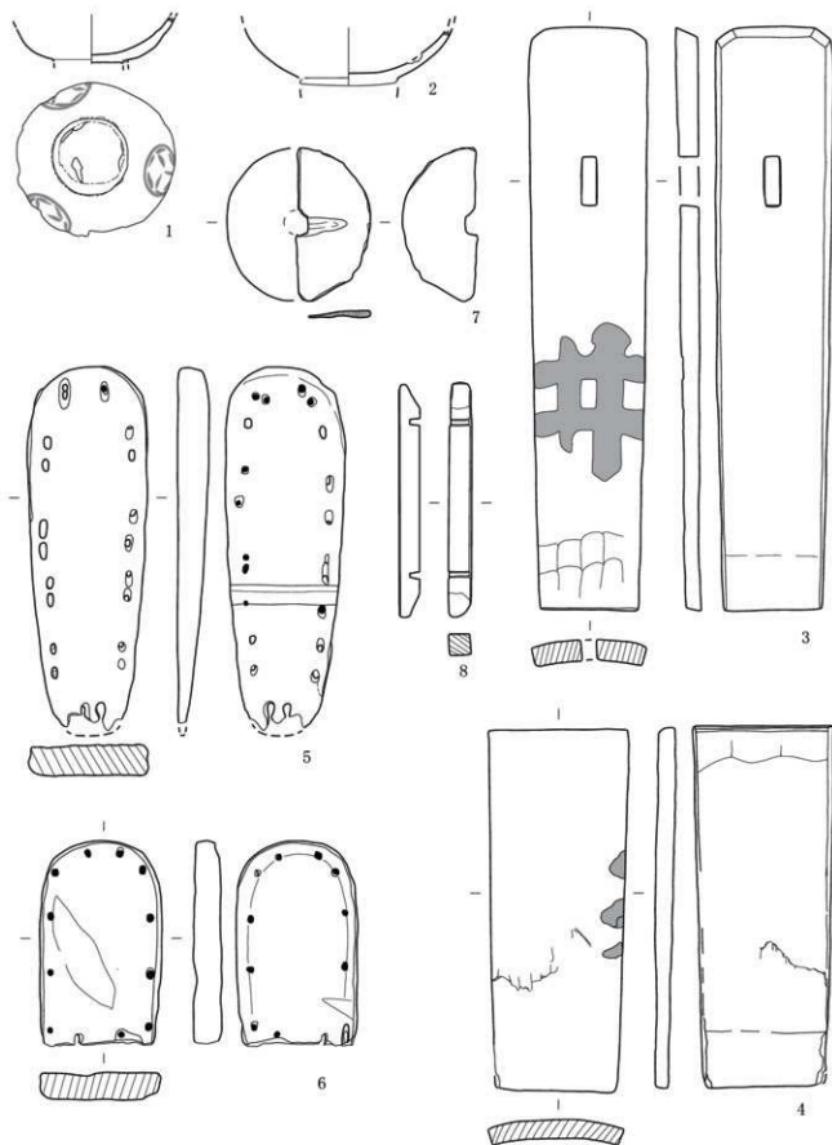
②土留の横板材の沈下を防ぐための土台として長尺の木材（B材）を堀に直交して水平に置く。この土台として使用する木材は、廃材などが使用されたと推定される。

4、2区の状況



No.	登録No.	種別	器種	产地	年代	地区	退機	部位	高さ・至口径・幅径・厚	備考	写真図版
1	513	陶器	碗	美濃	18c?	2区	III-i	(5.9) (12) (6.6)	灰陶 N.706と接合	7-1	
2	517	陶器	碗	肥前	17cか18c	2区	III	(3.2) (-) 5.8	肥前陶器 灰石胎 着付無鉢	7-2	
3	514	陶器	香炉?	不明	不明	2区	III	(5.8) (13) (-)	口縁部に鉄胎 体部に透明胎	7-3	
4	511	陶器	壺鉢			2区		瓶上土 15 (38) (10.6)		7-4	
5	725	陶器	壺鉢	埴輪 19c前葉～中葉	2区	III	(8.8) (31.2) (-)	鉄胎	7-5		
6	533	陶器	壺鉢	岸	17c中葉	2区		瓶上土 (3.9) (-) (-)	鉄胎	7-6	
7	423	陶器	皿	肥前 19c前葉	2区	III-i	(2.5) (-) (8)	染付 見込み文花? 高台内「角桙」?	7-7		
8	645	陶器	壺口	肥前 18c後半	2区	II-a	(4.9) (12) (-)	外腹：微字学、市松文、模様底	7-8		
9	618	陶器	小型皿	肥前 17c前葉～中葉	2区	瓶上土	2.5 (8.4) 3.2	染付 菊花文、高台に砂付底	7-9		
10	668	瓦質土器	皿?	江戸時代	2区	III-f	(3.8) (24.4) (-)		7-10		
11	524	石製品	砾石		2区	III	7.1 3.4 2.5		7-11 (6)		

第11図 2区出土遺物実測図(1)



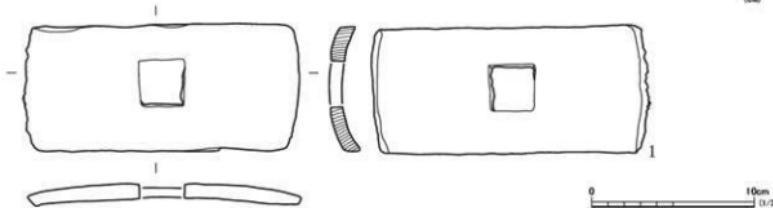
第12図 2区出土遺物実測図 (2)

#### 4. 2 区の状況

(第 12 図)観察表

No.	登録No.	種別	器種	産地	年代	地区	遺構	用位	縦高・長口径・幅	底径・厚	備考	写真図版
1	744	木製品	漆器碗			2 区	Ⅲ i	(2.9)	(~)	(4.6)	外面: 黒漆に銀色の筆文 内面: 朱漆	7-13
2	752	木製品	板			2 区	Ⅲ i	(3.5)	(~)	(6)	外面: 朱漆 内面: 朱漆	7-14
3	782	木製品	縫部材			2 区	Ⅲ i	35.8	7.2	1.3	狭端部6cm 外面焼印「井」? 持ち手孔	8-4
4	740	木製品	縫部材			2 区	Ⅲ	22.3	8.6	1.1	狭端部7.3cm 外面焼印「?」	8-5
5	781	木製品	下駄			2 区	Ⅲ i	(22.3)	7.3	1.9	足裏下駄 修繕あり	8-1
6	743	木製品	下駄			2 区	Ⅲ i	(12.6)	(7.5)	(1.6)	足裏下駄 連結式の爪先側	8-2
7	742	木製品	円板			2 区	Ⅲ	(9.4)	(4.6)	(0.45)	中央に円孔のある円盤	7-12
8	779	木製品	不明			2 区	Ⅲ i	14.2	1.3	1.3	純合せ式製品の一部	8-3

(cm)



No.	登録No.	種別	器種	産地	年代	地区	遺構	用位	縦高・長口径・幅	底径・厚	備考	写真図版
1	780	木製品	不明			2 区	Ⅲ d	14.8	7.8	0.9	縦横両方向で内寄 中央に逆台形の孔	8-6

(cm)

第 13 図 2 区出土遺物実測図 (3)

③土台の材の上に横に板材 (A 材) を置き、横木の岸側への転倒防止のために杭を打つ。(杭 12 ~ 13)

④横木を計画の高さまで重ねる。(Ⅲ d 層の厚さとすると約 80 cm)

⑤岸側から小穂を含む黄褐色系の土を何處かに分けて入れる。途中、岸側からも周辺の土を入れる。

というように推定され、概ねこのような手順で、高さ 80 cm 程度の土留が構築されたと考えられる。

なお、岸側の杭と横木及び土台となる木材は、今回の調査面より下層で検出されているので、土留構造はさらに東西两侧に続いていると推定される。また、横の壁板材が現状で 1 枚しか検出されなかったことについては、腐食したか、あるいは裏からの盛土の際に板の厚さ分だけ土を突き固めてから板を外すことを繰り返してかさ上げしたことなどが考えられるが、実態については明らかに出来なかった。今後広範囲な調査を行う際の課題である。

#### (4) 出土遺物

2 区からの出土遺物は、深掘りを行った SX-4 土留遺構周辺の堀跡内からのものが多く、陶器・磁器・瓦質土器・石製品・木製品等が出土している。主なものを第 11 図～第 13 図に示した。

陶器には美濃產灰釉碗 (No. 513)、肥前產長石釉碗 (No. 517)、産地・器種不明の胴部が直立するもの (No. 514)、各種擂鉢 (No. 511・533・725) がある。磁器には、肥前染付小皿 (No. 618)、肥前染付皿 (No. 423)、肥前猪口 (No. 645) などがある。瓦質土器は牧遺の蓋 (No. 668) と考えられる製品である。

石製品は小型の角柱状の砥石 (No. 524) で、各面に擦痕が確認できる。緻密な石材で仕上砥と考えられる。

木製品は多種多様なものが出土している。No. 744・752 は漆器碗で、前者の外面には黒地に銀色で筆文が 3ヶ所に描かれている。No. 740・782 は柵目の板材で、短軸方向に緩やかな湾曲があり、桶の側板と考えられる。後者の広端側には長方形の穴がある。両者の凸面に焼き印があり、No. 782 は「井」と読むことができる。No. 740 と 782 は草履下駄で、No. 743 は 2 枚の板を組合わせる形式のもので、爪先側の部材である。周囲の穴には木ないし竹の釘が残る。No. 781 は 1 枚板の製品である。周囲の釘穴は 2 個の穴が近接しているので修補された可能性が考えられる。下面側の中央よりやや踵側に横位方向のわざかなくぼみが観察でき、鼻緒に関係する可能性が考えられる。No. 779 は断面が正方形の柱状の製品で、面取りがある面の両端に溝状の切込みがある。No. 742 は中央に円孔のある円形の板材である。No. 780 は片面に縦横両方向からの湾曲がある板状の製品で、中央に台形の孔が空いている。孔に柄を通して使用したものと推定される。

III. 埋没塙跡の調査（仙台城跡追側地区第7次調査）



1 2区全景（上が北）



2 2区北西部の塙跡の立上り（南東から）



3 SX-3 杭列（北から）



4 SX-4 土留遺構（西から）

写真図版 5 2区全景と検出遺構

4、2区の状況



1 SX-3 杭列と SX-4 土留造構の組合せの状況（西から）



2 東壁 X = -193735 付近の土層



3 東壁 X = -193743 付近の土層



4 東壁 X = -193752 付近の土層



5 北端部の土層と推定岸部の下層

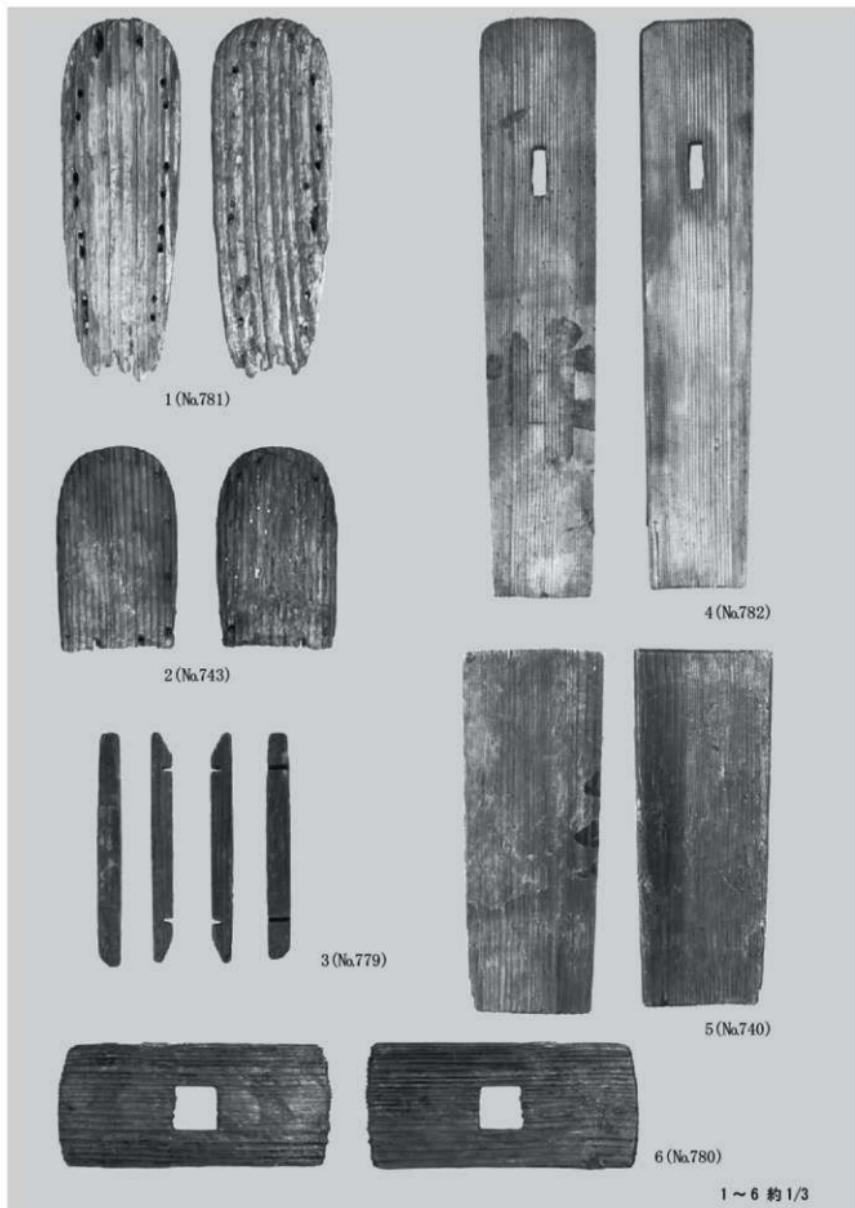
写真図版 6 2区の杭・土留造構と土層断面



写真図版 7 2区出土遺物 (1)

1~14 約 1/3

4、2区の状況



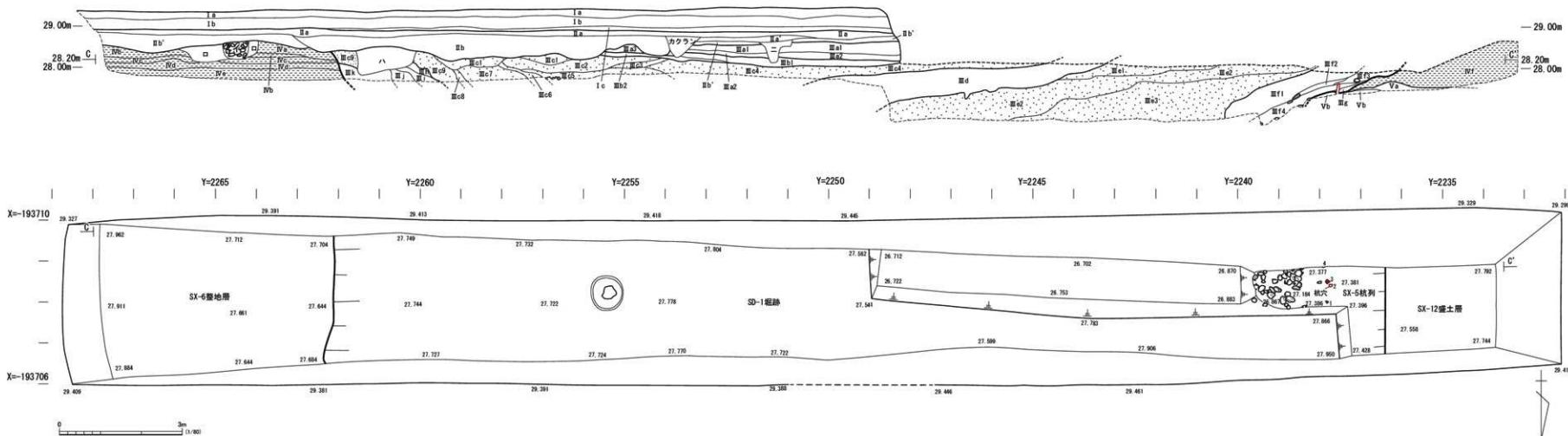
写真図版 8 2区出土遺物 (2)

第4表 埋没堆跡3区土層記述

用番	土色	土性	備考	成因
I-a	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂	砂石層	
I-b	10YR3/3 暗褐色	シルト	大小の礫、埴等を含む	公園整備に伴う盛土・整地層
I-c	7.5YR5/4 にじみ褐色	シルト質粘土	小礫を多量に含む	
II-a	10YR4/3 にじみ黄褐色	シルト		追避住宅撤去後の整地層
II-b	10YR6/2 灰褐色	シルト		追避住宅層の鉢削坑
II-b'	10YR3/1 黑褐色	シルト	腐化物を多く含む	廃城後一過避住宅層の表土
III-a1	10YR6/2 灰褐色	シルト	小礫を多く含む	
III-a2	2.5Y5/2 暗灰褐色	シルト		埋め立て後の堆積土
III-a3	10YR4/3 にじみ黄褐色	粘土質シルト	中小の礫を多く含む	
III-a4	2.5Y4/2 灰褐色	シルト	腐化物を多く含む	埋め立て後の堆積土(下部)
III-b2	10YR3/1 黑褐色	シルト	にじみ黄褐色のブロックを多量に含む	
III-c1	10YR5/2 灰褐色	粘土	にじみ黄褐色のブロックを多量に含む	
III-c2	10YR5/4 にじみ黄褐色	シルト質粘土	灰褐色土のブロックを含む 小礫を少度含む	埋め立て土層(上部)
III-c3	10YR4/2 黄褐色	粘土	褐色土をわずかに含む	
III-c4	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	腐化物を少度含む	
III-c5	10YR4/4 黄色	砂質シルト	粗砂を多量に含む 緩ざらに含む 黒色土を層状に含む	

用番	土色	土性	備考	成因
III-c6	10YR3/3 にじみ黄褐色	砂	細かい小礫を多量に含む。表面の粗面感は砂質土の特徴的見込み	
III-c7	10YR5/4 にじみ黄褐色	シルト	小礫をばらばらに含む。暗褐色土、褐色土のブロックを含む	埋め立て土層(上部)
III-c8	10YR5/3 にじみ黄褐色	シルト	中型の礫を多量に含む	
III-c9	10YR4/3 にじみ黄褐色	シルト	褐色土のブロックを含む。層下部に「中の小の埋立層」付近	
III-d	10YR3/3 暗褐色	シルト		自然堆積層(水性の堆積層)
III-e1	2.5Y6/4 にじみ黄褐色	シルト	褐色土を一層多く含む。層上部に「中の小の埋立層」付近	
III-e2	2.5Y4/3 緬オリーブ色	シルト	褐色土を一層多く含む。層上部に「中の小の埋立層」付近	人為的埋立て土層と観察される
III-e3	2.5Y4/3 緩オリーブ色	シルト	オーリーブ褐色シルトのブロック、褐色土を含む。木の部分解体の痕跡を含む	
III-f1	2.5Y4/2 緩灰褐色	シルト	オーリーブ褐色シルト、オーリーブシルト、黒褐色シルトが横状に含まれる。木の痕跡を含む	自然堆積土(水性の堆積土)
III-f2	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	オーリーブ褐色シルト、灰褐色シルトが混在する。木の痕跡を含む	
III-f3	10YR4/2 黄褐色	シルト	灰褐色土を多く含む。層下部に「中の小の埋立層」付近	
III-f4	2.5Y3/1 黑褐色	粘土質シルト	粗砂を多量に含む。緩ざらに含む 黑色土を層状に含む	

用番	土色	土性	備考	成因
用番	土色	土性	備考	成因
Ⅳ-a	2.5Y4/2 緩灰褐色	シルト質粘土	砂粒を含む	
Ⅳ-b	10YR2/3 黑褐色	シルト		岸部からの流入土
Ⅳ-c	10YR4/2 灰褐色	シルト	小礫を多量に含む	
Ⅳ-d	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	灰褐色土をブロック状に含む	
Ⅳ-e	10YR3/2 灰褐色	シルト質粘土	褐色土のブロック、緩ざらに含む	
Ⅳ-f	10YR5/3 にじみ黄褐色	シルト	褐色物を含む。堆積物をまばらに含む	堆積地区裏側の表土層
Ⅳ-g	10YR3/3 にじみ黄褐色	シルト	小礫をわずかに含む	
Ⅳ-h	10YR4/3 にじみ黄褐色	シルト	褐色物を含む。堆積物をまばらに含む	堆積地区裏側の表土層
Ⅳ-i	10YR5/8 黄褐色	シルト	堆積物の大小ブロックを多量に含む	堆積地区裏側の表土層
Ⅳ-j	10YR5/3 にじみ黄褐色	シルト	ブロックの堆積 特に堆積物を多く含む。黄褐色シルトを一部に含む	堆積地区裏側(土堤側)の堆積層
Ⅴ-a	2.5Y4/2 缓灰褐色	シルト	灰褐色土、褐色物を少量含む	当該段の沖積層
Ⅴ-b	2.5Y5/2 缓灰褐色	粘土		
Ⅴ-c	10YR2/3 黑褐色	粘土		
Ⅴ-d	10YR4/2 黄褐色	シルト	大小の礫を大量に含まる	近・現代の鉢削坑
Ⅴ-e	10YR4/2 黑褐色	粘土シルト	小礫をわずかに含む	近・現代の鉢削坑
Ⅴ-f	10YR6/2 缓灰褐色	シルト	大小の礫をわずかに含む	近・現代の鉢削坑
Ⅴ-g	10YR5/2 缓灰褐色	シルト	穠及びⅤ-b'層のブロックを含む	近・現代の鉢削坑



第14図 埋没堆跡3区平・断面図



## 5. 3区の状況

### (1) 調査区の概要

3区は堀の南側から東側で北側に突出した部分の中央付近を東西に横断するトレンチで、絵図から東側にはすぐ近くに馬場が、西側には土塁が存在していたと想定される。調査の結果、堆跡の東西両岸が確認された。また、西側では絵図に描かれた土塁の基底部に相当すると推定される盛土層が、東側では馬場周辺の整備のためと推定される整地層が確認された。堆跡の西岸斜面では岸と並行する杭列が検出されている。両岸の盛土部・整地部では遺構は検出されていない。近代以降に両岸部分は削平を受けている可能性が考えられる。

### (2) 基本層序

公園整備の整地層であるI a～I c層はこの部分でも60cmの前後ある。追廻住宅撤去後の整地層は、上部の碎石層（II a層）と下部の山砂層（II a'層）の分布が確認され、合わせて20cm前後である。調査区中央東部ではその下に追廻住宅時期に広範囲に掘削された際に形成されたと考えられる灰黄褐色土のII b層が分布する。層厚は深いところで約60cmあり、層中には土管の破片なども混在する。その下のII b'層が他調査区のII b層に相当するとみられ、層厚は厚いところで40cm、薄いところで10cm前後である。

調査区の両側で堀の岸が確認され、調査区の大部分は堆跡の堆積土となっている。堀は中央部が広範囲に厚く人為的に埋められている（III c層・III e層）。堀の堆積土III a1～III b2層は、大規模な埋め立て後に土圧による脱水・圧縮で沈下した部分に流入した自然堆積層と見られる。層厚は合わせて60cmとなる。

埋め立て土は大きく分けると自然堆積層を挟んで上下2層に分けられる。上部のIII c層は、褐色ないし黄褐色系の礫を多く含む人為的な埋め立て土層で、東側の馬場側を主体に、比較的細かな土層が複雑に絡んで堆積している。層厚は深いところで60cm以上ある。下部の埋め立て層との間に位置するIII d層は暗褐色のシルト層で、層厚は深いところで約60cmを測る。未分解の植物遺体も含まれ、湿潤な状態のところに周辺からの土砂が流入して形成されたと考えられる自然堆積層である。III e層にもぶい黄褐色ないし暗オリーブ色のブロック状のシルト層で、人為的な埋め立てにより形成された土層と考えられる。層厚は1.4m以上あり、かなり大規模な工事によるものと推定される。

堆跡堆積土下位のIII f層～III g層は堀の西岸付近の岸斜面に沿って土塁方向から流入した自然堆積土層、III h層～III k層は堀の東岸斜面に沿って馬場方向から流入した自然堆積土層である。

岸部の両側には人為的な盛土が確認されている。近くに馬場の存在した東岸側のIV a層からIV e層は、にぶい黄褐色からにぶい黄橙を呈するシルトからなるブロック状の土壤がほぼ水平堆積する層で、馬場及び周辺整備のための人為的堆積層（整地層）と考えられる。一方、西岸のIV f層は暗灰黄色を呈するシルトのブロック状の堆積土で、層厚は90cm以上ある。土塁の基底部を形成する人為的形成層（盛土層）と見られる。

V a層、V b層は暗灰黄色及び灰黄褐色のグライ化した粘土層で、当該地の地盤を形成する沖積層と観察される。

### (3) 検出遺構

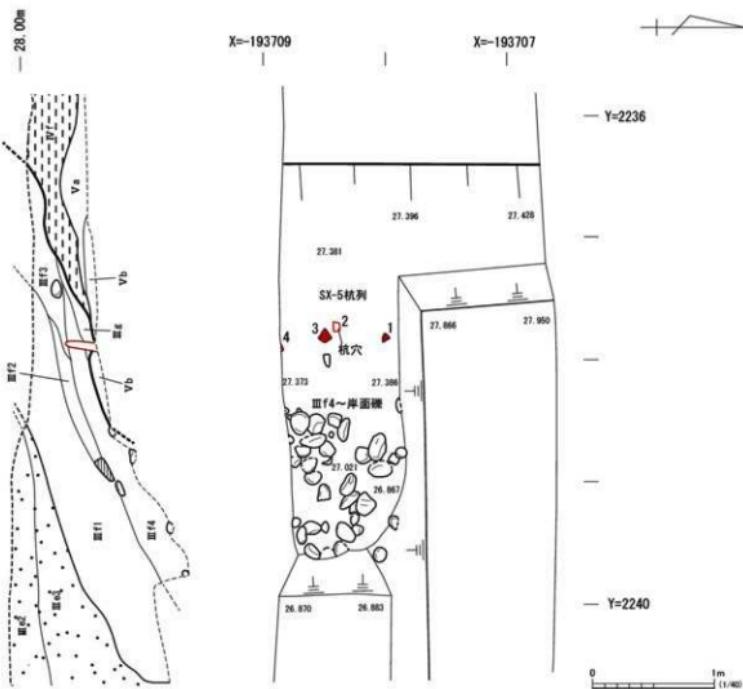
#### SD-1 堀跡

SD-1 堀跡は調査区の両端付近で東西两岸が検出された。検出された部分での堀の幅は約26mである。調査部の岸の傾斜角は、西の土塁側で20°と緩く、東の馬場側で約65°と急である。堀の堆積土は先に記したように、下層から岸の傾斜に沿った自然堆積層、2時期の厚い人為的埋め立て層、その間に挟まれた厚い自然堆積層、2度目の埋め立て後の凹地に堆積した自然堆積層に大きく区分される。堀に関連する施設としては、西岸部では杭列（SX-5杭列）と土塁側の基底部に係ると考えられる盛土層（SX-12 盛土層）が検出された。また東岸部では先に記したように、馬場に係ると推定される整地層（SX-6 整地層）が検出された。SX-5杭列からやや下がった位置のIII f層下面（岸斜面付近）からは大型の礫が密集して検出されている。このような礫の出土状況は1区北岸（土塁側）と類似する。

#### SX-5 杭列

杭列は、岸から斜距離で約150cm、深さで約40cm下がったところで岸と平行に並ぶ4本が検出された。杭の間隔は5～36cmである。杭材は分割材を主とする。杭の上部はIII f4層上面付近まで立ち上り、その両側での土層の違い

### 5. 3区の状況



第15図 3区SD-1 堀跡のSX-5杭列と礫群

は認められないことから、III f4層より上位から打ち込まれたと推定される。

#### SX-6 整地層

調査区東側の馬場側の岸部で検出されたIV a層からIV e層とした礫を含むブロック状の土層である。各層の厚さは10～20cmで比較的そろって水平に堆積する。全体の層厚は1m以上ある。各土層はさらに東方向に延びている。SX-6整地層については、馬場とその周辺の造成に伴う整地層と考えられる。

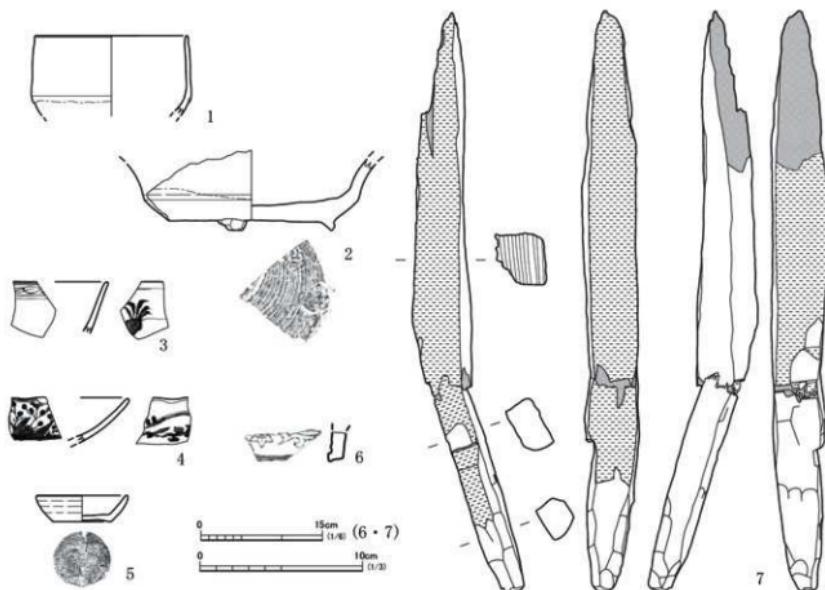
#### SX-12 盛土層

調査区西側の岸部で検出されたIV f層は、暗灰黄色のシルト層でブロック状の土壤を含む土層である。調査範囲では分層の困難な土壤が90cm以上の厚さで堆積している。同一の供給源から運ばれて、一気に盛られたような状況を示すと理解される。馬場側の版築状の整地層とは様相を異にしている。この盛土層については、位置的な状況から土塁の造成に係る盛土層と推定される。

#### (4) 出土遺物

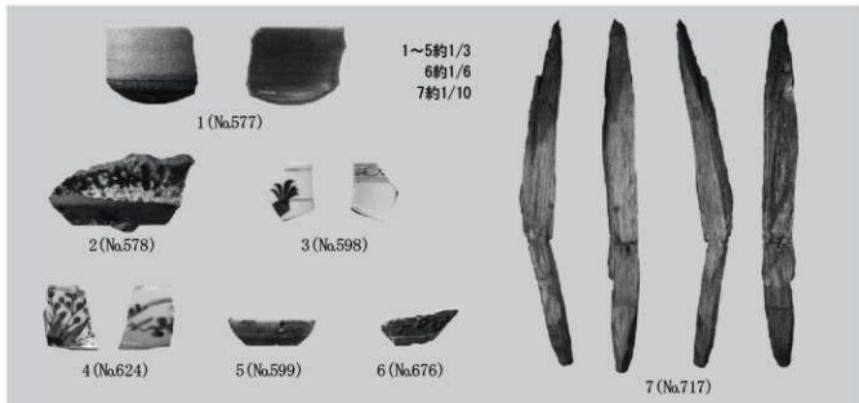
3区の出土遺物も主に堀跡からのもので、陶器、磁器、土師質土器、瓦片などがあるが、量は多くない。

No.577は大堀相馬のかけ分け軸の碗、No.578は岸窯産とみられる鐵釉鉢、No.598は肥前染付碗、No.624は肥前染付の輪花皿で焼継痕が認められる、No.599は土師質土器の灯明皿、No.676は笠文軒平瓦の瓦当部の破片、No.717はSX-5杭列のNo.2の分割材を使用した杭で、先端付近に多方向からの加工がある。



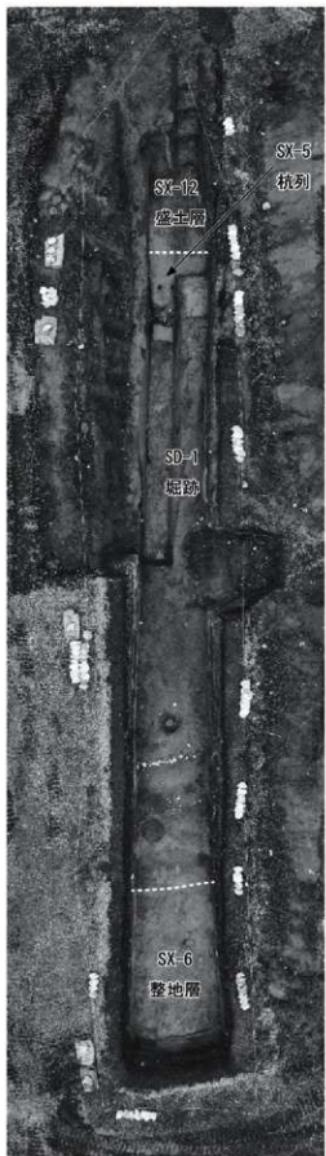
No.	登録番号	種別	器種	産地	年代	地区	遺構	層位	深高・長	口径・幅	厚	備考	写真図版
1	577	陶器	筒形罐	大庭相馬	18c	3区	III	(4.9)	(9.4)	(-)	厚	9-1	
2	578	陶器	鉢	厚?	17c代?	3区	III	(4.1)	(-)	(10)	鉄輪 底部:回転糸切り痕	9-2	
3	598	磁器	碗	肥前	18c?	3区	IIIc4	(3.5)	(-)	(-)	染付 草文	9-3	
4	624	磁器	楓花皿	肥前	18c	3区	IIIc4	(2.8)	(-)	(-)	染付 草花文 口さび 傷擦痕 内面:煤が付着	9-4	
5	599	土師質土器	紅明星			3区	IIIc4	1.65	(6.6)	(3.6)	内面:煤が付着	9-5	
6	676	瓦	肝平			3区	IIIc4	(-)	(9.7)	1.8	葉文 高さ(3.5)	9-6	
7	717	木製品	梳			3区	SX-5	(71.3)	(7.3)	(6.3)	芯無分割材 先端部に加工痕	9-7 (a)	

第16図 3区出土遺物実測図



写真図版9 3区出土遺物

5. 3区の状況



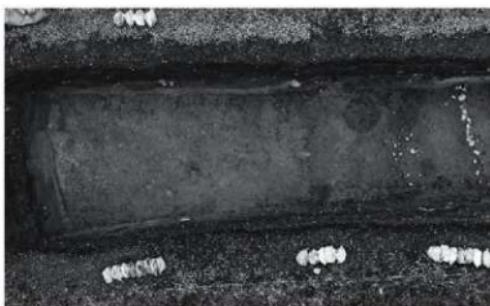
1 3区全景（上が西）



2 SD-1 堀跡西岸と SX-5 杭列の状況（北から）



3 SD-1 堀跡西岸の SX-5 杭列と礫群（北から）



4 SD-1 堀跡東岸部と SX-6 整地層（北から）

写真図版 10 3区全景と検出遺構



1 南壁 SD-1 堀跡西岸部の状況

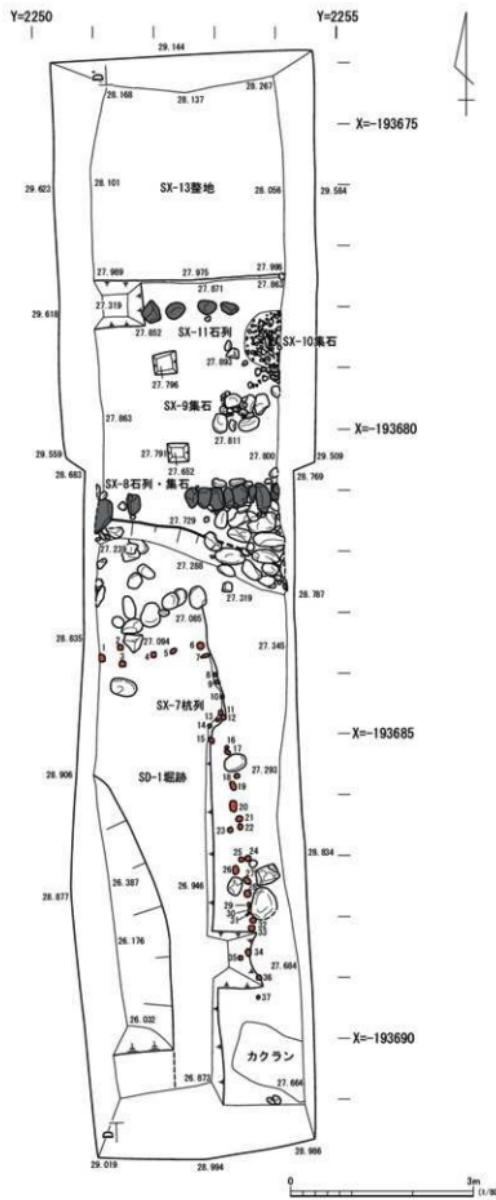
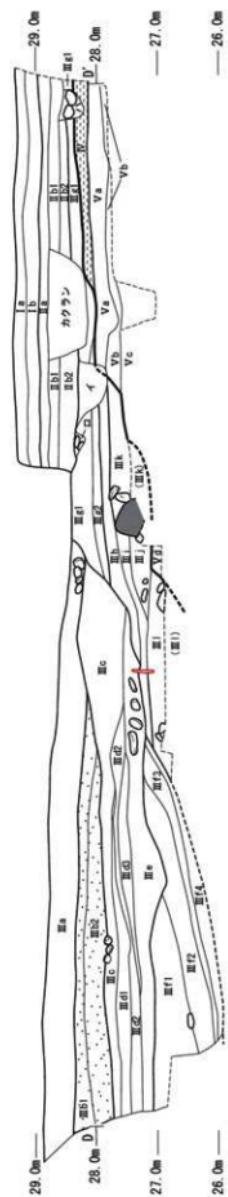


2 南壁 SD-1 堀跡西岸部の状況



3 南壁 SD-1 堀跡東岸部の立ち上りと SX-6 整地層の状況

5、3 区の状況



第 17 図 埋没堀跡 4 区平・断面図

## 6. 4区の状況

## (1) 調査区の概要

4区は、堀の東側が北方向に突出した部分の北端部の検出を想定したトレンドである。調査の結果、堀の東側突出部の北東角付近の岸部が検出され、調査区の南半分は堆跡に当たる。堀の岸上部では並行して東西にびる石列と、その間で2基の集石遺構が検出された。堀北岸から東岸にかけての角部の岸斜面上部では直角に折れて直線的に並ぶ杭列が検出されている。

## (2) 基本層序

4区上部のI層は、他の調査区と同様の公園整備に関わる整地層で約40cmあるが、この部分では1~3区のIc層に相当する橙色系の土層が認められず、その分全体的に整地層が薄くなっている。II層は廃城期以降の追跡住宅期の表土層及び住宅撤去後の整地層である。

第5表 埋没堆跡4区土層注記

層番号	土色	土性	備考	成因
Ia	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂	径1~7mmの礫を多く含む砂石層	公園整備に伴う盛土・整地層
Ib	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	径0.5~10mmの礫を多く含む	
IIa	2.5Y4/3 増反黄色	シルト	径1~6mmの礫を多く含む砂石層	追跡住宅撤去後の整地
IIb1	2.5Y5/3 黄褐色	シルト	砂礫・埴瓦片を含む	廃城後追跡住宅期の表土
IIb2	2.5Y5/2 増反黄色	シルト	径1~5mmの礫をまばらに含む 炭化物を一部に含む	
IIIa	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	径1~6mmの礫を多く含む	堀埋立て後の堆積土
IIIb1	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄粒をまばらに含む	
IIIb2	5Y5/3 灰オリーブ色	シルト	酸化鉄粒をまばらに含む 径1~6mmの礫をまばらに含む	堀埋立て後の堆積土
IIIc	2.5Y3/1 増反褐色	シルト	径0.5~14mmの礫をまばらに含む	
IIId1	2.5Y5/3 黄褐色	砂	酸化鉄を一部に含む	
IIId2	2.5Y6/3 にぶい黄色	砂	増反黄色シルトを含む	杭列設置後の上部自然堆積土
IIId3	2.5Y7/2 灰黄色	砂	酸化鉄をまばらに含む 黒褐色シルトを一部に含む	
IIIe	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	黒褐色粘土質シルトを一部に含む 層状に堆積	
IIIf1	2.5Y6/2 灰黄色	砂	黒褐色粘土質シルトを一部に含む 層状に堆積 花崗岩粒を一部に含む	杭列設置後の下部自然堆積土
IIIf2	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	径1~26mmの礫を大量に含む 木片を含む	
IIIg3	5Y5/2 灰オリーブ色	砂	増反黄色シルトを一部に含む 酸化鉄粒を少量含む	
IIIg4	2.5Y3/2 黑褐色	粘土質シルト	径2~14mmの礫を少量含む	
IIIg5	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を多く含む	
IIIg6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を多く含む	
IIIh	10YR4/4 褐色	シルト	径1~13mmの礫をまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む 炭化物を一部に含む	石列設置後の堀跡堆積土
IIIi	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト	灰黄色シルトを一部に含む 酸化鉄粒をまばらに含む	
IIIj	2.5Y4/2 増反黄色	粘性シルト	黒褐色粘土を一部に含む 酸化鉄粒をまばらに含む 径2~24mmの礫をまばらに含む	石列前面の押さえ盛土か
IIIk	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト	灰黄色シルトを一部に含む 酸化鉄粒をまばらに含む	石列背後の盛土なし整地
IIIl	2.5Y4/2 増反黄色	粘性シルト	灰褐色粘土・浅黄色砂をまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む 径3~35mmの礫をまばらに含む	石列設置以前の堀跡堆積土
IV	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黑色土・褐色土のブロックを多量に含む 酸化鉄粒を多く含む	近世の整地層
Va	10YR4/4 褐色	シルト	径1~13mmの礫をまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む 炭化物を一部に含む	
Vb	10YR6/2 灰黃褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトをまばらに含む 炭化物粒をまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む	当該地の沖積層
Vc	10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	暗黄色粘土・オリーブ褐色粘土質シルトをまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む 炭化物粒をまばらに含む 径1~4cmの礫を少量含む	
Vd	2.5Y3/3 増反オリーブ褐色	粘土質シルト	暗黄色粘土・オリーブ褐色粘土質シルトをまばらに含む 酸化鉄粒をまばらに含む 炭化物粒をまばらに含む 径1~4cmの礫を少量含む	
E	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	礫・黄褐色土のブロックを含む	
F	2.5Y5/2 増反黄褐色	シルト	大型の礫を含む	
H	2.5Y5/2 増反黄褐色	砂礫	粗砂と大小の礫が混在	

検出された堤跡上部のⅢ b 層は人為的に埋められた土層、その上のⅢ a 層は、埋め立て土の土圧で沈下してきた間に流入した自然堆積土層で、礫を多く含む暗オリーブ褐色土からなる。Ⅲ b 層はにぶい黄橙色及び灰オリーブ色を呈し、礫やブロック状の土壤を含み、層厚は厚いところで 60 cm 前後を測る。

Ⅲ c 層は、黒褐色系の比較的均質な土層で、岸から徐々に流入した土砂による自然堆積層と観察される。Ⅲ d 層は細かな縞状の堆積層が連続し、層中に薄い砂層や細かな礫層を挟んでいる。両層については水流によって形成された土層と考えられ、この時期の堤の当該部分は連続的に水流にさらされる状況にあったと推察される。Ⅲ e 層は砂粒と共に多くの炭化物が含まれる黒褐色系の堆積土で、水流は比較的停滞ないし緩やかな状況で堆積した土層と観察される。Ⅲ c 層からⅢ e 層は、Ⅲ g 層からⅢ j 層の堤の古い堆積土を北側の岸面としている。

Ⅲ f1 層は、砂層と黒色系の粘土質土壤が交互に堆積し、Ⅲ d 層と同様に水流の強い影響を受けて堆積したものと観察される。Ⅲ f2 層も砂や大型の礫、未分解の植物遺体等を含み、水の影響を受けながら堆積したものと観察されるが、薄い砂層と粘土層が交互に堆積する様子は観察されないので、水がある程度溜まった状況で堆積したと考えられる。Ⅲ f3 層からⅢ f4 層は、細かい均質的な土壤からなる堆積土で、堤の岸面からの崩落土を主体とする土層と見られる。Ⅲ a 層からⅢ e 層とⅢ f 層とでは、その境や層の方向性、岸面の角度などに差異が認められる。

Ⅲ g 層からⅢ i 層も、Ⅲ a 層からⅢ f 層とは境界面や堆積層の傾斜に相違が認められ、後者は比較的水平に近い角度で堆積している。Ⅲ g 層からⅢ i 層は堤の内部の堆積土ではあるが、堤の岸部に築かれた何らかの施設の構築に係る土層の可能性も考えられる。

なお、Ⅲ d 層やⅢ f1 層のような互層状の水性堆積の形成をもたらした水源としては、埋没堤の上位に位置する「長沼」の堀が考えられる。青葉山に降った雨が大沢・大深沢、中島池、五色沼を経て長沼に入り、長沼南端には土橋や埋没堤の北側に築かれた土塁が存在したため、溢れた水は長沼に沿った通路や馬場方面に流出し、周辺の土砂を伴って埋没堤の北側から堤に流入したことが推察される。

堤跡の北岸上の通路ないし馬場付近に当たるところでは、Ⅳ 層に当たる黒色土や褐色土のブロックを多く含むにぶい黄褐色土のからなる整地層が確認されている。Ⅳ 層の厚さは 20 cm 前後である。この整地層の下は、褐色から暗いオリーブ褐色のシルトないし粘土からなる地盤の沖積層となる。

### (3) 検出遺構

#### SD-1 堀跡

埋没堤の北東角付近の岸が、 $X = -193681.5$  付近から  $X = -193682.5$  にかけて湾曲しながらⅢ g 層からⅢ j 層を岸面として確認された。土層の観察によると、初期の岸はこれより 3m 前後北側に位置している。4 区で確認された岸の北端から、2 区確認の堀南岸を東方向に延長したところまでの距離は約 67m を測り、この数字が大まかには埋没堤跡東側突出部の全長と考えられる。岸面の傾斜角度は、南北方向では 20° 前後と比較的緩やかであるが、調査区南端付近の東西方向の斜面では 50° 前後の急傾斜となっている。堀跡に連関する施設としては岸の上面付近で石列と集積(SX-8) が、岸面上部では北岸と東岸に対応を示すように直角に折れて並ぶ杭列(SX-7) が検出されている。

4 区の堀跡の土層と関係遺構の状況から、SD-1 堀跡の東側突出部北部付近は、大きくとらえると、①初期自然堆積層(Ⅲ e 層以下)、②石列等の構築とその直後の堆積土(Ⅲ g 層～Ⅲ k 層)、③Ⅲ g 層以降の堆積の前半期(Ⅲ f 層)、④Ⅲ g 層以降の堆積の後半期(Ⅲ c 層～Ⅲ e 層)、⑤埋め立てによる堆積土(Ⅲ b 層)、⑥埋め立て後にできた窪地への自然堆積土層(Ⅲ a 層)という順に埋まつたものと理解される。この間③・④の時期には流水を伴う堆積が何度もあり、堤の堆積を急速に進行させたことや、③のⅢ f 層の堆積の前後には堤の浸漬が行われた可能性が考えられる。

#### SX-7 杭列

杭列は、堀跡の北岸では岸から斜距離で約 2.2m、深さで約 70 cm 下がったところで東西方向にのびて検出された。調査区西壁から約 1.8m までのび、そこからは南側にほぼ直角に折れて南北方向に 6m 程続く。検出範囲では東西に 6 本(1 ~ 6) と南北に 32 本(6 ~ 37) の計 37 本が検出された。全体としては直線的に並んでいるが、2 ~ 3 本が重複して幅をもって検出されている部分もある。杭の間隔は 1 ~ 47 cm であるが、北辺は 23 ~ 45 cm と比較的広く重複も少ない。これに対し東辺の間隔は 1 ~ 44 cm で、密なところと広いところがある。すべての杭が同時に打たれたも

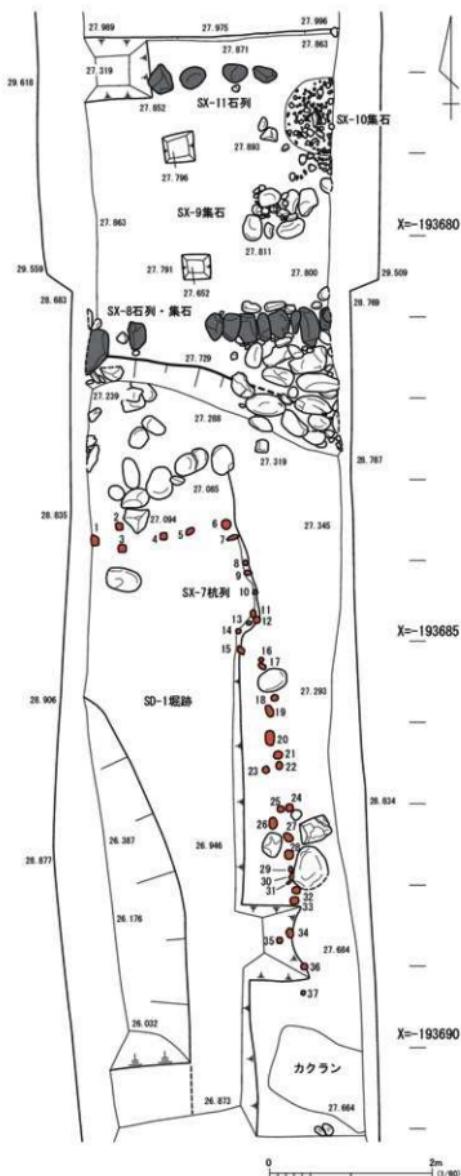
のか補修等による時間差があるかは不明である。土留等の護岸に関係する施設と考えられるが、調査範囲では横木等の関連遺構は確認されていない。4区では1区・3区のように杭列からやや下がった岸面で大型石材が密集して岸斜面から出土するような状況は認められない。杭材としては芯持ち丸材と分割材が混在するが、詳細は不明である。

#### SX-8石列・集石

石列は、北岸部で杭列の上位の位置で杭列と共に並行し、杭列から約2.5m離れたところで検出された。途中途切れる部分もあるが直線的に並び、堀の岸の地盤となる沖積層に置かれた状況である。石列の石材は長軸が28～60cmの橢円形を基調とした大型の砾で、長軸を堀の岸方向と直交させ、堀と反対の北側（通路側）に石の端部をそろえて置いている。石材端部のすぐ北側には、大型石材の長軸に直交するように、小型の石材を介石なしで押石状に置き、大型石材の位置や傾きを安定させている。石列は、現状では1列・1段だけであるが、石材の上面がそろっておらず高低差があるので、何段か積み重ねられていた可能性もある。石列の検出により、Ⅲ層と区分した土層のうち、Ⅲ k層はこの石列背後の盛土ないし整地層、Ⅲ j層は石列前面の押さえのための施設土と考えられる。Ⅲ g1層からⅢ i層は石列設置後の堀堆積土、Ⅲ h層は石列設置前の堀堆積土と考えられる。石列に接し、堀の岸斜面の東半部からは石列と同じような大型の石材が密接して出土している。集石部の石材は1段で、長軸方向に統一性は認められないが、堀の岸と並行するように置かれているように見える。これらの石材については、岸の斜面上部に置かれた「葺石」状の護岸施設の可能性も考えられる。調査区の西側の岸斜面からも大型の石材が出土しているが、こちらは堀の堆積土中であり、密集性が薄く方向性も認められることから、岸の石列ないし集石遺構から崩落したことなどが考えられる。

#### SX-9集石

石列の80cmほど北側で、大型の石材5石



第18図 4区 SD-1塙跡北東角付近の遺構群

## 6. 4 区の状況

と中小の石材がまとまって V 層に置かれた状態で出土した。石材の分布範囲は東西約 100 cm、南北 60 cm である。石材は楕円形ないし不整形で、大きさは長軸が 28 ~ 35 cm である。用途等は不明である。

### SX-10 集石

SX-9 集石の北東側の V 層面で検出された。直径約 95 cm の範囲に、長軸 19 cm を最大として中小の円錐が密集して出土した。礎石の根石のような状況を呈すが、用途等は不明である。

### SX-11 石列

調査区北寄りで直線的に東西方向に並ぶ 4 石からなる石列が検出された。SX-8 石列に並行し、中軸間の距離で約 3.2 m のところに位置する。各石材は SX-8 のように長めの石材が選択的に使われておらず、円形に近いものが長軸を東西方向に向け、8 ~ 23 cm の間隔をあけて V 層面に置かれている。

### SX-13 整地

SX-11 石列を境にしてその北側には黒色土や褐色土のブロックを多量に含むにぶい黄褐色のシルト層（IV 層）が 3 m 以上に広がる。層厚は 20 cm 前後である。この層については堀の北側の通路あるいは馬場周辺の整備のための整地層と考えられる。

#### （4）出土遺物

4 区は堀跡の北東角に当たり、土壌などに遮られていなかったためなのか、他の地区と比べて調査範囲がそれほど大きくないにも関わらず出土遺物量が多い。

第 19 図は、堀跡の掘削土砂ないし堀跡等から近現代の掘削によって巻き上げられて II 層中に含まれるようになつたと考えられる遺物である。陶器の蓋（No. 471・581）、小甕（No. 440）、鉢（No. 681）、磁器の香炉（No. 283）、碗（No. 565・307）、皿（No. 267・467・561・564）、用途不明木製品（No. 750）などがある。銃弾（No. 715）については明治以降に追廻が練兵場や射撃場として利用されていたことに関連する遺物と考えられる。

堀跡からは多量の陶器、磁器の他、土師質土器、瓦器、土製品、金属製品、瓦類、木製品類が出土している。陶器（第 20 ~ 22 図）には小坪（No. 337）、碗類（No. 20・63・64・69・81・93・94・96・97・123・280）、皿（No. 124・352・358・495）、蓋（No. 143）、土瓶（No. 486）、豆甕（No. 22・23）、瓶類（No. 82・106・285・406）、香炉（No. 83・154）、鉢類（No. 120・133・134・135・147・154）、焰燈（No. 376）、片口（No. 346）、擂鉢（No. 279・391・392）などがある。産地としては大坂相馬産の製品が多く、他に小野相馬・堤・岸・唐津・肥前・瀬戸・美濃・織部のものがある。年代としては 16 末から 17 世紀初頭のものから 19 世紀中葉頃のものまであるが、18 世紀以降のものが大半を占める。陶器の碗の中には底部に孔をあけて漏斗として使用したもの（No. 64）がある。また、大型の擂鉢にも同じように底部に穿孔しているもの（No. 391）がある。碗 No. 123 は高台内に 3 本の太線を墨書きし、高台と合わせて伊達家の家紋の一つである「三引両」に見える。

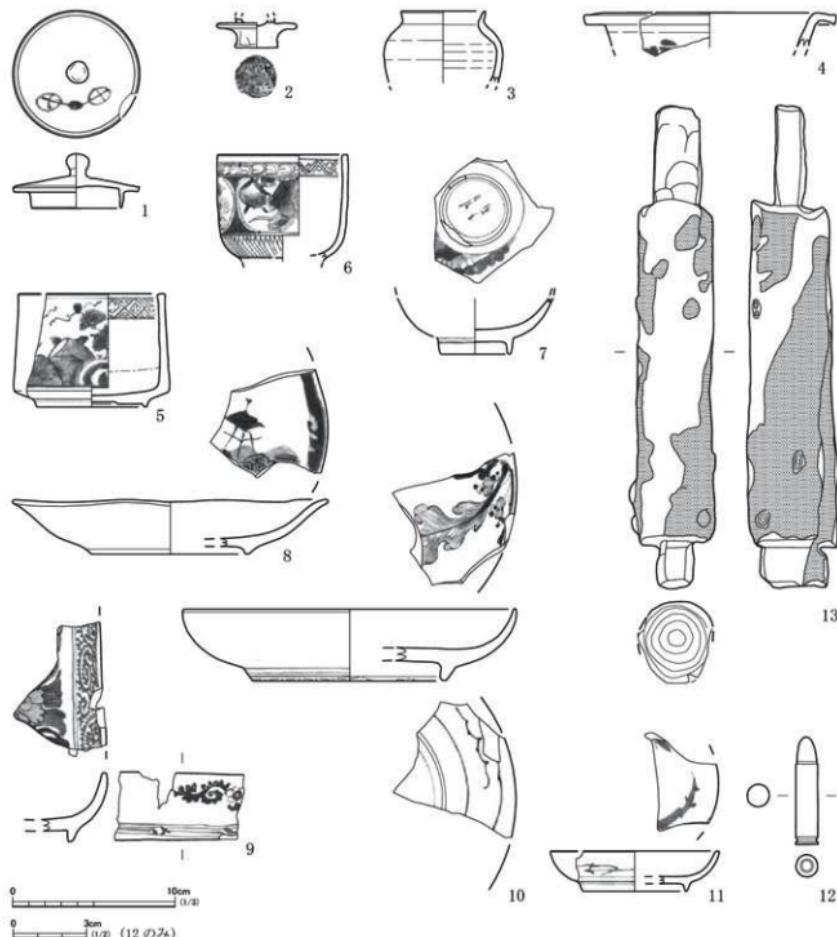
磁器（第 22 図～26 図）には碗（No. 7・38・40・46・53・215・246・247）、端反碗（No. 42・44・190・195・197・236）、くらわんか碗（No. 595）、広東碗（No. 52・194・199・200）、蓋類（No. 77・210・229・242）、小型皿（No. 250）、皿（No. 31・85・198・244・493）、中皿（No. 1・16・32・84・193）、八角中皿（No. 770）、輪花皿（No. 34・214・230・249・492）、変形皿（No. 235）、瓶類（No. 5・216・243）、猪口（No. 196）、蓋物（No. 47）、仏飯器（No. 13・338）などがある。肥前産の染付が大多数を占め、他に波佐見、瀬戸美濃がわずかに見られる。17 世紀中頃から 19 世紀中葉のものまであるが、多くは 18 世紀から 19 世紀前半頃のものである。

土師質土器（第 26 図）には蚊遣の蓋と考えられるもの（No. 637）と小型の灯明皿（No. 186・276・277・404）がある。瓦質土器（第 27 図）には火鉢及びその可能性のあるもの（No. 396・641・692）がある。

土製品（第 27 図）には小型の土鉢（No. 390）と土人形（No. 636）がある。土人形は振袖を着た女性像で、彩色は残っていない。

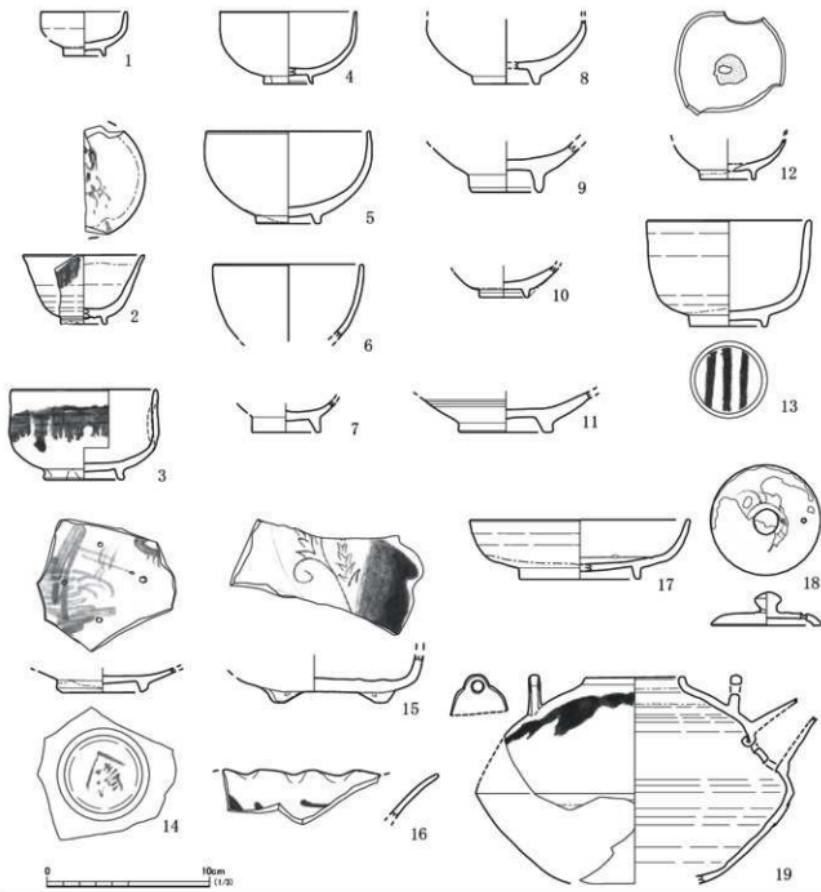
金属製品（第 27 図）には、鍍金がわずかに残る煙管の雁首部（No. 421）、同じく鍍金が残り火皿部の欠損する煙管雁首片（No. 420）、用途不明の半円形の管状銅製品（No. 422）がある。

瓦類（第 28 図）で図化したものには、三引両文軒丸瓦（No. 555）、三巴文軒丸瓦（No. 604）、三巴連珠文軒丸瓦（No.



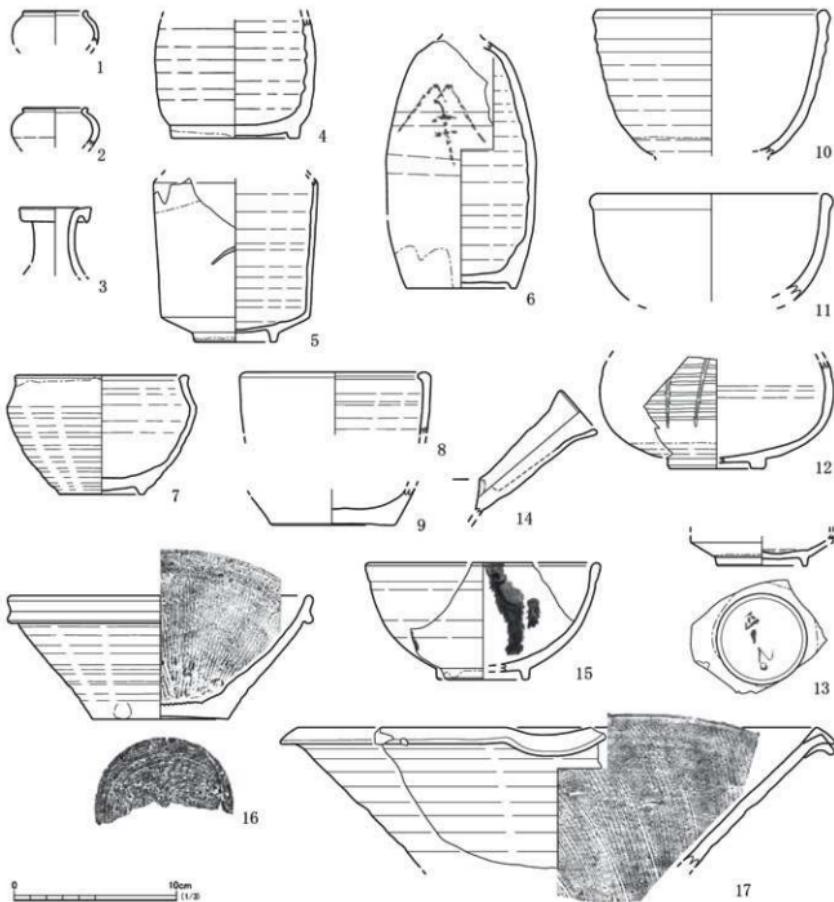
地	登録No.	種類	器種	産地	年代	地区	遺構	層位	高さ・長さ径・幅	周	備考	写真図版
1	471	陶器	土瓶	大根相馬	19c後半	4区	掘上土	3.4	7.8	1.4	瓦須柄	15-20
2	518	陶器	瓶	大根相馬	19c前葉～中葉	4区	II	(1.8)	4.9	2.6	つまみ袋(2.4) 線物 底面:回転糸切り板	15-18
3	440	陶器	小甌	瀬戸	18c代	4区	掘上土	(4.4)	(5.2)	(-)	鉄袖	15-24
4	681	陶器	鉢	美濃	17c～18c	4区	搅乱	(2.1)	(16.4)	(-)	灰袖 線物流し	16-11
5	283	磁器	壺	肥前	18c後半	4区	II	7	(9)	(6.6)	染付 内面:西方桜 外面:太鼓石	20-9
6	565	磁器	萬葉碗	肥前	19c前葉	4区	掘上土	(6.5)	(8)	(-)	染付 草花文	17-13
7	307	磁器	碗	波佐見	肥前	4区	掘上土	(3.4)	(-)	4.4	染付 櫻樹文? くらわんか柄?	17-17
8	467	磁器	碗	肥前	4区	掘上土	3.3	(19.4)	(9.8)	(-)	染付 内面:2階建て櫻形	18-14
9	561	磁器	高足	肥前	19c前葉	4区	掘上土	4.3	(-)	(-)	染付 見込:花文 椿唐草	20-4
10	564	磁器	高足	肥前	18c代	4区	掘上土	4.4	(22)	(11.8)	染付 内面:草花文 外面:蔓草	18-17
11	267	磁器	高足	肥前	17c～18c	4区	掘上土	2.5	(10.4)	(6.4)	染付 外面:折れ松葉 高台内一重圓縁	18-15
12	715	金属製品	鏡	不明	4区	II	4.3	0.9	(-)	(-)	芯持丸材両端に方形突起の造りだし	21-1
13	750	木製品	不明	不明	4区	掘上土	29.5	5	5	(-)	(-)	21-10

第19図 4区出土遺物実測図(1) カクラン・II層・掘削土中



No.	登錄No.	種別	器種	地質	年代	地区	遺構	部位	高さ・直径・幅・底径・厚	備考	写真図版
1	237	陶器	小杯	大坂相馬	18c後半以降	4区	Ⅲ	2.75	(5.2) (2.6)	灰釉	15-1
2	342	陶器	壺瓦	大坂相馬	19c前葉～中葉	4区	Ⅲ	4.25	(7.4) (2.8)	外面:灰釉に鉛釉流し 見込:須繪	15-2
3	280	陶器	碗	大坂相馬	18c	4区	Ⅲ	5.6	(9) (5)	外面:灰釉に鉛釉流し 見込:目底3個	15-3
4	94	陶器	碗	大坂相馬	18c～19c	4区	Ⅲ	4.45	(8.4) (3)	灰釉 蓋付無	15-4
5	81	陶器	碗	大坂相馬	18c	4区	Ⅲ	5.7	10	4 灰釉	15-5
6	97	陶器	碗	肥前	17c後半	4区	Ⅲ	14	(4.65) 4.6 (-)	肥前陶器 刷毛目	15-6
7	69	陶器	碗	肥前	17c代	4区	Ⅲc	(1.8)	(-) 4.2	小型 肥前陶器 長石釉	15-7
8	93	陶器	腰折碗	大坂相馬	18c	4区	Ⅲ	14	(3.9) (-)	4 灰釉	15-8
9	96	陶器	碗	肥前	18c	4区	Ⅲ	14	(2.7) (-)	(4.4) 肥前陶器 灰釉 蓋付無	15-9
10	20	陶器	碗	大坂相馬	18c代	4区	Ⅲ	1	(1.9) (-)	(3.1) 灰釉	15-10
11	63	陶器	碗	大坂相馬	18c代	4区	Ⅲc	(2.2)	(-) (5.2)	灰釉 灰釉と灰釉の掛分	15-11
12	64	陶器	小杯	大坂相馬	18c後半以降	4区	Ⅲc	(2.5)	(-) 3.4	白滑釉 底部:二次加工(外面から穿孔)	15-12
13	123	陶器	盞	美濃	18c	4区	Ⅲ	14	6.5 (10.2) (4.8)	灰釉 高台内:墨葉・三引目?	15-13
14	358	陶器	壺	大坂相馬	19c前葉～中葉	4区	Ⅲ	(1.5)	(-) (5.6)	内面:鐵絵、須繪 見込:目底4個 墨葉	15-14
15	124	陶器	壺	向付	17c前葉	4区	Ⅲ	14	(2.9) (-)	外面:網絵 内面:鐵絵、須繪 墨葉	15-15
16	352	陶器	輪花壺	唐津	16c末～17c初	4区	Ⅲ	(2.7)	(-) (-)	灰底津	15-16
17	495	陶器	壺	肥前	17c後半	4区	Ⅲ	3.65	(13.6) (7.4)	肥前陶器 灰釉 内面:波線に目底	15-17
18	143	陶器	壺	不明	19c(江戸時代)	4区	Ⅲ	2.1	6.8	つまみ後1.6cm 施墨の大部分が剥落	15-18
19	496	陶器	土瓶	大坂相馬	19c前葉～中葉	4区	Ⅲ	14	(12.6) 6.2 (-)	白滑釉に鉛釉流し	15-21

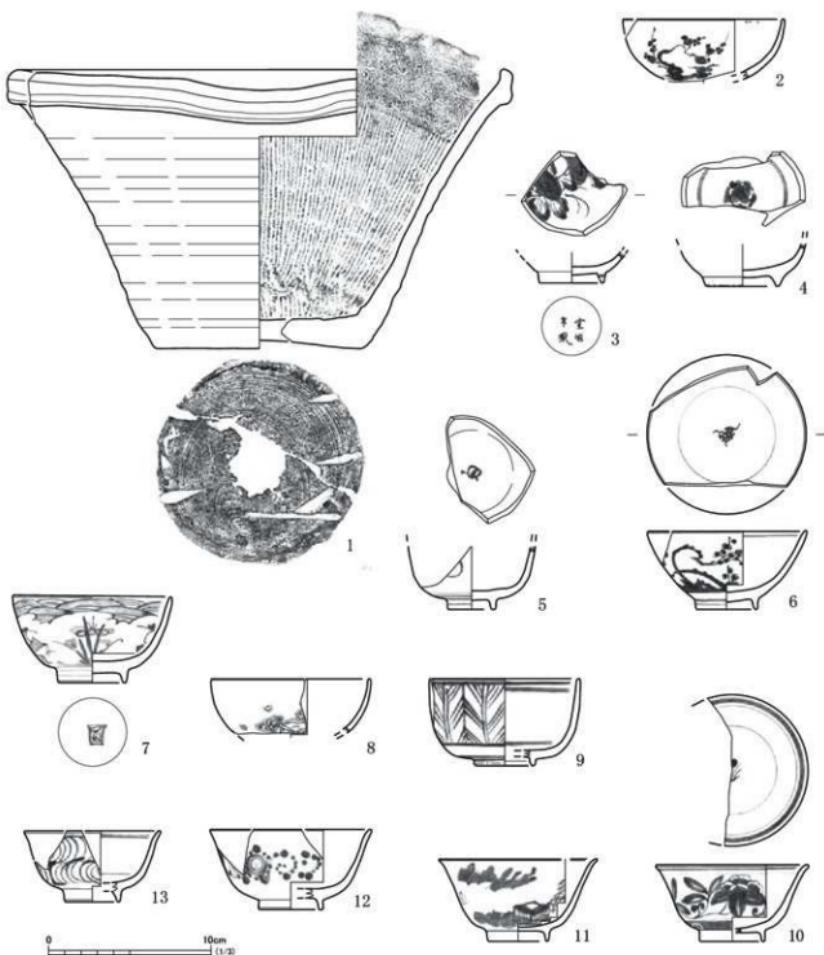
第 20 図 4 区出土遺物実測図 (2) 堀跡陶器①



No.	登録場所	種別	種類	产地	年代	地区	遺構	部位	壁高・底口径・幅・底径・厚	備考	写真図版
1	22	陶器	豆甌	大庭相馬	19c前半～中葉	4区	III	(4)	(~) (2.1)	鉄輪	15-22
2	23	陶器	豆甌	大庭相馬	19c前半～中葉	4区	III	(4)	(~) (2.4)	鉄輪	15-23
3	406	陶器	俵	賀戸	19c中頃？	4区	III	F4	(4.6) (~) (~)	鉄輪	15-25
4	106	陶器	俵割丸目	賀戸東濃	19c代	4区	III	F4	(~) (7.8) (7.3)	鉄輪	16-1
5	285	陶器	壺	大庭相馬	4区	III	F4	(~) (10.5) (5)	俵割か油壺？ 上部鉄輪 白毫輪に舟彫絵	16-2	
6	82	陶器	俵	賀戸	19c前半～中葉	4区	III	F4	(15.1) (~)	6.8 打番糸	16-3
7	83	陶器	壺	大庭相馬	19c代	4区	III	F4	7.3 (10.6) (5.2)	口唇部：鉄輪	16-4
8	154	陶器	壺	小野相馬	19c	III	(3.75)	(11.6) (~)	火入れ(灰落とし)の可能性あり 淡青色釉	16-5	
9	133	陶器	壺	舟	17c代	4区	III	2.3 (~)	7.8 小型 外面：縦かい刻毛目	16-6	
10	120	陶器	杯	賀戸東濃	19c？	4区	III	F4	(8.9) (14) (~)	鉄輪	16-7
11	135	陶器	杯	小野相馬	19c代	4区	III	(6.6) (14.2) (~)	淡青色釉	16-8	
12	147	陶器	杯	大庭相馬	19c代	4区	III	(6.8) (~)	鉄輪	16-9	
13	134	陶器	鉢	大庭相馬	19c代	4区	III	(1.85)	5.6 鉄輪 高台内墨書き	16-10	
14	376	陶器	盤	堤	19c前半～中葉	4区	III	(7.7) (~)	持ち手長さ：7.4 折輪	16-12	
15	346	陶器	片口？	大庭相馬	19c前半～19c前半	4区	III	7.2 (14.4) (5.6)	鉄輪、鉄輪造し	16-12	
16	392	陶器	瓶	堤	19c前半～中葉	4区	III	7.6 (18.2) (8.2)	小型 鉄輪	16-15	
17	279	陶器	壺	不明	19c以前	4区	III	F4 (8.5) (34) (~)	鉄輪	16-14	

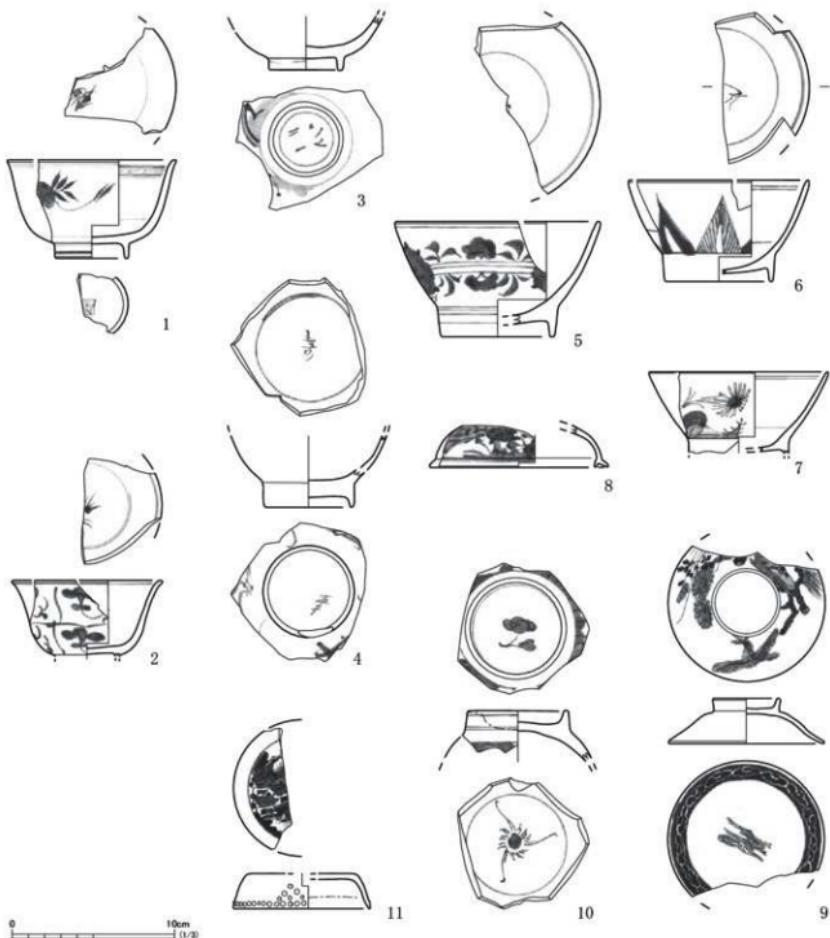
第21図 4区出土遺物実測図(3) 堀跡陶器②

## 6、4区の状況



No.	登錄地	種別	器種	產地	年代	地区	造様	形位	高さ・底 口径・幅	底径・厚	備考	写真図版
1. 391	南房	磁器	碗	伊賀	19c前葉～中葉	A地区	直	皿	17.1 (32.5)	12.8 (32.5)	鉢脚、底部に3cmの穴(植木鉢利用?)。No.110と合	16-16
2. 7	磁器	碗	肥前	18c後半	4区		直	(3.9)	(10)	(-)	染付、岩と梅樹文	17-1
3. 38	磁器	小型碗	肥前		4区		直	(1.9)	(-)	4	染付、見込み、草花文	17-2
4. 40	磁器	小型碗	肥前	17c末～18c初	4区		直	(2.6)	(-)	4.6	青磁染付、手描きの五弁花	17-3
5. 46	磁器	碗	瀬戸美濃	19c中頃	4区		直	(3.9)	(-)	3	染付	17-4
6. 53	磁器	碗	肥前	18c後葉～19c初	4区		直	4.8 (9.8)	3.8 (9.8)	染付、外腹:梅樹文、見込み、宝文? 伝醍醐寺	17-5	
7. 215	磁器	碗	肥前	18c前葉～中葉	4区		直	5.3 (3.3)	8.8 (9.8)	4.2 (-)	染付、葛籠文様、高台内に二重鉄の添瓶	17-6
8. 247	磁器	碗	肥前	19c前半	4区		直	(3.3)	(9.8)	(-)	染付	17-7
9. 246	磁器	碗	肥前	18c末～19c初	4区		直	5.3 (9.2)	(3.8) (9.4)	染付、外腹:矢羽根文	17-8	
10. 42	磁器	碗	肥前	瀬戸美濃	19c中頃	4区	直	4.7 (9.4)	(4)	染付、外腹:草花文	17-9	
11. 44	磁器	碗	不明	19c代(江戸時代)	4区		直	5.1 (9.8)	(3.8) (9.8)	染付、外腹:山水文	17-10	
12. 190	磁器	碗	肥前	瀬戸美濃	19c前葉～中葉	4区	直	4.9 (10)	(4)	染付、花文?	17-11	
13. 236	磁器	碗	肥前	19c前半	4区		直	4.4 (8.4)	(3.4)	染付	17-12	

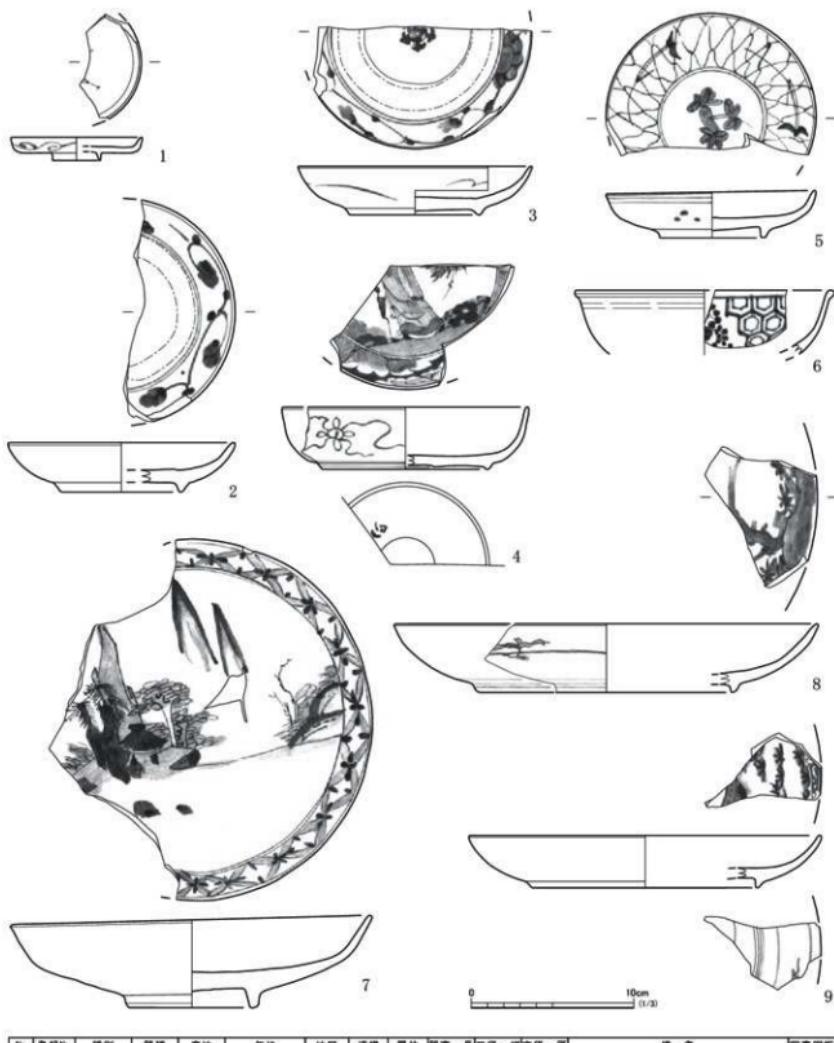
第22図 4区出土遺物実測図(4) 堀跡陶器③・磁器①



No.	器種類	種別	整理	発地	年代	地区	遺構	層位	埋深・長口徑・幅	埋深底・厚	層号	写真回数
1	磁器	碗	破	肥前	19世紀半	4区	面	6	(10.4) (4.4)	染付・外腹・草花文、高台内:一重の「福」	17-14	
2	磁器	碗	裏返り破	瀬戸美濃	19世紀・中葉	4区	面	(4.6) (9.2) (-)	染付・外腹・物芝文、見込:草文	17-15		
5	磁器	碗	波佐見	18世紀		4区	面e	(2.5) (-)	4.6 (くわんか美濃) 草花文、高台内に施?	17-16		
4	磁器	広東碗	肥前	18世紀～19初	4区	面	(4.3)	(-) 5.6	染付・高台内: 情成後の朱書き? 染込: 羽?	17-19		
5	磁器	広東碗	肥前	18世紀～19初	4区	面	7.1	(12.6) (7)	染付・外腹・花文、見込: 文様?	17-18		
6	磁器	広東碗	肥前	18世紀～19前葉	4区	面	6.2	(11) (6.6)	染付・見込: 葵? 黒文	18-1		
7	磁器	広東碗	肥前	19世紀半	4区	面	(5.0)	(11) (6.2)	染付・面に草花文	18-2		
8	210	磁器	蓋	肥前	17世～18世	4区	面	T4 (2.6) (11)	染付・き締・草花文	18-3		
9	229	磁器	蓋	肥前	19世紀半	4区	面	2.8	9.6	4.1	染付・広東碗の蓋? 外島・草花、内墨締	18-4
10	242	磁器	蓋?	肥前	18世紀～19初?	4区	面	(3.1)	(-) 6.2	染付・広東碗の蓋? 宝文か草花文	18-5	
11	77	磁器	蓋?	肥前?	18世?	4区	面	2.15	(8.4)	染付・書合の蓋?	18-6	

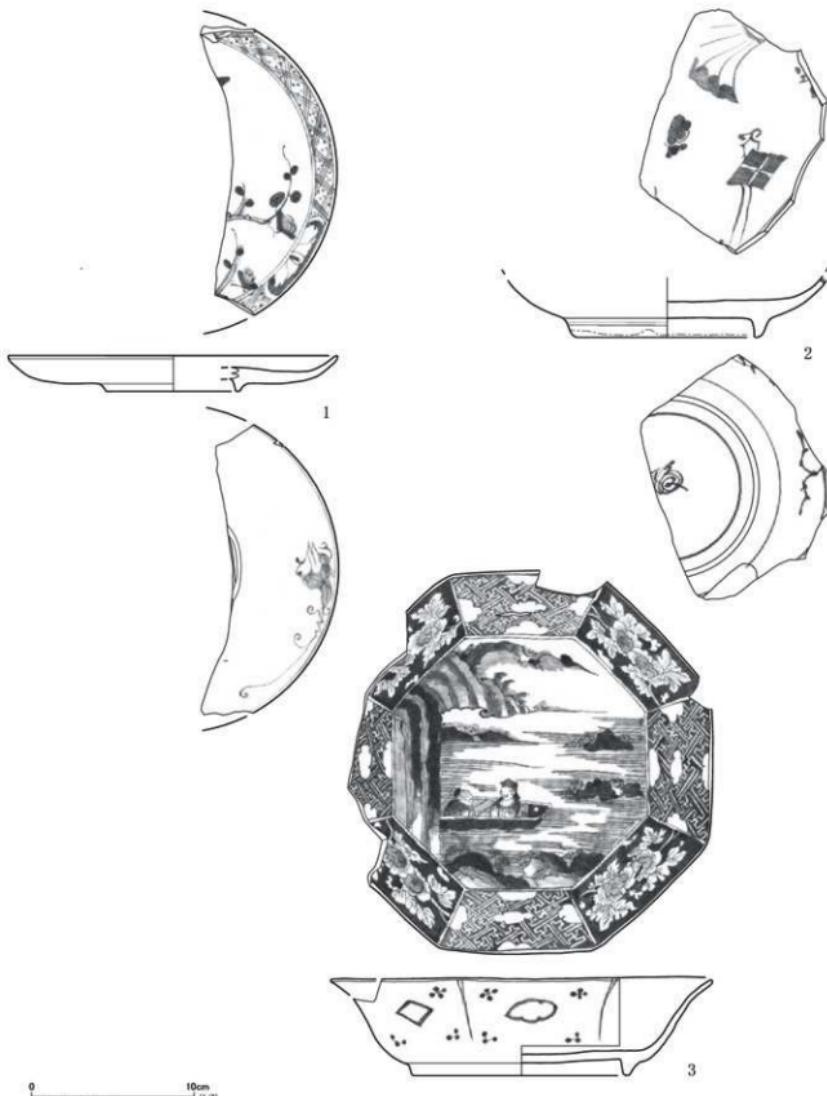
第23図 4区出土遺物実測図(5) 堀跡磁器②

## 6、4区の状況



No.	登錄No.	種別	器種	産地	年代	地区	遺構	部位	最高・長径	口径	幅底径	厚	備考	写真図版	
1	250	磁器	小型皿	肥前?	不明	4区	三	f14	1.4 (8)	(3)	奥付	外腹: 葉草		18-7	
2	31	磁器	皿	波佐見	18c代	4区	三	3 (14)	(7.6)	奥付	内面: 葉草文、見込: 蛇の目触剥ぎ		18-8		
3	85	磁器	皿	波佐見	18c	4区	三	f14	3 14.3	8	奥腹	葉草文、蛇の目触剥ぎ、コンニャク五弁花		18-9	
4	244	磁器	皿	肥前	18c後半	4区	三		3.8 (15.2)	(10.2)	奥付	外腹: 宝文、蛇の目剥ぎ、高台朱書き		18-10	
5	198	磁器	皿	肥前	17c後葉	4区	三		2.9 (4)	12.9 (16)	6.6 (->)	奥付	一鳥網目文に折れ桟葉、見込草花文		18-11
6	493	磁器	皿	肥前	18c後半?	4区	三	f14	5.7 (4)	22.2 (7.8)	7.8 (5.6)	奥付	内面: 草花文に隼甲文、口縁部: 玉縫		18-12
7	1	磁器	中皿	肥前	17c中葉-後半	4区	三		4.2 (21.6)	26 (14)	15.6 (3.2)	奥付	内面: 黒墨、山水文、口唇部: 口さび		19-1
8	16	磁器	中皿	肥前	18c代	4区	三		4.2 (21.6)	26 (14)	15.6 (3.2)	奥付	内面: 茅木文、外腹: 葉草		18-13
9	22	磁器	皿	肥前	18c代	4区	三		3.2 (21.6)	14.2 (14)	15.6 (3.2)	奥付	内面: 雛文、口さび 火を受けている		18-14

第24図 4区出土遺物実測図 (6) 堀跡磁器③



No.	登錄No.	種別	断縁	地	年代	地区	道横	所位	標高・長口径・幅底径・厚	備考	写真図版
1	84	磁器	中底	肥前	17後半	4区	直	f4	2.2 (20.2) (0.2)	染付 花樹文、外面：藍草、口縁部：四方理	19-3
2	193	磁器	中底	肥前	18c中葉	4区	直		(3.7) (-) (11.4)	染付 付裏：藍草、高台内：溝様 ハリ支え板	19-2
3	770	磁器	八角中底	肥前	18c代	4区	直	6	(23.3) 12.4	染付 内面：草花、砂波文(差掛け) 條綴ぎ底	19-4

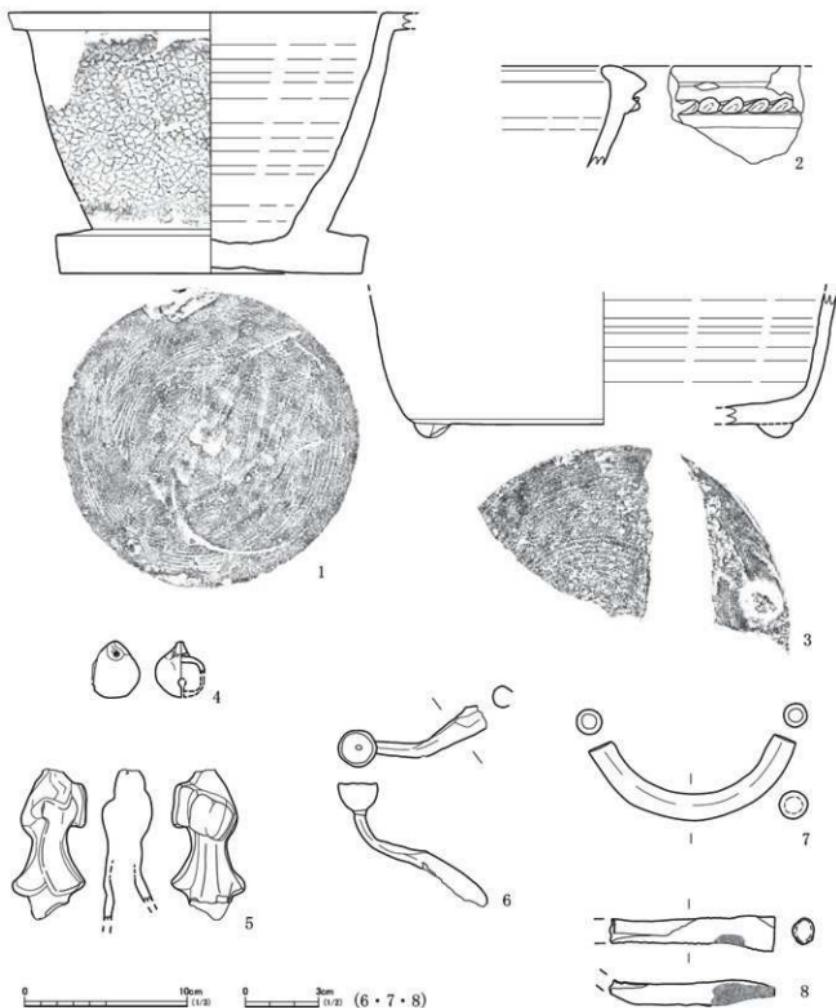
第25図 4区出土遺物実測図 (7) 塙跡磁器④



No.	登錄地	種別	器種	度地	年代	地区	遺構	所位	鉢高・足口径・幅底径・厚	備考	写真図版
1	249	磁器	輪花皿	肥前	16世紀	4区	Ⅲ	3	(13.6) (8)	内面: 轮花文 外面: 菊草	20-1
2	214	磁器	輪花皿	肥前	17世紀頃	4区	Ⅲ	4	3.8 (14) (4.8)	染付	20-2
3	492	磁器	輪花小皿	肥前	18世紀	4区	Ⅲ	4	2.6 (10.2) 6	染付 東屋: 山水文	20-3
4	34	磁器	輪花皿	肥前	17世紀～18世紀初	4区	Ⅲ	(3.3) (3)	(17) (14) (-)	染付 内面: 松竹梅 外面: 菊草	19-5
5	230	磁器	輪花皿	肥前	19世紀半	4区	Ⅲ	2.2 (2)	(10.4) (6.6)	染付 内面: 椿唐草文、コンニャク判草花文	19-6
6	235	磁器	束腰盤	肥前	18世紀半?	4区	Ⅲ	2.2 (7.7)	(10.4) (6.6) (-)	型押し成型 コンニャク判草花文	20-5
7	216	磁器	輪首瓶	肥前	19世紀前半～中葉	4区	Ⅲ	2.2 (5.5)	(1.6) (-) 4	染付 健唐草と松竹梅	20-6
8	243	磁器	輪首瓶?	肥前	19世紀前半～中葉	4区	Ⅲ	2.2 (5.5)	(1.6) (-) 4	染付 松竹梅	20-8
9	5	磁器	瓶	肥前	19世紀半	4区	Ⅲ	(3.8)	(-) 7.4	染付	20-7
10	196	磁器	壺口	肥前	18世紀～19世紀初	4区	Ⅲ	5.3 (6)	(4.2) (4.2)	染付 外面: 雪場文 見込: 二重團錐	20-10
11	47	磁器	蓋物	肥前	18世紀	4区	Ⅲ	(6.1)	(15.4) (-)	染付 梅樹文	20-11
12	13	磁器	仏像器	肥前	18世紀	4区	Ⅲ	5	5.2 3.6	染付	20-12
13	338	磁器	仏像器	肥前	18世紀半?	4区	Ⅲ	4.85 (5.2)	3	染付 外面: 桐文(型紙捺り)	20-13
14	637	土師質土器	壺	19世紀前?	4区	Ⅲ	3.05 (15.4)	7.7	枝垂りの蔓 底部: 回転糸切り痕	20-18	
15	276	土師質土器	壺	4区	Ⅲ	4	5.4 (2)	3.8	底部: 回転糸切り痕	20-14	
16	404	土師質土器	灯明皿	4区	Ⅲ	4	1.8 (6.2)	4	底部: 回転糸切り痕 打ちこいて使用	20-15	
17	186	土師質土器	灯明皿	4区	Ⅲ	2.2 (2.4)	(4.4)	5	内面: 染付 痕 底部: 回転糸切り痕	20-16	
18	277	土師質土器	灯明皿	4区	Ⅲ	2.3 (8.2)	5	内面: 染付 痕 底部: 回転糸切り痕	20-17		

第 26 図 4 区出土遺物実測図 (8) 堀跡磁器⑤・土師質土器

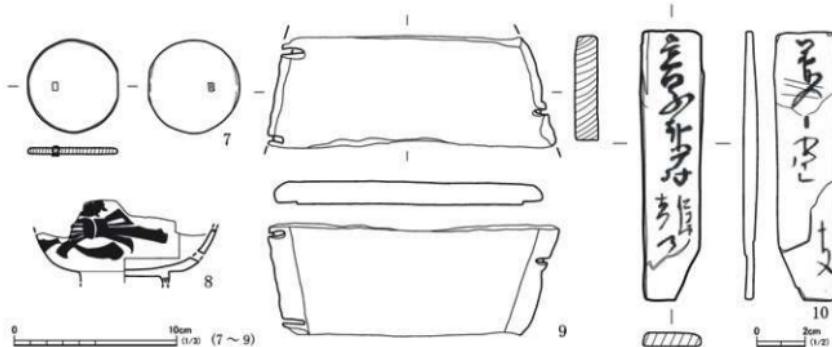
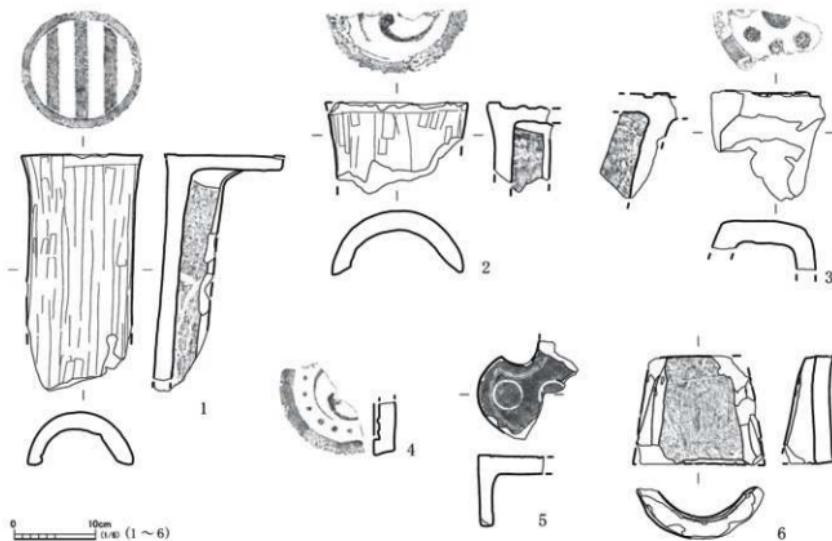
(cm)



番号	遺物名	種別	器種	產地	年代	地区	遺構	層位	壁高・底口径・幅底径・厚	備考	写真図版
1	692	瓦質土器	火鉢?			4区		Ⅲ	159.5 (24.8) 18.6		20-19
2	641	瓦質土器	火鉢			4区		Ⅲf4	(6.2) (-) (-)		20-20
3	396	瓦質土器	火鉢			4区		(8.8)	(-) (22)		20-21
4	390	土製品	土鉢			4区		Ⅲ	3.5 (3) 0.4		20-22
5	636	土製品	土人形			4区		Ⅲ	(9.3) (4.5) (3.1)		20-23
6	421	金属製品	煙管			4区		Ⅲf4	(6.1)	煙管部 火鉢部 1.6×1.5cm 重量9g	21-2
7	422	金属製品				4区		Ⅲ1	8.5	煙管部 径1cm 重量30g	21-3
8	420	金属製品	煙管			4区		Ⅲf4	6.7	0.5 煙管部 径1cm 重量10g 金箔付希	21-4

第27図 4区出土遺物実測図(9) 塙跡瓦質土器・土製品・金属製品

6, 4 区の状況



No.	登録No.	種別	基種	産地	年代	地区	遺構	周位	縦高・長口径・幅	既往性・用	備考	写真図版
1	555	瓦	軒丸			4区	壁14	(26.8)	14.6	2.1	三引文 内区径12.2 周縁幅1.4	21-6
2	604	瓦	軒丸			4区	壁	(11.2)	(14.8)	2.3	三引・左 周縁幅2.35 周縁深さ0.4	21-7
3	653	瓦	飾り			4区	壁	(13.3)	(10)	2.7	九字文 周縁幅2.2 周縁深さ0.6 №690と推合	21-8
4	644	瓦	軒丸			4区	壁	(-)	(7.2)	(-)	珠文三巴・左 周縁幅2 周縁深さ6.5	21-5
5	654	瓦	飾り			4区	壁14	(-)	(12.3)	2.2	丸瓦 側板幅8.7 前縁厚さ1.6	21-9
6	614	棗				4区	壁k	13.2	(-)	2.1	輪廻文 前縁(15.6) 後縁(9.2)	
7	774	木製品	不明			4区	壁14	5.7	5.5	0.4	円底状 1か所に縫じ縫	21-12
8	762	木製品	漆器模			4区	壁e	(5.1)	(-)	(5.4)	外腹: 黒漆に朱絵 内腹: 朱漆 棚部に穿孔	21-13
9	778	木製品	容器			4区	壁14	17.1	7.3	1.4	升状容器の部材?	21-14
10	772	木製品	木柾			4区	壁14	(11)	2.5	0.6	圓面墨書き 荷札木柾?	21-11

第 28 図 4 区出土遺物実測図 (10) 塙跡瓦・木製品①



No.	登錄No.	種類	形種	産地	年代	地区	遺構	部位	高さ・長口径・幅・底径・厚	備考	実測図版	
1.	775	木製品	下駄			4区	Ⅲf4	(7.4)	(5.3)	0.9	通齒下駄の踵側の破片 高さ 1.4cm	21-15
2.	776	木製品	下駄			4区	Ⅲf4	(11.4)	6.2	0.8	通齒下駄の爪先側の破片 高さ 1.7cm	21-16
3.	777	木製品	下駄			4区	Ⅲf4	10.6	6.1	1.3	通始式の草履下駄の爪先側	21-17 (cm)

第29図 4区出土遺物実測図(11) 塙跡木製品②

644)、九曜文軒丸瓦 (No.653)、鬼瓦の脚部付近の破片 (No.654)、輪違い (No.614) がある。No.653 軒丸瓦の上面は平坦に加工されており、上に乗る瓦と組み合わせて使用された可能性が考えられる。鬼瓦の端部はわずかにひれ状に反りあがり、縁辺部に珠文が押されている。このほかに平瓦、丸瓦の破片も多く出土している。

木製品 (第28～29図) は陶磁器類に比べると出土量が少ない。No.774 は柾目の薄い円盤状の板材で、縦じ紐が1か所に確認できる。No.772 は漆器の椀で、内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で組結びと見られる文様が描かれる。腰部には漆の塗布後に小さな円孔があけられており、何らかの再利用がされたと考えられる。No.778 は口縁側が広がる四方軒びの箱型容器の破片と考えられるもので、内側に板の厚さ分の削り込みがある。上下両端とも欠損する。

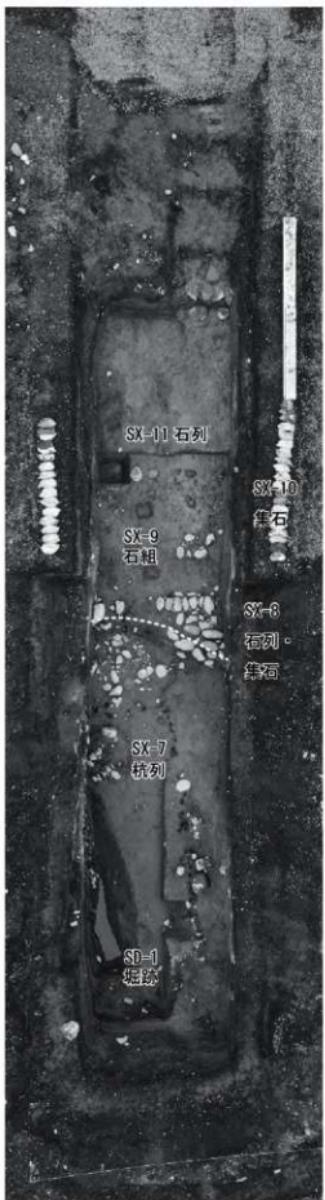
No.772 は両面に墨跡の認められる木筒である。下端は片方の側面から削られて尖っている。

□ 定	・ 御
□ 日	・ 米
□ 分	□ 五
□ 力	〔カ〕
□	一
村	
直	伊
一	一

とも読めるが、文字が不鮮明のため正確な解説は困難である。内容や形状から判断すると、年貢米などに付けられた荷札木筒と考えられる。

No.775 と No.776 は小ぶりな連齒の白木の下駄で、前者は踵側、後者は爪先側の破片である。No.776 の鼻緒孔の右側には側辺にかけてわずかな凹みが観察され、親指の擦痕と考えられる。No.777 は分割式の草履下駄の爪先側である。

6、4区の状況



1 4区全景（上が北）



2 SX-7 杖列と SX-8 石列・集石（上が東）



3 SD-1 堀跡北岸付近の石列と集石（上が東）



4 SX-8 ~ 11 遺構（南西から）

写真図版 12 4区全景と検出遺構



1 SX-7 杭列（北から）



2 SD-1 堀跡と SX-7 杭列、SX-8 石列・集石（南から）

6. 4 区の状況



1 SD-1 堀跡堆積土層（西壁南部）

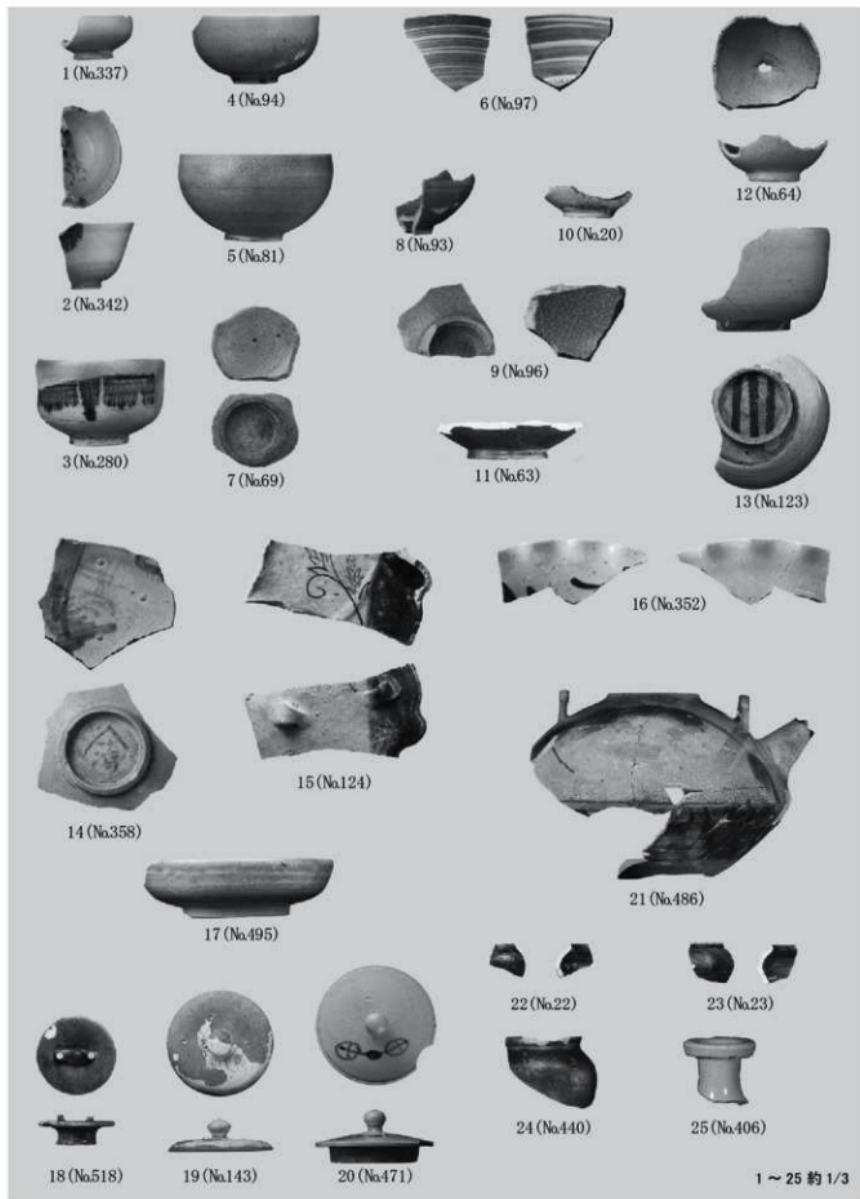


2 SD-1 堀跡の SX-8 石列背後の土層（西壁中央付近）



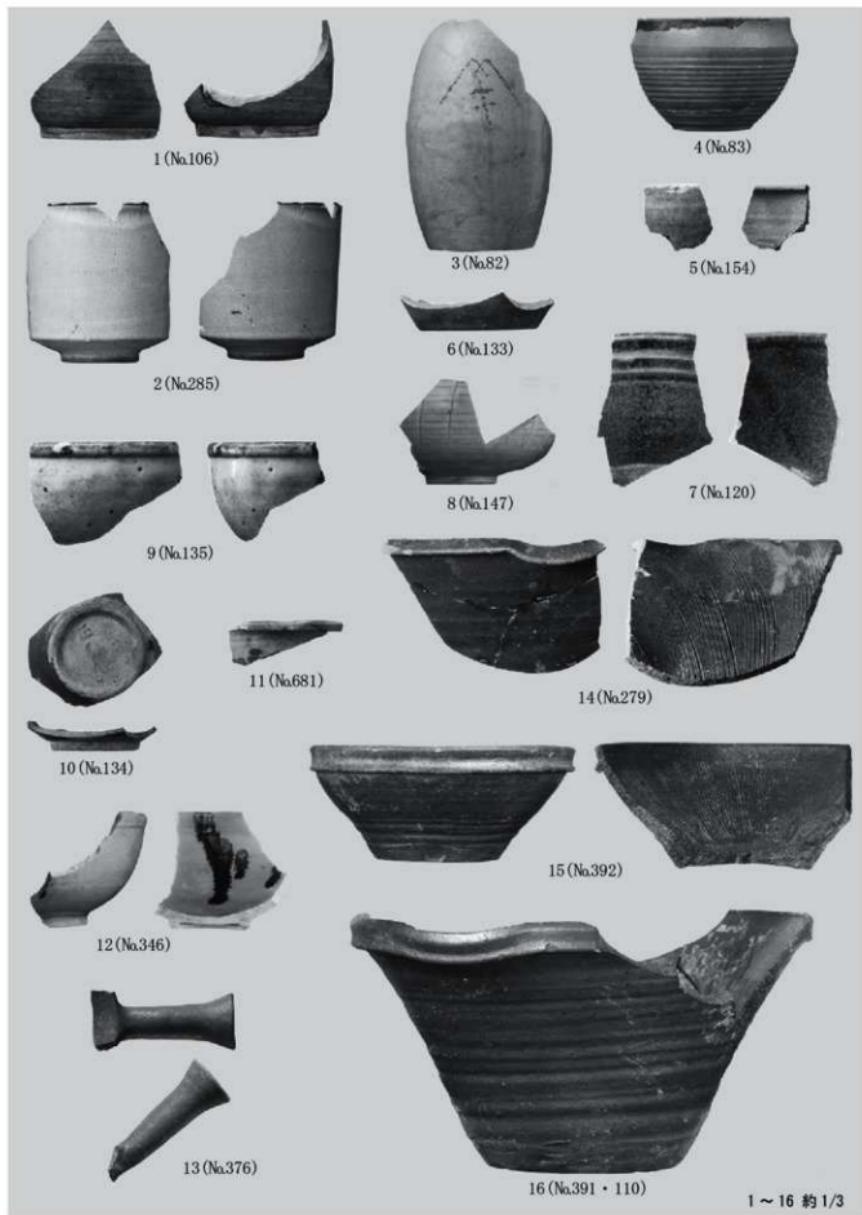
3 調査区北端付近の土層（西壁北部）

写真図版 14 4 区の土層断面

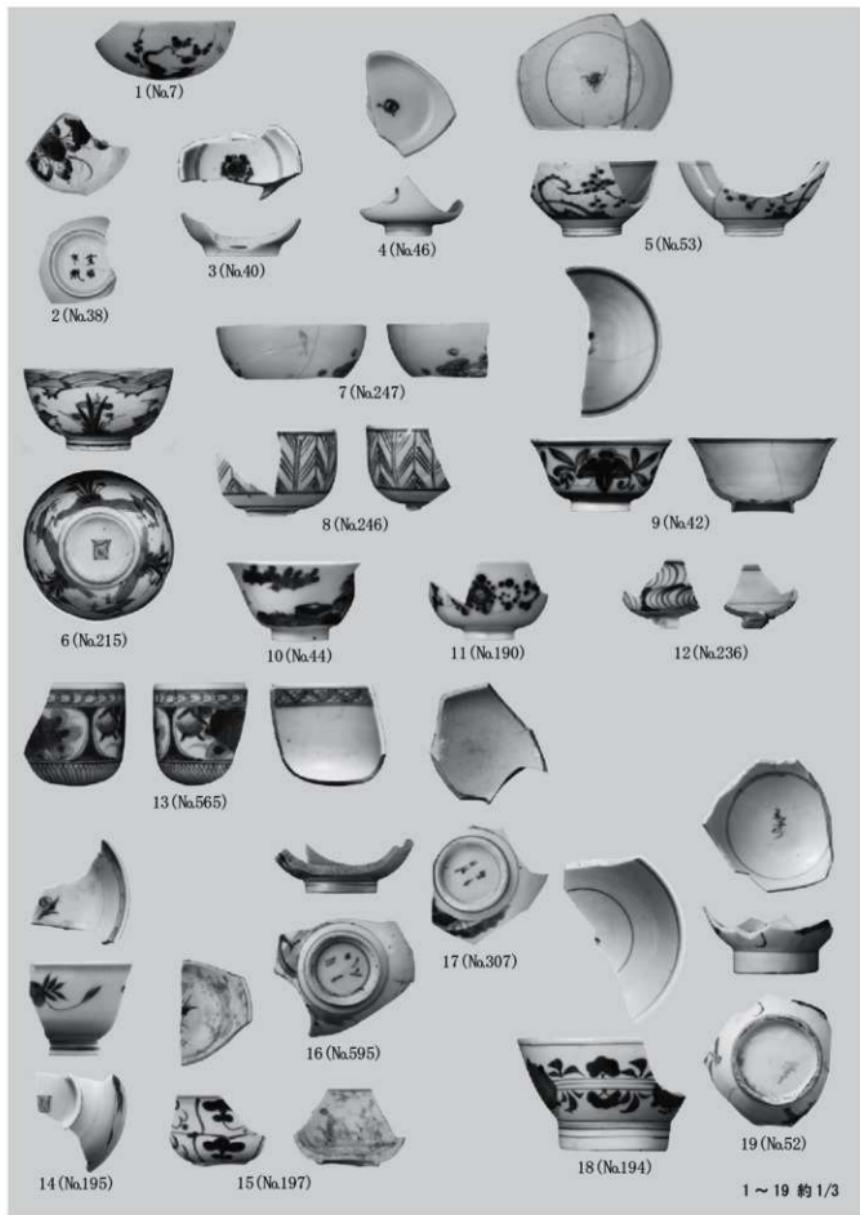


写真図版 15 4 区出土遺物 (1) 陶器①

6, 4 区の状況

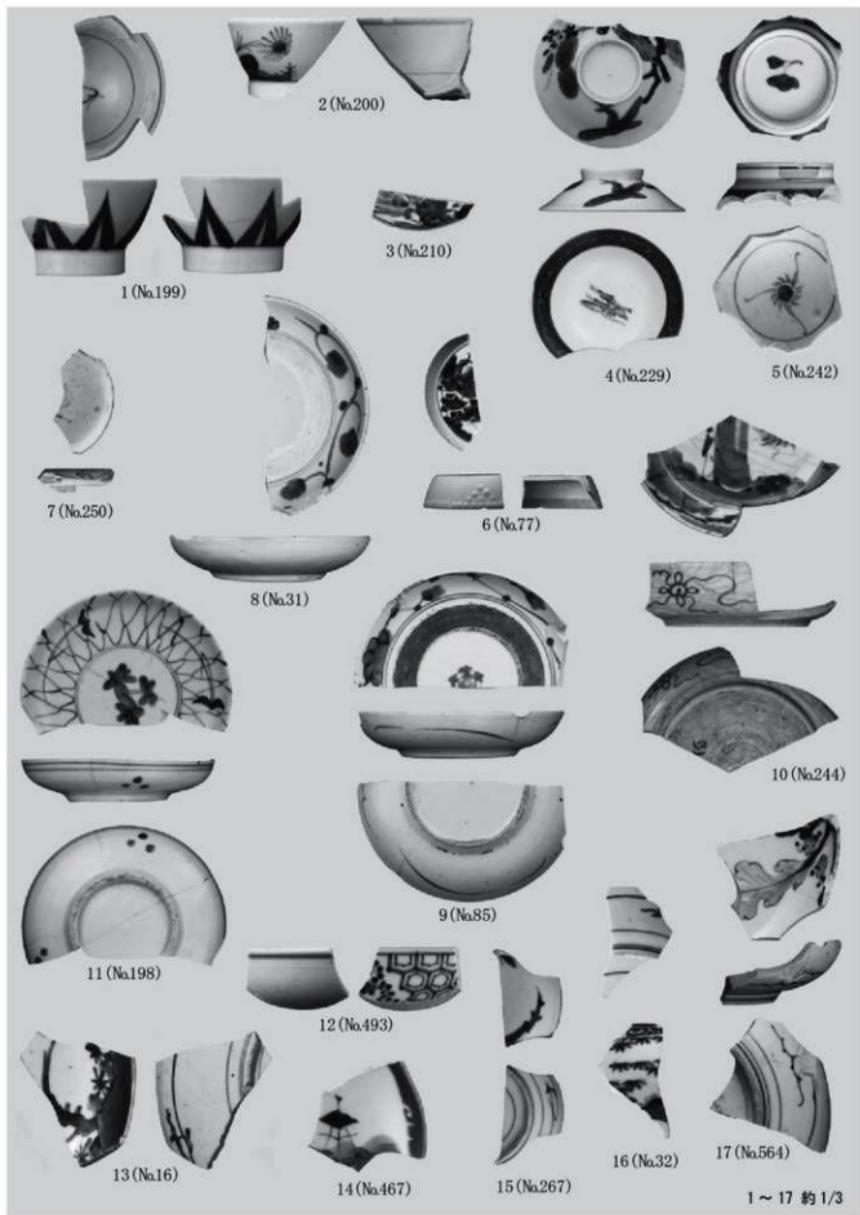


写真図版 16 4 区出土遺物 (2) 陶器②

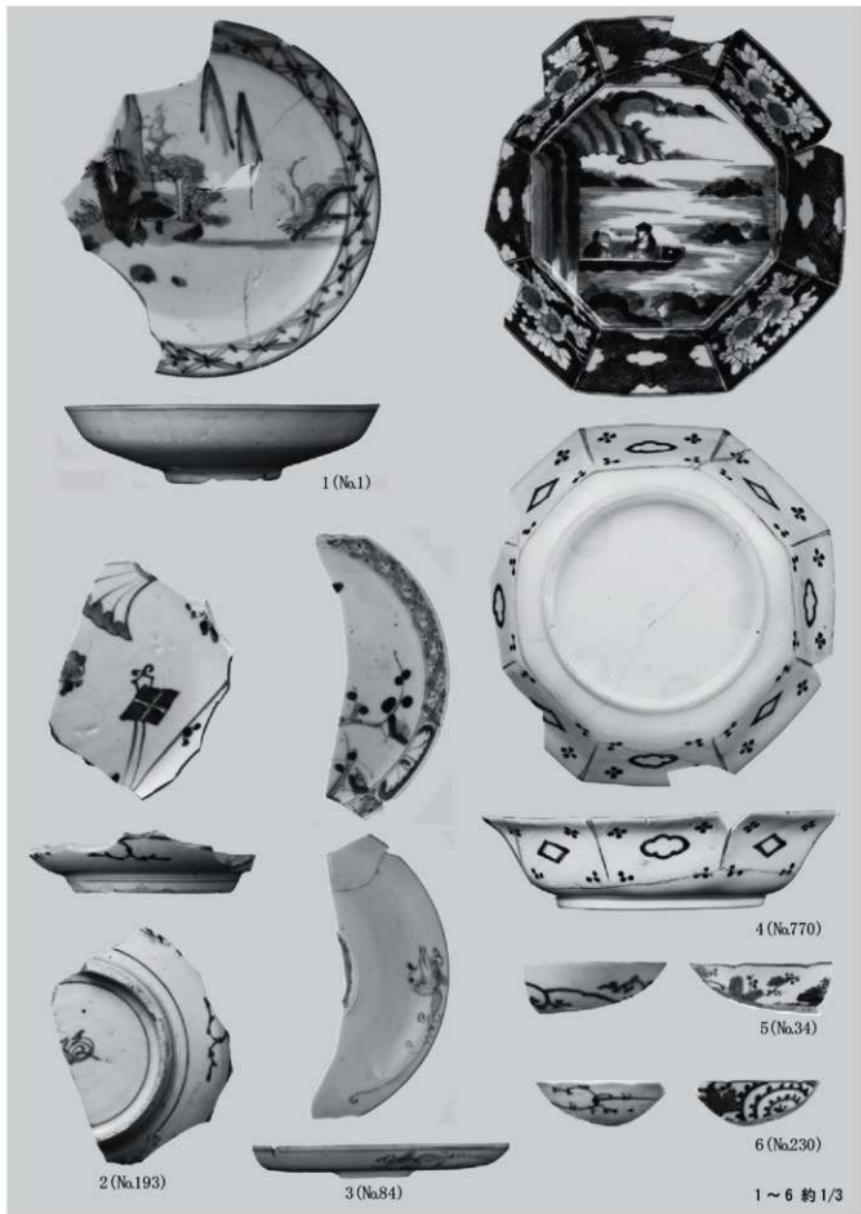


写真図版 17 4 区出土遺物 (3) 磁器①

6・4 区の状況



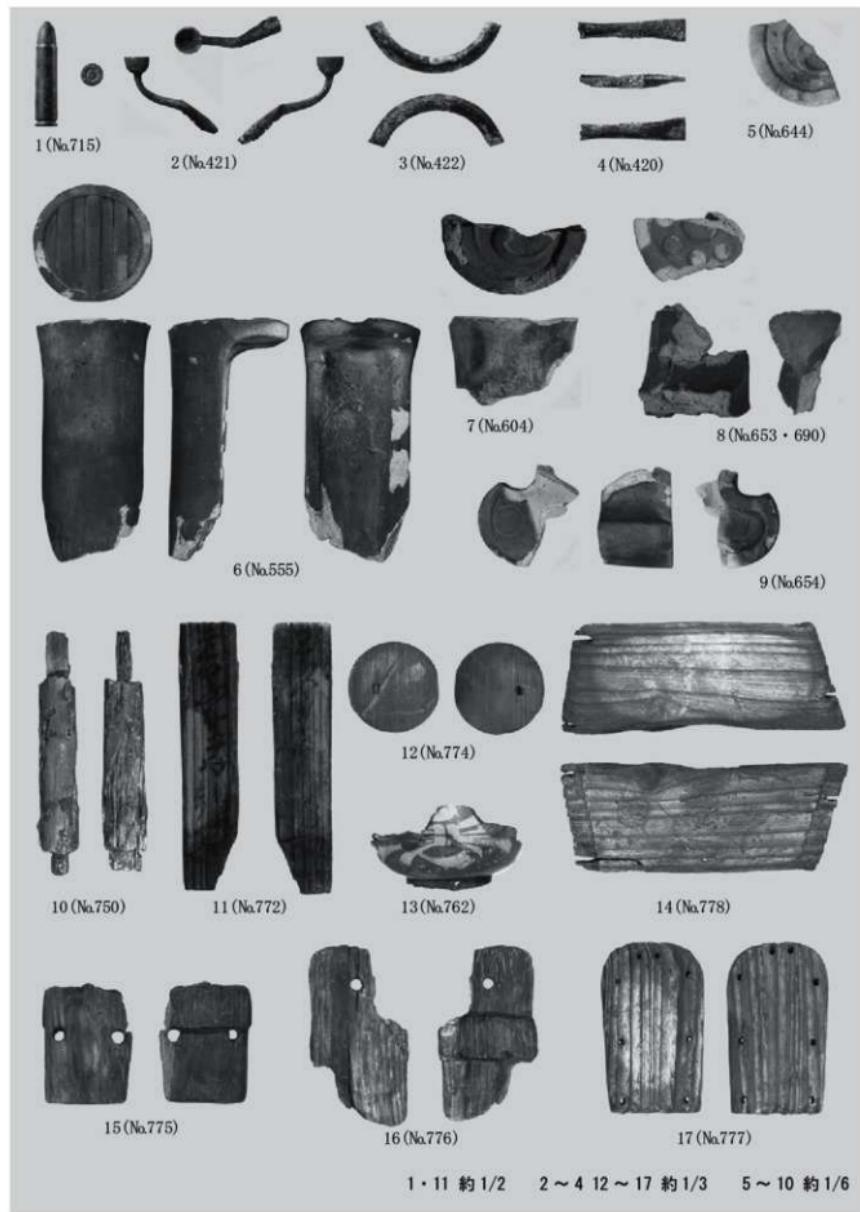
写真図版 18 4 区出土遺物 (4) 磁器②



写真図版 19 4 区出土遺物 (5) 磁器③



写真図版 20 4区出土遺物 (6) 磁器④・土師質土器・瓦質土器・土製品



写真図版 21 4区出土遺物(7) 金属製品・瓦類・木製品

## 7. 埋没堀跡の調査成果のまとめ

### 7. 埋没堀跡の調査成果のまとめ

国庫補助事業による堀跡西部の調査と今回の堀跡中央から東部の範囲確認調査により、仙台城翼門東方の埋没堀跡については以下のようなことが明らかになった。

#### (1) 埋没堀跡の位置・形状・規模について

- ①埋没堀跡は、平面形は西側の出が短く幅の広い「回」字型を呈す。
- ②埋没堀跡の西側突出部の北辺は、「長沼」南端からの距離が約 20 m あり、この間が土橋となっていたと推定される。
- ③埋没堀跡の西側突出部の東辺は、「長沼」東辺の南北ラインに概ね一致するものと推定される。
- ④埋没堀跡の西側突出部の西辺は、「長沼」西辺の南北ラインよりやや山側（西側崖面）に寄っている。
- ⑤埋没堀跡の東側突出部の北辺と「長沼」南辺の東西ラインとでは、埋没堀跡の北辺がやや北側に位置する。
- ⑥埋没堀跡の東西規模は南辺で約 98 m、南北規模は西辺で約 42 m、東辺で約 67 m を測る。
- ⑦埋没堀跡の幅は、西側の突出部で東西 35 m 前後、南辺で南北約 21 m、東側の突出部で東西約 26 m である。
- ⑧これらの調査結果から、堀の位置が判明するとともに、堀跡は近世絵図に描かれた形状に概ね一致することが確認でき、絵図が堀の形状をかなり正確に表現していることが明らかになった。

#### (2) 岸部検出の杭列について

- ①杭列は、1 区で堀南辺の北岸、2 区で堀南辺の南岸、3 区で東辺の西岸、4 区で東辺の北岸と東岸で検出され、基本的に 1 段 1 列で直線的に並んだ状態で検出された。
- ②各杭列は岸の肩部よりやや下がった標高が 27.4 ~ 27.6 m 付近で検出され、2 区や 4 区での状況から堀の掘削当初からではなく、堀が一定程度埋まった後で設置されたと考えられる。
- ③杭列が検出されなかった場所にも杭列が存在したかどうかは将来の下部や広範な調査の課題である。
- ④杭列の性格としては、2 区の堀南辺の南岸部で「土留」を示すような杭と横木による構築物の存在が確認され、護岸施設の一部であることが明らかになった。ただし、このような施設が杭列全体に共通する構造かどうかは将来の発掘調査の課題である。
- ⑤埋没堀跡の西部の調査では、太い丸材を使用した 2 段 2 列や 3 段 3 列の杭列が検出されている（「仙台城跡 7・8」2007・2008）が、それに比べると今回検出された杭列は、下部の調査を行っていないが、比較的簡素・脆弱な構造物に見える。この差異は杭列の設置目的の違いによるものと考えられるが、それがどのようなものなのかについても今後の課題である。

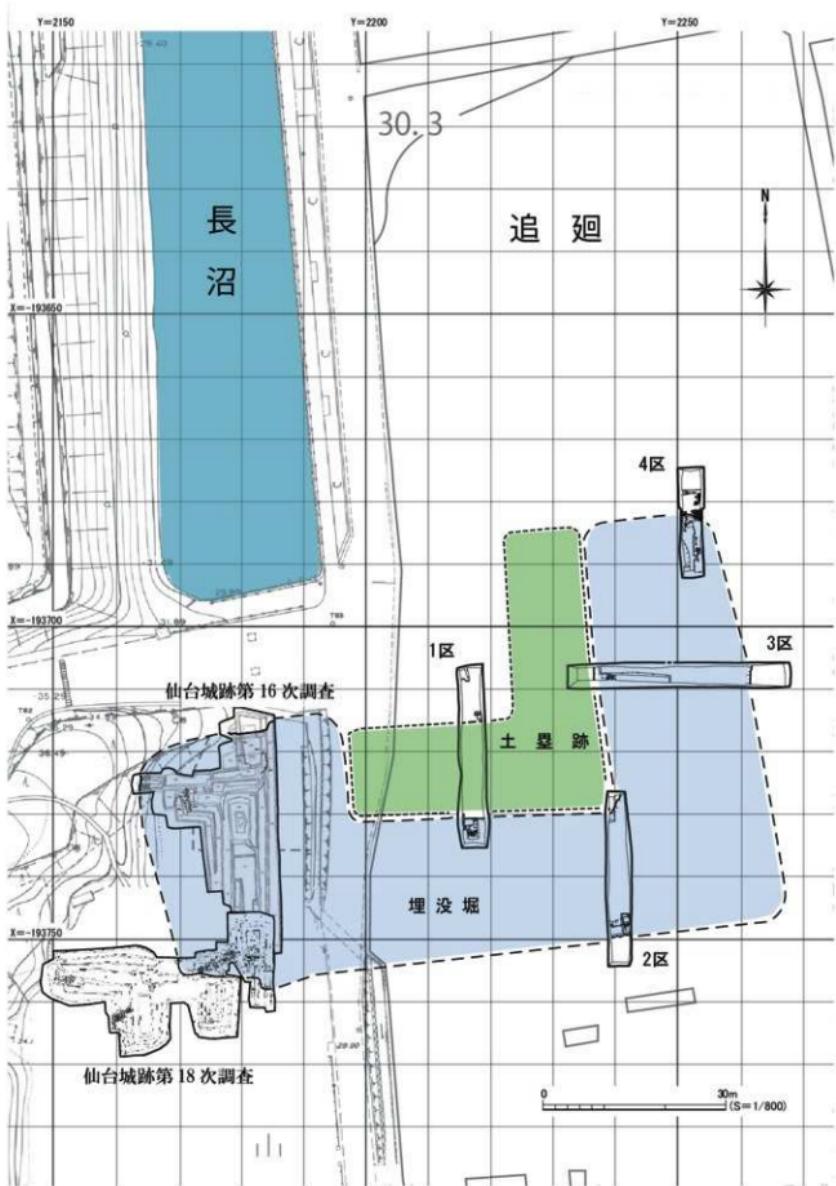
#### (3) 岸部斜面の石列等について

- ①4 区の堀跡東辺の北東角付近の岸部で検出された石列（SX-8）は、堀に伴う何らかの施設として築かれ、石の北面が揃えてあることから、堀北側の通路方向からの視線を意識して設置したと考えられる。
- ②この石列の堀側の斜面に張り付いた集石については、護岸施設としての機能が考えられる。
- ③SX-11 石列は、SX-8 石列と約 3m の間隔で平行し同じ高さで並んでいる。また SX-11 石列は、4 区の北岸側の整地層の分布範囲がほぼ一致することから、整地範囲の南端を区画する施設の可能性が考えられる。
- ④③の状況から SX-11 石列が古い（初期か？）堀の肩の位置、SX-8 石列が改修された堀の肩の位置、杭列がその後の岸の位置を示し、堀の岸の変遷を示している可能性が考えられる。

#### (4) 堀跡内側の盛土（土塁）について

- ①1 区中央付近と 3 区西端で確認された「にぶい黄褐色から灰黄色のシルトないしシルト質粘土の細かなブロック状の土壤」からなる人為的堆積土層は、近世の絵図に描かれていた土塁の基底部となる盛土層と考えられる。
- ②1 区の盛土層の南北幅は約 15.5m あり、これが堀跡南辺の北岸に沿って東西方向にのびる土塁の基底付近の幅と考えられる。

III. 埋没堀跡の調査（仙台城跡追廻地区第7次調査）



第30図 埋没堀跡と土塁の推定位置

## 7. 埋没堆跡の調査成果のまとめ

- ③ I 区中央北寄りで確認された盛土層と整地層の東西方向の境界線を西方に延長すると、堆跡西側突出部の北岸のラインにほぼ一致する。この位置関係は、近世絵図と概ね一致する。
- ④ 堆跡東側突出部の西岸側にも土壘の存在が確認できたが、幅については今回の調査では明らかに出来なかった。
- ⑤ 近世絵図は、土壘についてもその形状をかなり正確に表していることが明らかになった。

### (5) 堆跡外側の整地層について

- ① I 区北部、3 区東部、4 区北部の堆岸の外側で人為的な堆積土層が確認された。
- ② この部分の堆積土層には礫や凝灰岩が砕かれたものが多く含まれるなど、土壘部分とは異なる土壤が運ばれており、堆積状況も水平を志向した状況を示している。
- ③ このようなことから、これらの土層については、近世絵図に描かれた通路や馬場あるいはその周辺を整備するために敷きならされた整地層と判断される。
- ④ 2 区南端部は堆の外側に当たるが、通路や馬場から離れているためなのか、整地に係る人為的堆積土は確認されなかつた。

### (6) 堆跡の埋没過程について

今回の調査は、埋没堆跡の位置の確認を主目的としたので、底面までの掘削は行わなかったが、調査した範囲で堆跡の埋没過程について次のことが明らかになった。

#### 〈A：埋没経過〉

- ① 堆は上部近くまで概ね自然堆積の状況で堆積している。
- ② 自然堆積の期間の中でも i : 濡潤な状態でゆっくり堆積した時期、ii : 水流により土砂が運ばれ急速に堆積した時期、iii : 比較的乾燥した状態を保ちながら周辺から雨水などとともに土砂の供給された時期、などがあったことが想定された。
- ③ 堆の堆積土上部は、礫等を含む黄褐色系の土によって人為的に大規模に埋め立てられている。
- ④ 黄褐色系の土砂による埋め立ては、1 区では 1 時期 40 ~ 60 cm、2 区では薄い自然堆積層を挟んで 2 時期 70 cm 以上、3 区では厚い自然堆積層を挟んで 2 時期 140 cm 以上、4 区では 1 時期 60 cm 以上あるが、これらの人為的堆積土層については、明治時代後半に第 2 師団により行われた追廻地区的練兵場や射撃場の整備の埋め立てによるものと考えられる。
- ⑤ 埋め立て後の堆跡は、埋め立て土の土圧による自然堆積土の脱水・圧縮により凹地が生じ、その部分に周辺の土砂が雨水などによって堆積したものと推察される。

#### 〈B：堆跡への流入土砂〉

- ① 堆跡への堆積土の供給源としては、イ : 周辺土砂、ロ : 土壘崩落土、ハ : 崖面（山側）流出土、ニ : 上位の堆（長沼）からの流入土が考えられる。
- ② 各調査区の堆跡堆積土の状況からみると、1 区から 3 区の堆積土は急激な水流の影響は少ない状況で堆積していたと観察されるが、4 区は強く長時間にわたり水流の影響を受けながら堆積した時期（III d 層・III f 層等）の存在が想定される状況を示している。
- ③ 4 区が水流の大きな影響を受けながら堆積した理由は、4 区の基本層序の項でも記したが、大雨の際に青葉山からの水系に沿って流れ下った水と土砂が長沼南端で土橋や土壘を迂回して 4 区付近から埋没堆に流入した場合や、清水門周辺の崖地からの水と土砂が流入したことによるものと考えられる。

## IV. 広瀬川護岸石垣天端の調査（仙台城跡追廻地区第8次調査）

### 1. 仙台城跡追廻地区と広瀬川護岸石垣

#### (1) 仙台城における広瀬川護岸石垣

広瀬川護岸石垣は、仙台城の最古の絵図である正保2年（1645）の「奥州仙台城絵図」（第31図1）以来多くの絵図に描かれており、近世から現代まで残る仙台城の重要な施設の一つである。正保絵図による石垣の形状は、仙台城の北辺を区画する二の丸北側の堀跡から続く「千貫沢」が広瀬川に注ぐ地点から、「大橋」の下を通って追廻地区の東側を巡り、本丸の崖下まで弧状に築かれていたようである。この石垣について絵図中には「石牆 高二間 長三百六十間」とある。現在は、大橋の北側は橋に近い部分には石垣が存在するが、段丘崖が発達して高低差が10m前後の急崖地となっている千貫沢に近いところの石垣は所在が不明である。大橋の北側から追廻地区が広瀬川の蛇行に沿って東側に張り出した部分については、河岸段丘面と広瀬川の河原との間に高さ4m前後の石垣があり、自然災害による崩落や発電所取水口建設などのために欠損している部分もあるが、約400mにわたって残存する。

追廻地区的南辺付近は、近世期を通じて河道が次第に東側に移動して本丸の崖下から離れている。このことと関連するかは不明であるが、寛政元年（1789）頃の絵図では確認できる南辺石垣も、安政2～3年（1855～56）頃の絵図では不明確になる。現在、追廻地区南辺の護岸石垣の所在は不明である。

広瀬川護岸石垣は、大橋から南側の追廻地区では河岸段丘面と広瀬川の河原との落差が少なく、比較的緩斜面であったため、城の防御性を高めるために広瀬川と一体となった施設として構築されたものと考えられている。追廻は、侍星敷や馬場として機能していたが、対岸の城下から望んだ際には仙台城の正面に当たり、城の構えとしても重要な地区であったと考えられる。

追廻地区的石垣は基本的に1列であるが、大橋の南側には大手道から河原へ降りる通路があり、その部分は通路の両側に分かれて石垣が築かれている。またこの付近では現存石垣の前方に石列が観察される部分があり、石垣の位置が変更・移動した場所も存在したことが推定できる。石垣の石材は、場所により自然石や割石、切石などが混在し、積み方にも違いが認められることから、何度かの修復が行われているものと考えられる。

#### (2) 広瀬川護岸石垣の過去の調査

広瀬川護岸石垣の調査は、初めに遺構現況調査（表面観察による分布調査）を行い（「仙台城跡4」2004）、その後現況測量調査（「仙台城跡3・5・6・10」2004・05・06・10）を行って記録保存を実施してきた。石垣に係る発掘調査は今回が初めてである。

### 2. 調査概要

#### (1) 調査目的

仙台市の「青葉山公園整備基本計画」に基づく「青葉山公園（仮称）公園センター基本計画」では、追廻地区に建設される公園センター『仙臺緑彩館』から広瀬川沿いの護岸石垣天端まで続くテラスの設置計画があり、ここからさらに広瀬川の河畔に降りて散策できるような通路の整備が出来ないか建設部局から文化財課に相談があった。整備の概要は、石垣の崩落個所に階段を設置しその周辺を整備するもので、現状以上に石垣等の遺構を傷つけない事を前提とするものであった。そこで、遺構を棄損することなく整備が可能かどうか判断するために当該予定地の遺構確認調査を実施した。

#### (2) 調査方法

施設建設に係る場所に、石垣脇付近から追廻地区側に東西約8m、南北約8.5mの調査区を設定し、重機により現表土層及び追廻住宅期の搅乱層を除去し、その後人力により遺構の確認および一部掘り下げを行った。溝及びビット以外は基本的に掘り下げを行わず、平・断面図作成と写真撮影による記録を行った。調査後は、石垣裏込め石材や石列を不織布で覆う等の養生を行い、重機により発生土で埋め戻した。

## 2. 調査概要



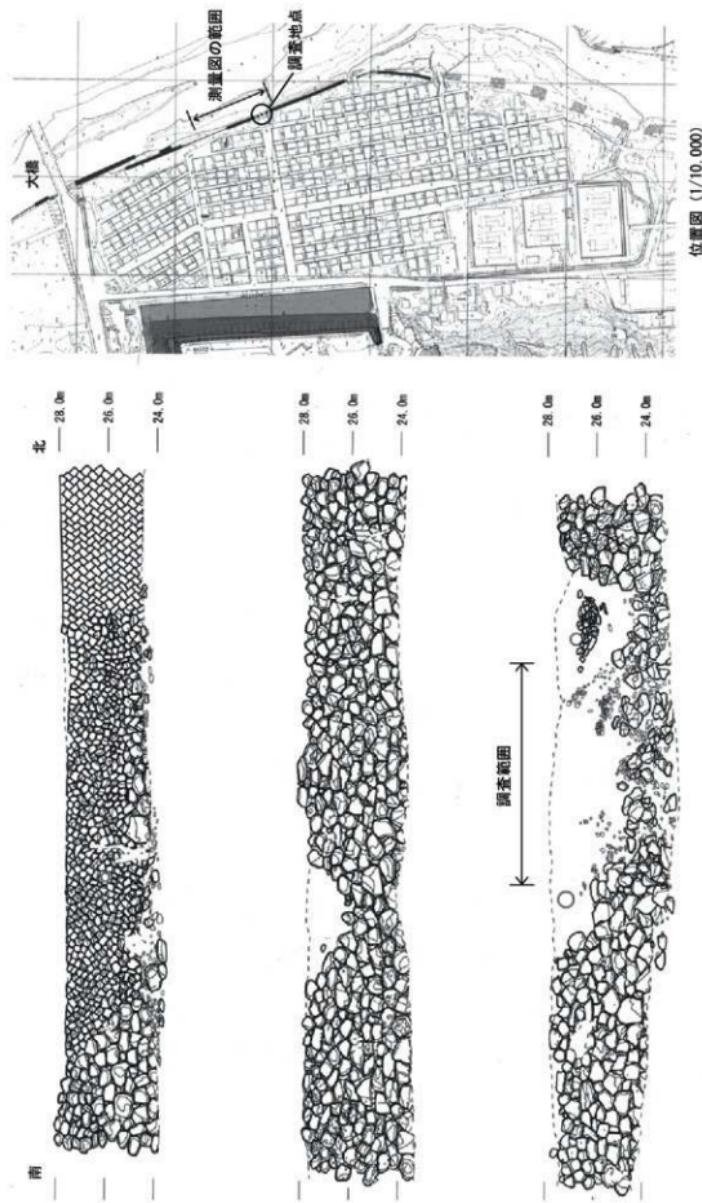
1 「奥州仙台城絵図」(1645年)に描かれた広瀬川護岸石垣（点線の右側）



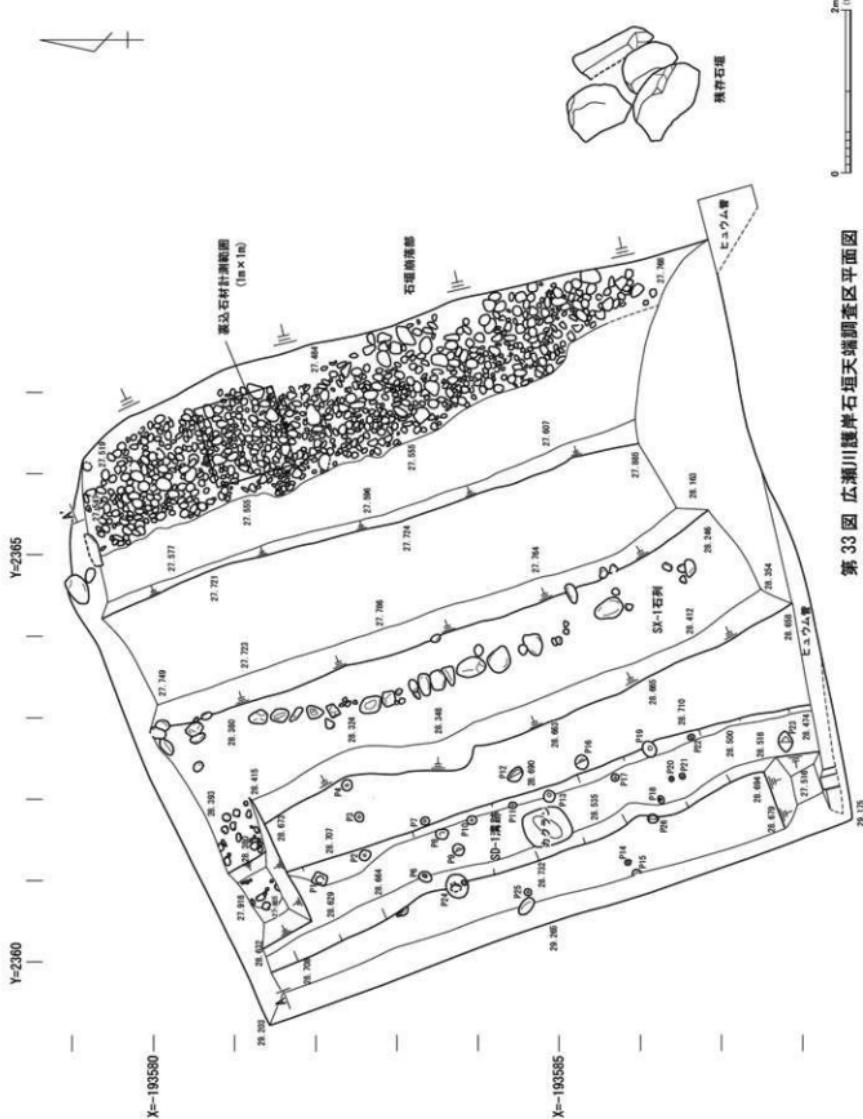
2 2005年頃の護岸石垣の様子と今回の調査箇所

第31図 絵図に描かれた広瀬川護岸石垣と調査箇所の近況

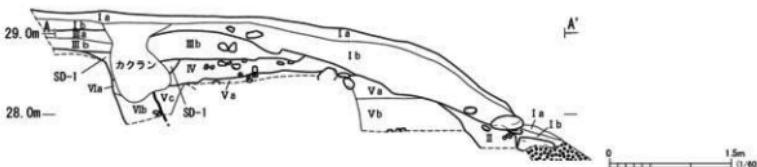
IV. 広瀬川護岸石垣天端の調査（仙台城跡追側地区第8次調査）



第32図 仙台城跡第14次調査 広瀬川護岸石垣（大橋南側）立面図（1/200）



第33図 広瀬川體岸石垣天端調査区平面図



第34図 広瀬川護岸石垣天端北壁土層断面図

第6表 広瀬川護岸石垣天端北壁土層記

層No.	土色	土質	備考	成因
Ia	10YR3/3 暗褐色	シルト	表土 径0.5~10cmの礫を含む	現表土
Ib	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	コンクリートを一部に含む	近・現代の崩落土
II	10YR3/3 暗褐色	シルト	礫を少量含む しまりが弱い	石垣崩落後の流入土
IIIa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径0.5~11cmの礫を含む 一部に硫酸鉄を含む 西壁に砂を層状に含む	追跡地区的整地層か
IIIb	10YR3/4 暗褐色	シルト	硫酸鉄を少量含む 径0.5~10cmの礫をまばらに含む ガラス片を含む	
IV	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	硫酸鉄を多く含む 径1~3cmの礫を少量含む	
Va	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径1~7cmの礫を多量に含む	石垣背後の盛土層
Vb	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径1~7cmの礫を多量に含む 粗砂を多量に含む	
Vc	10YR3/2 黒褐色	シルト	礫をわずかに含む にぶい黄褐色土のブロックを含む	
VIa	10YR5/6 黄褐色	シルト		当該地の沖積層
VIb	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト		
SD-1	10YR4/4 暗褐色	シルト	径1~5cmの礫を含む	

### (3) 基本層序

調査区は、石垣天端から石垣の肩部にかけての斜面にかかる場所である。Ia層は暗褐色シルトの現表土。Ib層はコンクリートを含む灰黄褐色シルトで、追跡住宅方向から石垣崩落個所に押し出されて堆積した近代以降に形成された土層である。石垣上部の平坦面には薄く、斜面部で厚く堆積している。II層は礫を含む暗褐色のシルト層で、石垣崩落直後に斜面上部から流入して形成された土層と考えられる。III層は上部にはガラス片が含まれるにぶい黄褐色から暗褐色のシルトで、追跡住宅期の整地に係る土層と考えられ、天端の平坦面に分布する。

IV層・V層は、河原から採取したような礫や砂を多量に含む黄褐色土を主体とする土層である。調査区西側で地盤の沖積層との境に立上がりが確認できることから、石垣背後の人為的盛土層と判断した。VI層は黄褐色ないしにぶい黄褐色のしまりの強いシルト層で、この付近の地盤を形成する沖積層と観察される。

なお、調査区南辺に沿って検出されたヒュウム管についてはIIIa層上面から掘り込んで埋設されたものである。

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 調査区の概要

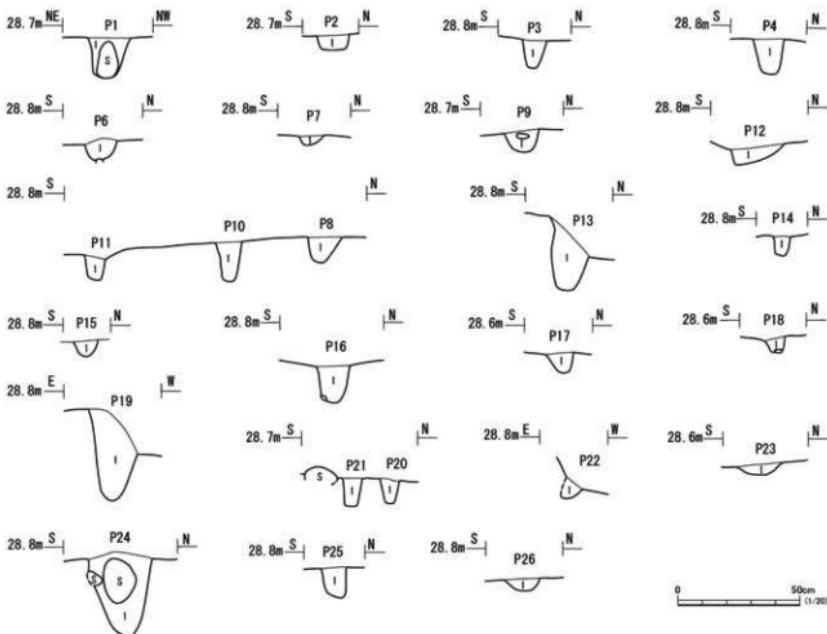
調査区の位置は、大橋から南側に約200m下った広瀬川西岸に南北方向に築かれた石垣の天端に当たる。この付近の石垣は高さが4m前後ある。仙台城跡の第14次調査（「仙台城跡6」2006）の時点では、何らかの自然災害によって幅約16mにわたって崩落し（その後「東日本大震災」の際に崩落範囲が北側に1m前後拡大した）、現状では高さ約1mが残存している。石垣の石材は、自然石ないし荒削り石が使用され、布積みが意識された部分と乱積み状の部分が混在する。崩落面からは南北2本のヒューム管による排水溝がある。住宅方向から河原に向かって突き出している。

表土を除去した調査区は、西半部はほぼ平坦であるが、IIIb層分布域の東端付近から緩やかに河川方向に傾斜する。調査区の東端部では、現天端面から約140cm下がった面で石垣の裏込めの残存上面が検出された。

調査区西辺から約1.5mのところで検出された地盤である沖積層（VI層）の東端から、裏込め石材の検出範囲の西端までの約4.5mの範囲が石垣の裏盛土層となっており、その層厚は調査範囲で1m以上ある。

今回の調査ではIV層からV層上面が遺構検出面となり、溝跡1条、石列1条、ピット群、裏込め石材が検出された。

### 3. 検出遺構と出土遺物



第35図 広瀬川護岸石垣天端検出ピット断面図

第7表 広瀬川護岸石垣天端検出ピット土層注記

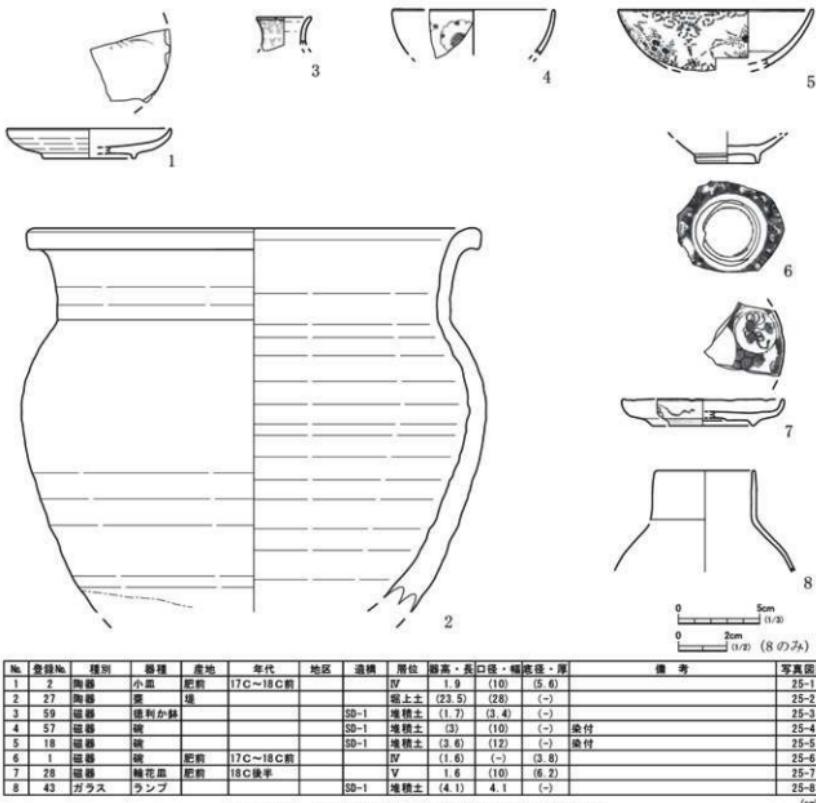
遺構	層位	土色	土質	備考
P-1	1	10YR4/4 棕色	シルト	径17cm台の礫を含む
P-2	1	10YR4/4 棕色	シルト	炭化物を少量含む
P-3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-5	欠番			
P-6	1	10YR4/4 棕色	シルト	径7cm台の礫を含む 炭化物を少量含む
P-7	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-8	1	10YR4/4 棕色	シルト	炭化物を少量含む
P-9	1	10YR4/4 棕色	シルト	灰黃褐色粘土質シルトを部分的に含む 炭化物を多く含む 径1~2cmの礫を含む
P-10	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-12	1	10YR4/4 棕色	シルト	炭化物を少量含む
P-13	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む

遺構	層位	土色	土質	備考
P-14	1	10YRS/4 にぶい黄褐色	シルト	
P-15	1	10YR4/6 棕色	シルト	
P-16	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む 径2~3cmの礫を含む
P-17	1	10YRS/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-18	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径2cmの礫を含む 炭化物を少量含む
P-19	1	10YR4/4 棕色	シルト	炭化物を少量含む 径6cmの礫を含む
P-20	1	10YRS/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む 径3cmの礫を含む
P-21	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径2cmの礫を含む
P-22	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む
P-23	1	10YR4/4 棕色	シルト	炭化物を少量含む
P-24	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物をまばらに含む 径6~18cmの礫を含む
P-25	1	10YR3/3 黑褐色	シルト	炭化物を微量に含む
P-26	1	10YRS/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を少量含む

### (2) 検出遺構

#### SD-1溝跡

調査区の西壁に沿って南北方向にのびる。上面で幅100cm前後、検出面からの深さは10~20cmで、断面形は浅い



第36図 広瀬川護岸石垣天端出土遺物実測図

U字形である。堆積土は小縫を含む褐色のシルトである。底面で小型のピットが多数検出されているが、柱痕跡を確認できたものはない。また、溝とピットの関係も明らかでない。

溝跡の堆積土中からは陶磁器の小片など多数の遺物が出土している。主なものとしては口縁部付近に摺り絵の瓔珞文のある瓶（No. 59）、19世紀中葉～後葉のすり絵の碗（No. 18、57）、茶色透明のガラス瓶の肩部付近の破片及びランプのほかと考えられる無色透明ガラス製品（写真図版 25-8・9）などがある。

遺構の年代については、出土遺物から19世紀中葉以降と考えられる。

#### SK-1 石列

SD-1 溝跡と裏込め石材の間で、やや湾曲するが直線的に調査区の北壁から南壁まで約7mの範囲で南北方向に並んで検出された。各石材はV層に埋まった状態で検出され、IV層に覆われている。石材の大きさは15cm程度から最大36cmまである。石材の並び方に全体的な統一性は認められない。

#### ピット群

石垣天端西半部の平坦面で、溝跡と周辺から25基が検出された。直径が8cm～27cmであるが、比較的小型のもの

#### 4. 広瀬川護岸石垣天端の調査成果のまとめ

のが多い。柱痕跡の確認されたものはない。P1とP24は堆積土内から大型の円礫が立った状態で出土している。ピット相互の関係は、SD-1構跡の東壁の内外に並ぶように見えるが、有意な関係かどうかは明らかでない。

##### 石垣裏込め石材と裏盛土

護岸石垣の裏込め石材は、今回の検出面で130cm前後の幅で石垣とほぼ平行に積まれている。断ち割りを実施していないので、裏側の盛土層（IV層・V層）とどのような手順で積まれていたのかは明らかでない。石垣崩落後の現状では標高で27.5m付近から下部が残存し、石垣基部（河原面）からは約2.5mの高さまで残っている。

裏込めに使用された石材は、付近の河川から採取されたと考えられる円礫である。礫は径が2~3cmのものから20cmを超えるものまで混在するが、径5~10cmのものが主体を占める。第33図のサンプル地点の1m<sup>2</sup>中の石材は、3~5cm:38石・6~10cm:58石・11~15cm:21石・16~20cm:3石・21cm以上:1石の計121石であった。

裏盛土は基本層IV層とV層で、小型の礫や砂を多量に含むシルトないし砂質シルト層で、ほとんど混入物のないシルトからなる地盤の自然堆積層のVI層とは区別される。調査部分の盛土層の幅は、石垣裏込めの西端側から約4.5mである。盛土層は現状で石垣基部から高さ約3mまで残っているが、本来は石垣同様に約4mほど積み上げられていたと推定される。この盛土層は、護岸石垣の築造の際に、石垣の計画ラインと河岸段丘の斜面の間に盛られ、裏込め石と共に石垣の背面構造を成したものと判断される。

#### （3）出土遺物

SD-1構跡以外の出土遺物としては、表土層から堤焼のナマコ軸の甕（No.27）、IV層中から17世紀後半から18世紀前半頃と見られる肥前陶器の灰釉小皿（No.2）と肥前染付の碗（No.1）が、V層からは18世紀後半と見られる肥前染付の皿（No.28）などが出土している。

#### 4. 広瀬川護岸石垣天端の調査成果のまとめ

##### （1）検出遺構について

- ①この部分の護岸石垣は、崩落した石材で下部が埋まっているため、石垣自体がどの程度残存しているか不明であるが、裏込め石材は、石垣基部より約3.5m、標高で27.5m付近まで残存していることが明らかになった。
- ②裏込め石材は、幅が約130cmあり、直径3~10cmの河原石が主体となっている。
- ③裏込め石材の背後には、調査部分で幅約4.5mの裏盛土層が存在することが明らかになった。
- ④石垣天端の平坦面では、石垣と平行に南北方向に並ぶ石列1列と構跡1条、及び多数のピットが検出された。
- ⑤SD-1構跡については、堆積土中の出土遺物から19世紀中葉以降の遺構と考えられる。
- ⑥SX-1石列については、時期・性格ともに不明である。
- ⑦ピット群については、柱痕跡が確認されたものではなく、組み合わせも不明で、用途等は明らかでない。

##### （2）護岸石垣の年代について

広瀬川護岸石垣は、正保2年（1645）の「奥州仙台城絵図」に描かれていることから、17世紀初頭の仙台城築城から、17世紀半ばまでに構築されたと考えられる。ただし、現状では野面積みの部分や若干加工された石材の部分、切石積みの部分があり、それぞれがまた異なる積み方をされていることや、現石垣の前面に別の石列があることなどから、城内各所の石垣と同様に自然灾害などに対応して何とかの積み直しが行われたと推定される。

今回天端を調査した場所の石垣は、自然石ないしそれに近い石材を使用して積まれているが、石垣の裏込め層と考えられるIV層とV層からは、それぞれ17世紀後半から18世紀前半頃と見られる陶器と18世紀後半と見られる磁器が出土していることから、18世紀後半以降に何らかの事情により何とかの積み直しが行われているものと推察される。

なお、今回の調査では当該区の天端で石列等の遺構が検出され、さらに崩落石垣の背後で裏込めや盛土が確認されたことから、遺構の保存のために石垣天端のデッキから河原に下りる通路（階段）の設置計画は中止となった。



1 調査区付近の広瀬川護岸石垣（東から：2005年）



2 広瀬川護岸石垣天端の調査状況（南から）

写真図版 22 広瀬川護岸石垣と調査状況

4. 広瀬川護岸石垣天端の調査成果のまとめ



1 調査前の石垣天端の状況（北西から）



2 I～III層除去後の状況（南から）



3 調査区北壁土層断面（西半）



4 調査区北壁土層断面（東半）

写真図版 23 広瀬川護岸石垣天端検出遺構 (1)



1 SD-1 溝跡（南から）



2 SX-1 石列（南から）



3 SX-2 裏込め（南西から）



4 SX-2 裏込め細部（石材計測部付近：西から）

写真図版 24 広瀬川護岸石垣天端検出遺構（2）



1 ~ 9 約 1/3

写真図版 25 広瀬川護岸石垣天端出土遺物

## 【参考文献】

- 仙台市教育委員会 『仙台城跡 1』仙台市文化財調査調査報告書第259集 2002  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 6』仙台市文化財調査調査報告書第297集 2006  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 7』仙台市文化財調査調査報告書第309集 2007  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 8』仙台市文化財調査調査報告書第330集 2008  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 10』仙台市文化財調査調査報告書第374集 2010  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 17』仙台市文化財調査調査報告書第500集 2022  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 追廻地区遺構確認調査』仙台市文化財調査調査報告書第350集 2002  
仙台市教育委員会 『仙台城跡 (仮称)公園センター建設に係る追廻地区第4次～第6次発掘調査報告書』仙台市文化財調査調査報告書第444集 2016  
仙台市史編さん委員会「第二部 仙台城と近世城館」『仙台市史 特別編7 城館』2006

## 報告書抄録

仙台市文化財調査報告書第 508 集

## 仙 台 城 跡

青葉山公園整備事業に係る

追跡地区

埋没発掘（第 7 次）広瀬川護岸石垣天端（第 8 次）

発掘調査報告書

2023 年 3 月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12

仙台市役所上杉分庁舎 10 階

文化財課 TEL. 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区若竹三丁目 1-14

TEL. 022 (231) 2245㈹



